

リトライ wonderful World この素晴らしい世界に祝福を！

花タフ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔王を倒したカズマ達一行 それから数年経った ある日人類は新たな闇によって脅かされた ……

この作品はこの素晴らしい世界に祝福を！の最終話後の話として作っています

注意 この作品にはこのファンに出てくるキャラは出てこず基本的オリキャラとの会話が多くなっております

題名を変えました

## 目次

### 終わりの始まり編

この素晴らしかった世界に別れを	1
この素晴らしかった世界に終焉を	7
この世界に、さよならを	15
このリトライの世界に確認を	27

### 天界修行編

このパーティに真実を	36
この天界でリミットを	49
この天界で修行をPart1	58
この天界で修行をPart2	71
この天界で修行をPart3	83
この天界で修行をPart4	92

### 究極の聖戦編 (アルティメットバトル)

この時の女神に真実を	103
あの水の女神の真実を	119
この地上に帰省を	127
この元幹部達と再会を	135
この悪魔と決闘を	142
この仮面の悪魔に決着を	151
この修行にひと手間を	169
この天界に襲撃が	175
この天界で戦いを	182
この幹部の足止めを	187
番外 この作品の振り返りを前編	196

番外 この作品の振り返りを後編	202
この幹部へ鉄槌を	215
この聖なる剣に誓いを	225
この剣の神に冥福を	240
破滅へのカウントダウン編	
この展開に驚愕を	247
この謎の人物の正体を	257
この英雄達のお話を	269
この冒険者の過去話を	276
この天界に目覚めを	282
キャラクター設定集 (仮)	293
この修行に終了を	299
この幹部との戦いを	306
番外 作者とカズマ達が語りあう回	317
このクルセイダーの生き様を	325
あの悪魔の復活を	344
この冒険者たちの戦いを	359
この破壊神に決着を!	392
最終回 この素晴らしい世界よ永遠に	431
後日談	
最終回を迎えて作者とカズマ達が語り合う	464
後日談 あれから8年後	468
実はこんなことも考えていた裏設定集	484
Another story 編	
Another story 5年間の地上	487

終わりの始まり編

この素晴らしかった世界に別れを

カズマ「エキスプローション！」

この世界の魔王はあるひとりの冒険者の魔法により葬られた

カズマ「女神はチートに入りますか」

アクア「!?」

アクア「カズマ、、、」

ありがとうね」

その魔王撃退から  
数年経った

ここは駆け出しの街アクセル  
その町の近くには大きな屋敷がある  
そこには時には迷惑なパーティーであり時には頼り？になるパーティーが住んでいる

そしてそのパーティー御一行は

カズマ「こんの駄女神！ また  
カジノにいつて散財しやがってー！罰としてその羽衣売ってきてやるー！」

アクア「うわぁーんカズマさんそれだけはやめてー 女神としてのアイデンティティなのよー」

カズマ「何が女神だこの駄女神 ホントの女神ならカジノで散財なんてしてこねーんだよー！」

アクア「うわぁーんやめてー」

めぐみん「相変わらずアクアはアクアですね、、、」

ダクネス「そうだな全然変わってないな、、、」

こんな感じになっていた、、、

数時間後

カズマ「はあ、、、 はあ、、、

くっそ羽衣奪えなかったか　なんでステイールがきかねーんだよ」

アクア「バカねカズマ私はもう　本来あつた女神の力を取り戻したのよ

カズマごときのステイールが効くわけないじゃない

ブークスクス？w」

カズマ「そいえば　お前の部屋に高級シユワシユワあつたよなー

」

アクア「へ？　まってカズマさん何する気なの」

カズマ「今からお前の部屋のシユワシユワ飲みきって来てやるー」とリビングからカズマが飛び出すと

アクア「あー待つてカズマさん　それだけは　それだけはー！」  
それを追いかけたアクア

めぐみん「また似たようなことやってますね、、、」

ダクネス「そつ　そうだな　だがやはりカズマは余程の鬼畜だ  
はあ、、、 はあ」

めぐみん「興奮しましたよね」

ダクネス「し、、、 してない」

めぐみん「はあく　あつ　ここ王手ですね」

ダクネス「なっ！いつの間に！」

と平和そのものに過ごしていた

だが数時間後

この幸せが

簡単に壊れてしまった

騒がしくも楽しそうな屋敷

しかしこの後その幸せを壊すものが

？「この世界に来たのは、何千年ぶりだ、やはりこの世界も1000年もあれば変わるか、だが 少々物足りんな、」

カズマ「はあ、はあ、」

アクア「はあ、はあ、」

めぐみん「2人とも喧嘩は終わりましたか？」

ダクネス「全くお前たちはいつまでたっても変わらないな」



アクア「ダクネスだけには言われたくないわ」

ダクネス「なっ!」

カズマ(あの魔王撃退から5年 ほんとにこのパーティは変わらな  
い  
変わったといえればめぐみんが20歳になり胸もどことなく成長し  
てきていると思うしダクネスもまた大きくなってる気がする)

めぐみん「カズマ 今何かいかがわしいことを考えてましたね」

ダクネス「なっ! もしや私のことを想像して あられもない姿を妄  
想しているのか!」

カズマ「んな事考えてねーよ! いや さほんとに5年近く経った  
のに変わらねーなってな」

めぐみん「ですね」

ダクネス「そうだな」

その時だった

アクア「!!!!!!」  
!!!!!!?」

カズマ「?どうしたアクア？」

アクア「なっ何よこの禍々しい程の魔力圧は」

めぐみん「魔力圧? 一体何を言ってるんです？」

ダクネス「一体どうしたんだアクア」

カズマ「おっ おい あれ見てみる！」

カズマが窓の外を指さすと

アクセルの門の前に暗黒の雲が広がっていた

この素晴らしかった世界に終焉を

アクア「なっ何よあれ」

めぐみん「今まで見たことがないのです」

カズマ「とにかく行くぞ」

どう一行は雲に向かって走る

一行が向かうと そのには冒険者のみんなも集まっていた

カズマ「ダスト！」

ダスト「おうカズマ来たか」

カズマ「一体なんなんだあの雲は」

ダスト「分からねえ 俺達もこの雲を見て向かってきたんだ」

めぐみん「クリス！」

クリス「あっ！ めぐみん ダクネス アクアさん」

ダクネス「一体何があつたんだ」

クリス「分からない 急に魔力の圧が飛んできて

空見たらあ

の雲が 出てきたから」

その時黒い雲から声が聞こえてきた

?? 「久しぶりに地上に来てみれば、  
まだ人類は滅んでな  
かったらしいな、」

全員「!？」

カズマ「だっ 誰だ」

?? 「なるほど、ヤサカやその子孫が  
しくじったわけか、  
使えない奴らだ」

カズマ（魔王を名前を知っている？ 一体何者だ、）

雲から何かが降りてくる

デインラス「我が名はデインラス

この世界の創造者にして破壊者 黄泉の神だ」

ダクネス 「デイニラスだと、、、」

アクア 「黄泉の、、、神、、、」

めぐみん 「創造者にして」

カズマ 「、、、破壊者、、、だと?」  
ダスト 「黄泉の神だと! ふざけるな あんた ふざけんのもたい  
がいにしろよ!」

デイニラス 「ほう 我を知らんとは、、、 この世界では相当  
なことをしたつもりだったのだが、、、」  
ダクネス 「相当なことだと?」  
ソナタらに聞く今は 何年だ、、、

めぐみん「はあ？ 何を言ってる？」

デインラス

「何年だと聞いている！」

と言った途端 デインラスからとてつもないプレッシャーをその場にいた者が感じ中には気絶していた者もいた

めぐみん「!!? ○ …… ○○○○年です……」

デインラス「ほう なるほど なるほど

あれからそんなにたっていたか

道理である何も無い野原にこんな町ができてるわけだ……」

カズマ「なんだかアクセルができる前のところを知ってるような口ぶりだな」

デインラス「ん？ お前、」

とデインラスがカズマに視線を向ける

デインラス「貴様 どこかであったか？」

カズマ「は？ あった事ねーよ なんだよ急に」

デインラス「む？ やはり勘違いか 長いこと眠らされていると記憶もあやふやになるなー」

デインラスが首を鳴らしながら地面におりて来る

デインラス「お前の外見……なるほど……」

カズマ「おっ おいアクア あれ黄泉？の神なんだろうなんか知って、、、！」

とアクアの方に顔を向けると

アクア「ガタガタガタガタ」

「恐怖いや それをゆうに超えるような絶望したような顔をしていた、、、」

そしてそれはアクアだけではなかった

クリス「ガタガタガタガタ」

同様 クリスもだ

カズマ「お おいアクアしっかりしろ！」

とカズマがアクアの肩を振る

アクア「な、、、なんで なんであれが、、、 あいつは

、創造主様によって、」

ダクネス「おいクリスしつかりしろ！」

クリス「あ、、有り得ません、、

あの方が、、また、、」

と2人とも意識を保つのもやつとような状態だった

デインラス「ん？ 何故か神の魔力を1つ

いや2つだな1つ神聖な魔力を放っているが、、

もう1つは魔

力が弱い、、いや 隠しているのか、、」

デインラス「まあいい 今更神がこの場にいようが関係ない、、」

カズマ「ど どうゆう事だよ、、」

こゆうことだよ



とデイニラスが小さな紫色の玉を出した、、

めぐみん「な なんですあれ」

デイニラス「これはこれは俺の魔力をたまにしたものだ まだこんなもんだが時間が経てばこれは後ろの街よりも大きくなる、、」

カズマ「そんなことをして、、 何をするつもりだ！」

デイニラス「察しが悪いなー お前、、 日本人ならなんとなくわかんだろ？」

カズマ（?! こいつ俺のことを！）

デイニラス「この玉使って

この世界を

「1から作り直すんだよ」

この世界に、、、 さよならを

カズマ「世界を作り直す? …、  
何言ってるんだよ、、、」

デ이니ラス「だくかくらく この玉使って世界を作り直すの 察し  
わりーな近頃の人間は  
詳しく言うとな この玉を使ってこの世界を

破壊するんだよ」

一同「!? ?!」

カズマ「ふざけるな なんでこの世界を破壊するんだよ!」

デ이니ラス「なんでって言われても 作り直すためだよ」

カズマ「作り直すため?」

デ이니ラス「そう 世界を作り直すつまり創造する 創造の前に破  
壊は絶対だからね」

カズマ「そもそも　なんでこの世界を作り直すんだよ！」

デイニラス「そんなの神の気まぐれだよ」

カズマ「気まぐれ、、、だと?」

デイニラス「そう気まぐれ　神は気まぐれなんだよ世界を創造するのにも破壊をするのにもただの気まぐれ  
深い理由なんてない」

ダクネス「ふざけるな　そのような神の勝手で滅ぼされる生物をなんだと思ってる!」

デイニラス「今から破壊される生き物なんかに気遣いなんているか?  
どうせいつか尽きる命それが失われるだけの話だ」

ダクネス「貴様―!」

カズマ「!!　　待てダクネス!」

ダクネス「はあ―あ!」

デイニラス「うるさいなあ―、

ふん!」

デイニラスはダクネスに手をかざし  
衝撃波のようなものを出し　ダクネスを防壁の壁まで飛ばした

ダクネス「ぐわああああああ」

カズマ「ダクネス!？」

カズマはダクネスの元に駆けつける

デ이니ラス「邪魔しようとするやとあんなふうになるよ、せ  
いぜいこの玉もあと10分程度で完成するから  
人間諸君存分に足掻け」

カズマ「ダクネス！ 大丈夫か しっかりしろ !？」  
ダクネス「うう」

デ이니ラス「おおー あの攻撃をくらってまだ生きてるとは すご  
いねー 並の人間なら衝撃波の勢いで体が見るも無惨になるの  
に、」

めぐみん「よくも …、 よくもダクネスを！」

デ이니ラス「おや？ 次の相手は君かな？」

カズマ「めぐみん、」

めぐみん「カズマお願いします 8分ほど時間をください  
その間に爆裂魔法の詠唱をします」

カズマ「8分もか！ もう爆裂魔法は詠唱なくてもいけるんじゃない  
」

めぐみん「私の魔力を極限まで高め  
全力であいつに放ちますので

「そのための時間をください」

カズマ「…、わかった 任せろ」

めぐみん「頼みます カズマ」

めぐみんは詠唱を始める いつも隣で見て聞いていたからわかる  
この詠唱で放てば 今までの爆裂魔法よりも 強力なのが来るの  
が…、

カズマ「みんなー めぐみんの爆裂魔法の詠唱の時間稼ぎを頼みた  
い いいか？」

一同「おう！」

カズマ「行くぞ」

デ이니ラス「ふむ あの少女は何をするきだ？」

魔法使い達「セイクリッドクリエイト ウォーター」

魔法使い「インフェルノ！」

ゆんゆん「ライトオブセイバー！」

アクセルの魔法使い達全員でデ이니ラスに向け最大魔法で放つ  
カズマ「上級魔法の連発だ これならどうなる…、」

デ이니ラスの周りの土煙が薄くなってきた

一同「!？」

ディニラス「ほう あの魔法がこのような進化を遂げたとは、人間は研究熱心だったんだねー  
けどー

これじゃ効かないかなー」

まるで無傷だった

カズマ「怯むな！ 目的はあいつの足止めだ！ めぐみんが詠唱を終えるまで 絶対にここを通すな！」

その後ディニラスに向けての魔法は  
この7分間  
止むことはなかったが

そして

カズマ「はあ …、はあ …、」

この7分間

現状は変わらなかった

魔法使い達は魔力切れにより倒れていた

前戦向きの冒険者達もあいつを足止めするために戦った

だが あいつの周りには

その冒険者たちの見るも無惨な死体が群がっていた、、

その中には 俺の親友

ダストもその中に入っていた、、

まだ戦闘出来そうなのは 俺 ゆんゆん

アクア クリスだけ

ミツルギはあいつとの戦闘で腕を失った

実際俺もあの時のように肩に穴が空いている

ただまだ希望がある



めぐみん「出来ましたよ!! 魔力最大出力!!」

カズマ「今だ! めぐみん!!」

デインラス「む? あの魔法は、、

ほう 爆裂魔法 俺が咄嗟に考えた ネタ魔法とは しかもこの  
魔力 相当なものか、、面白い」

めぐみん「これが私の力、、

これが私の生き様 これこそが

人類屈指の最大最強魔法!

エクスプロージョン!

ゴォー——————  
ン

ド

その爆裂魔法はあの魔王戦よりもはるかに威力が上がっていた

デインラスのいた場所にはクレーターができていた

カズマ「、、、どうなった」

??「ふっふっふっ ああのネタ魔法をここまで仕上げるとは」

一同「?!」

デインラス「まあ 相手が悪かった な」

めぐみん「そ そんな、、、 私の、、、最大威力で打って無傷なんて、、、」

デインラス「いやいや 無傷じゃねーよ 仮に俺の体力を100で表すなら、、、」

0.0001くらったよ」

笑いながら言うデ이니ラス

その時誰もが絶望したあのめぐみんの鍛え抜かれた あの爆裂魔法が 無傷で終わった

誰もが絶望に叩きつけられている、

デ이니ラス「さてと、もうそろそろかな」

デ이니ラスが魔力をねった球を上にあげる

「さあこの世界ももう破壊される だが安心しろこの旧世界で破壊されたものは新世界で転生可能性はある

まあ前の記憶はないだろうが だが

新世界に転生出来ない奴もまれにいる

そいつは この玉で破壊されることにより存在自体も破壊され  
どの世界にも自分という存在が無くなる」

今さらそんなこと聞いても何も感じない

デ이니ラス「んじゃ この世界に

さようなら を」

デインラスが腕を降りたまが落ちてくる

その時

(じゃあ あんた )

(今なんて言ったの?)

(我が名はめぐみん

アークウィザードを生業とし最強の攻撃魔法爆裂魔法を操るもの)

(私はダクネス クルセイダーを生業として  
いるものだ)

カズマ(ああ 走馬灯が見えるよ、)

この世界にも色々あったな、)

けどよ

けどよ、、、

こんな終わり方はあんまりだろ、、、  
ふざけんなよ！」

カズマは泣きながら言葉出し叫んだ

そして

世界は破壊された

?? 「やつが世界を破壊したか、、、このままだと再びあの出来事がくり返されてします」

?? 「やつの破壊を阻止せねばなるまい」

?? 「だがやつをどうやって止める あいつは、、、もう」

?? 「いや まだ希望はあります」

?? 「何？」

?? 「ディニラスが破壊した世界に

あの方の、、、あの方の生まれ変わりがいたんです！」

?? 「何！ それは本当か」

?? 「じゃがどうするあの世界は破壊された あの方の生まれ変わりの者ももう」

?? 「それに関しては私が 何とかしましょう」

?? 一同「あ あなたは！」

?? 「私の方で何とかしましょう」

このリトライの世界に確認を

?? 「何とかしますとは何をするのでですか?」

△△ 「私の力を使いあの破壊された世界の時を戻します」

?? 「そゝそれは天界規定によつてゝゝ」

△△ 「あら ならその規定を書き換えてもいいのよ」

?? 「そ それはどうなんですか あなたは確かに天界だと高い地位ですが そんな簡単に変えられてはゝゝ」

△△ 「もしこのままディニラスが世界を破壊しつくしたらいつか我々の元にも襲つてくるでしょうねー」

?? 一同「?!」

△△ 「その時は我々にも手に負えなくなるかも知れません どうです あの世界の時を戻すことを賛成な方 手を」

一同がすつと手を挙げた

△△ 「皆は賛成一致のようですね では」

と△△は翼を広げてゲートを出しその中に入っていた

△△「さてと やはりこの世界は隅から隅まで破壊されてますね、、、 デイニラスも変に几帳面ですな」

と△△は何も無い空間に佇む

△△「さてと この時戻しが上手く行けばデイニラスがまだ封印されている時にまで戻せるはず、、、 そして、、、

あの方の生まれ変わりの方はどうしましょうか 、、、」

と△△が悩んでいる

△△「よしこうしときましましょうか

さてとそろそろやりますか」

△△はその何も無い空間に大きな時計型の魔法陣を出す

△△時を戻せ、、、

リタイム



カズマ（こんな終わり方、、ふざけんなよ）

??（じゃこの世界に

さよならを

カズマ「はあ!?! はあ、、はあ、、

ゆ、、夢?」

夢か、、よかつたゝにしても妙にリアルな夢だったな、、まるで  
1度体験したみたいな感覚だ、、

するとカズマの部屋に向かって誰かがドタドタ走ってくる

??「カズマ!!」

カズマ「うわ!?!びっくりしたなあ 朝っぱらからなんだよ

アクア」

こんな朝っぱらになんのようなんだ？  
また酒がないーとかそんなんじやく  
とアクアの顔を見てみると、、、

アクア「カ、、、カジュマア」

何故か泣いていた

カズマ「お おいどうしたアクア?」

どうしたんだ朝から泣き出して、、、

アクア「カジュマ、、、

カジュマさくん」

と泣きながら俺に飛び込んできた

カズマ「ちよ何ちよ なんだよアクア急に とりあえず落ち着け  
なあ?」

アクア 「グズ　　ウウ　わかった」

アクア 「このすばア」

10分後

カズマ 「どうだ？落ち着いたか？」

アクア 「うん　ごめんなさい　取り乱して」

カズマ 「全くだ　一体何事かと思ったよんでなんで泣いてたんだ？」

アクア 「、、、、実は、、、、　この世界が破壊される夢をみて、、、、　その夢の中でカズマがやられてて　その時に目が覚めて、、、、心配で　見に来ました、、、、」

カズマ 「世界が破壊される夢？　お前も見たのかよ」

アクア 「え？もしかしてカズマも」

カズマ 「ああ」

カズマ 「このすば」

カズマ「2人ともほぼ同じような夢を見たってことか、」

アクア「そんなことってあるの?」

カズマ「さあな とりあえず 朝飯食おうぜ」

アクア「ええ そうしましょう」

カズ  
アク

この  
すば

カズマ「おつめぐみんだクネスおはよう」

めぐみん「カズマ アクアおはよ、」

ダクネス「カズマ アクアおは、」

その時に

アクア「め、めぐみん? どうしたの」

カズマ「お、おいダクネス? どうした」

めぐみん「え? な 何がです」

ダクネス「な 何がだ」

アクア「何がつてなんで2人とも

泣いてるのよ

めぐみん「え？あれほんとですわ なんでもしょう 何故かさつきカズマ達を見たら、、、なんだか」

ダクネス「わ 私も 2人を見たら、、、」

カズマ「どうゆう事だよ」

めぐみん「分かりませんよ、、、 そう あくびですよ あくびすると涙ってよく出るじゃないですか」

ダクネス「そ それだ！」

カズマ「それにしてもよ あくびで出る涙の量じゃないよな」

めぐみん「、、、」

ダクネス「、、、」

カズマ「め めぐみん一体どうした、、、?!」

アクア「ダクネス？一体どうしたの、、、!？」

その時 めぐみんがカズマにダクネスがアクアに抱きついた

カズマ「どっ どうしたんだよめぐみん あ！ そっかあの時の約

束を、、、 めぐみん？」

アクア「ちよつとダクネスどうしたの 私にそっちの趣味は、、、ダクネス？」

抱きついていたためぐみんダクネスを見ると

ダクネス「グズ　ゝ　グズ　アクア、ゝ」

めぐみん「ヒグ　グズ　カジユマゝ」

泣いていた

カズマ（えっ　何なんなのもう朝からアクアに抱きつかれ次はめぐみん!!　なんなんだよ　あれかやつと俺の幸運値が火を吹いたのか　ゝ、

にしてもこれどうしよう）

アクア（ええーどうゆう状況なの!?!）

カズマは泣いている少女をただ抱きしめた

アクアは泣いている騎士を慰めた

余談だがアクアは心の中でやっぱりカズマさんはロリマなのだと思っていた

めぐ　この

ダク　すば

めぐみん「さ　さっきは取り乱してしまっすいませんでした」

ダクネス「わ 私もすまないアクア取り乱してしまつて」

カズマ「いいっていいって それよりもなにかあつたのか？」

めぐみん「、、実は 世界が破壊される夢を見たのです、、

その夢では ダクネスがやられていて カズマもアクアもみんなが、、」

ダクネス「私もなんだ、、」

カズマ「お前ら見たのかよ！」

アクア「あなた達も見たの！」

めぐみん「え？ ということは」

カズマ「ああ 俺もアクアも同じ夢を見たんだ」

めぐみん「なんと、、 こんなことつてあるんですかね パーティメンバーが同じ夢を見るなんて、、」

## 天界修行編

### このパーティーに真実を

カ「皆が同じ夢を見るって、、」

ダ「なんだか、、不吉ではあるな、、」

その時 突如リビングが光に包まれた

ア「な！ 何!?!」

すると徐々に光が収まってくる すると

△△ 「どうやら、、リタイムは成功したようですね」

ダ「な、、何者だ」

△△ 「ご安心してください決して怪しい者ではありません」

カ「怪しくない者は普通光出しながら来ないよ!」

△△ 「そ、、それはすみませんでした」



ア「そうよ、、、でもなんでママがここに？ わざわざ天界から降りてきたの？」

カ「そう なんでママさんがこんなところおい今なんて言った？」

ダ「ア、、、アクア？ 今なんて言ったんだ？」

ア「え？ わざわざ天界から降りてきたの？」

め「違いますその前です！」

ア「ああ なんでママがここについて、、、」

カ ダ め 『ママーーーーーー?!』

ア「何よそんなに珍しいこと？ 神に親がいるってことが」

カ「そこじゃない!? この人がお前のママ?!」

ア「ええ そうですけど」

め「ホントのホントにですか？」

ア「ええホントのホントよ」

△△「あなたをお世話してた時を思い出すわねー 何せあなたは1

番手を焼いたから」

カ「思い出に浸るのもいいのですが、あなたの名前を聞いた  
いのですが」

△△「ああそうでしたね　こほん

私は　リミル　時の女神　リミルです」

ダ「時の女神、、、リミル、、」

め「ですが、、なぜあなたがここに来たのですか？」

リ「そうでした、、　実はあなた達パーティに重要なことを伝えるに  
来ました」

カ「重要なこと？」

リ「はい　そのことを伝えるには皆様を天界へと連れていかなくて  
は行けません」

め「天界ですか!？」

リ「ええ　あなた達とエリスに話すことがあるので」

ダ「エ、、エリス様!？」

リ「おや?もしかして　エリス教徒なのですか?」

ダ「は、はいその通りでございます」

リ「なるほど、それはエリス喜ぶかもしれないね　では早速行きましょう」

ア「え？もうなの？」

リ「実は時を超えての下界降りには時間に限りがあるの　だからもう行かないと」

カ「わ　分かりました　いくかお前ら」

ア「ええいいわよ」

め「もちろん　カズマについて行きますよ」

ダ「エリス様に会うのは魔王城以来の時、　私も大丈夫だと、　思う」

カ「緊張しすぎだぞ　、、　ララティーナ？w」

ダ「そつちで呼ぶなー!!」

リ（楽しそうなパーティですね　やはり似ている、、）  
リ「では行きましょう」

天界

リ「さて天界に着きましたね」

エ「ええー?! なんてお母様がここにつて助しよ、カズマさんにアクア先輩!? それにめぐみんさんやダクネスさんまで」

ダ「、、」

カ「どうした? エリス様の顔じつとみて」

ダ「いや やはり私の友人に顔が似ているなど、、」

エ「き 気のせいですよ多分」

リ「ごほん エリス急にここに来てごめんなさいね ちよつとしたサプライズがしたくて」

では本題に入りましょうか 私がここへ皆様を呼んだのは カズマさん達が見た夢のことについてです」

カ「俺たちが見た夢のこと、、」

め「やはり何かがあるのですかもしやあれは予知夢なのですか?」

リ「予知夢、、それに似たようなものですね、、」

ダ「どうゆうことなのでしょうか」

リ「あの夢は  
実際にあなた達が経験した事なのです」

パーティー同「?!」

カ「実際に経験したって、俺たちそんな記憶ないで、」

リ「詳しく話しましょう　あの夢は今から5年後のことです」

一同『?!』

リ「今から五年後この世界は破壊されました　ある神によって」

め「ある、神」

リ「あなた達の世界の創造神にして破壊神　デイニラス　またの名  
を

ソウ ハ オウ  
創破王」

ダ「創造神にして、、」

め「破壊神 、、」

ア「創破王、、」

カ「、、、デイニラス」

リ「そう デイニラスが五年後あなた達の世界を破壊したのです  
ですが私の力を使い 時を戻し この世界を戻しました」

カ「戻したって 、、 あんたそんなことできるのかよ」

リ「いちよう時の女神なので」

カ「なるほど、、でもなんで俺たち過去の記憶がないんだ こうゆ  
う 逆行ものはだいたい記憶とか残ってるもん、」

リ「記憶に関しては 我々の方で全員の記憶を消しました」

め「なぜなのですか？」

リ「もし記憶を持ったまま戻したら 死んだはずなのになんで生き  
ているんだと パニック状態になるかと思いき我々の方で対処しまし  
た

それに、、 時を戻しても戻らないものもありました、、」

ア「どうゆうことなの？」

リ「デイニラスによって破壊されたものは まれに 存在自体を破壊されることがあります そうなった場合 リタイムをしても、」

ダ「戻らない、、ということか」

リミルは静かに頷いた

カ「、、そのデイニラスってやつを止める方法はないのかよ」

リ「デイニラスを1度だけ封印したことはあります」

め「ならそれで、、」

リ「ですが、、その時は彼達がいたからこそ、、どうにか創造主様が封印できたことなんです」

ア「彼たち、、？」

リ「ええ 前にデイニラスが暴れた時 に協力してくれた人たちがす、、ですが もうあれから1000年 彼達がいらない今デイニラスを封印する手立てがないのです」

ダ「そうなのか、、」

リ「ですのでこの世界の魔王を倒したあなたに込み入って話があるのです」

カ「、、なんででしょう」

リ「あなた達にディニラス討伐を依頼したいのです」

カ「はあ!?!—————」

いやいや魔王は倒せても 破壊神は無理 絶対無理神は倒せ  
ねえって」

リ「そこをどうかお願いします」

カ「無視ですって ほんとに 俺以外に強いやついるでしょうが  
例えば、、、 マツタキとか」

ダ「、、、 ミツルギだカズマ」

め「カズマ!! そのディニラス を倒さないと 私たちが破壊され  
てしまいます!!」

ア「そうよ 私まだ破壊されたくないんですけどー!」

ダ「破壊か、、、 いやさすがの私も耐えられんが1度味わつみ  
た、、、」

カ「今興奮したろ」



ダ「してない」

CV ダクネス この

カ (だって今味わって見たいって)

すば

リ「どうかディニラスを討伐してくれませんか!!」

カ「……、だア〜 もうわかったよ やりやあいんだろ やりや」

リ「!! ありがとうございます」

ダ「と言っもどうやって破壊神と戦うんだ」

リ「実はと言うとディニラスはまだ目覚めていません ですがその封印もあと5年で解けてしまいます」

め「んじやどうするのですか?」

リ「ですので ディニラスが破壊するまでの五年間 ディニラスを倒すための力をこの天界で5年修行しようということですよ」

カ ア ダ め 「ええええー」

カ「5年なのか、まあたしかに 神に挑むんだもんな、そのぐらいあるか」

リ「その前に やっておきたいことがあります」

め「やっておきたいこと？」

リ「オーバー 来てください！」

ア「オーバー、て まさか」

オーバー 「なんでしょうリミル様」

カ「ウオ！ すげえムキムキなのが来た」

ア「やっぱり オバにー オバにーなの!？」

オ「その呼び方、もしかして アクアなのか？」

ア「やっぱりオバにーなのね!!」

とアクアが走ってオバにー?に抱きついた

オ「おっと、久しぶりだなくアクア　でかくなつたなー」

ア「もう　あれから何年経つてると思つてるのよ　そりや大きくなるわよ」

カ「、、アクア　もしかしてその人も　知り合いか？」

ア「ええそうよ　私が小さい時に一緒に遊んでくれた

オーバー　通称オバにー　よ」

め「そ、、そうなんですネ」

オ「お？　そっちの人間たちはアクアの友達か？」

ア「ええそうよ　私の大切な仲間なの」

オ「エリスも久しぶりだなく　、、お前そんなに胸あつたか」

エ「な！　、、あれからもう何年もたつてるでしょう!!　そのぐらい育ち、、」

ア「違うのよオバにー　エリスつたら胸にパツ」

エ「わーわー！！」

ダ「なんだか入りづらい空気だな、」

め「、、、そうですね」

オーバー この

アク

すば（エリ

すば?!）

この天界でリミットを

リ「こほん オーバーあまり はしやぎすぎないように」

オ「すいません 今度気をつけます」

リ「ではオーバーあなたにやってもらいたいことは このモノたちの限界を 伸ばしてもらいたいです」

カ「限界を伸ばす？」

オ「つまり 今あんたらの力ほぼほぼ 限界だろ それを俺の力を使って その限界を伸ばす 今よりもまだ強くなれるってことだ」

め「!!ということは まだ爆裂魔法を強くできるのですね！」

オ「おう その爆裂魔法？ ってのは知らないが それももつと強くなるはずだ ただし その伸ばしたものを埋められるのは力だ その力を付けられるかどうかはあんたら次第ってことだ」

ダ「なるほど、」

リ「それでもうひとつこれに関してはあなたたちの意見を優先します」

ア「どうゆうこと？」

リ「あなた達のリタイムの前の記憶 戻したいですか、」

一同「!？」

リ「これを戻せば五年後に何が起こりディニラスがどのような者なのかも分かりますですが 五年分の記憶ですので 頭に 強い影響があるかもしれませぬ」

カ「…、どうするお前ら」

め「私は戻します！」

ダ「私もだ」

リ「いいのですか」

め「そのディニラスってやつ顔覚えておきたいですし (その5年でカズマと何かあったか気になりますし)」

ダ「何か言ったか？」

め「いえ別に」

ア「ええ どうするのカズマさん」

カ「どうするったって…、わかったよ リミルさん 俺たち全員に その記憶戻してください」

リ「分かりました…、ですが今すぐには出来ませぬ」  
カ「え？ どうして」

リ「先程も言った通り5年分の記憶を送るのはその送った者の脳に相当な負担がかかります ですので…、この記憶を戻すこと この修行を2年半してから 記憶を戻すことにしたいのですが…、」

ダ「なるほど、、、そう言うことなら」

カ「分かりました そうさせてください」

カズマ一行は リミルに礼をした

リ「では私はこれで」

ア「え もう行っちゃうの」

リ「修行については オーバーに説明を任せます」

オ「了解致しました」

リ「それでは皆様 修行頑張ってください」

そうしてリミルはどこかへと姿を消した

オ「さて、、、ほな早速 限界オーバーしてやるか」

一同「お願いします」

オ「さて 誰からやる？」

ア「はいはい 私から！」

オ「おっ！ アクアからか そんなじゃいくぜ」

オ 「限界よ 超えよ over up !!」

その言葉をはなつた瞬間 アクアのまわりに青いオーラが纏い  
まるで炎のようだった そしてそのオーラは 徐々にアクアの体に  
収まっていった

その一瞬俺でも分かるの魔力圧が俺の肌を撫でた

オ 「、、、ふうさてどうだ？ アクア」

ア 「、、、今のところあまり変わりがないけど」

オ 「まあどうなったかかどうかは修行してそのオーバーした限界を埋  
めていけば後にわかってくれるもんだ」

カ 「、、、オーバーさん ちょっといいかな」

オ 「お？ なんやあんちゃん」



カ「オーバーさんって どのぐらい強いんですか？」

オ「俺の強さかー …… 相手が泣くぐらいだな ガツハツハツ  
!

まあ実際のところは

俺は強いで」

カ「おお！」

オ「けどなこの俺よりも強い いうならライバルってやつがいるんだ」

め「ライバル…、ですか」

オ「おう そいつとはいつも決闘ばつかしてした その回数1000以上」

カ「10000以上!!」

オ「そいつとの戦いは誰と戦うよりも1番楽しい戦いだった まあもう昔の話だな もう1000年以上の前の話だ」  
ダ「1000年…、」

オ「おっと 話がそれちまったな さて次は誰が行く」

め「私が行きます！」

オ「おっ 嬢ちゃん そんじや行くぞ」

オ「 over up! 」

めぐみんもアクアと同等にオーラを 赤い、いや紅いオーラがめぐみんのまわりを覆う

オ「ふう これで完了や」

め「ありがとうございます」

オ「おう! その伸ばした限界 修行でちゃんと埋めろよ」

め「もちろんです 私の爆裂魔法に限界という言葉はありません  
!!」

オ「その意気だ! さて 残るはお二人さんだよ どっちがやる  
?」

ダ「なら私からいいだろうか」

オ「おう金髪のねーちゃん そんなじゃいくぜー」

over up

!

た  
ダクネスにもオーラが黄色よりも金色に近いオーラをまとって

少しだけスーパー○○○人みたいだなって思ったのはあいつには  
内緒だ

オ「ふう さて最後になっちゃったなあんちゃん」

カ「いいんだよ どうせやるんだから 順番なんて」

オ「ほんじや 最後の

p!!

o  
v  
e  
r  
u

その時だった

ア め ダ 『!!』

突然アクアめぐみんダクネスからオーラが出る  
カ「え！ なんてお前らの出てんだよ！」

オ「これは、まじか、ハハ　リミル様の言ってたことはホントらしい　このあんちゃんは　間違いなく、」

そしてカズマからもオーラが出るだがその大きさは　今まで一番大きかったアクアのオーラを上回る大きさだった

そしてカズマのオーラを中心に

アクアめぐみんダクネスの　青　紅　黄

のオーラが　混ざり　そのままカズマの体に収まっていった

カ「、、これどうなってるの」

ア「ちょっとカズマ！　今なんか私のオーラがあんたの方にいったんですけど　もしかして　あんたパンツだけでなく　人のオーラまでステイルしたのね！」

カ「出来るわけねーだろそんなこと　なんだったんだ、？　オーバーさん何がどうなってるの？」

オ「、、俺もこうなったのは初めて見る　だが1つ変化がある

あんちゃんから　神の魔力を感じる」

一同『ええエえええ!!』

オ「恐らくだが あん時3人のオーラがあんちゃんのオーラと混ぜただろ その時のアクアからのオーラであんちゃんの魔力に少し神聖な魔力が入ったって訳か、」

カ「ええ、、 もう何が何だか」

オ「言うなれば、、 あんちゃんは今

8が人間 2が神様って感じだ」

ダ「何だかすごいところになったな」

## この天界で修行をPart 1

オ「、、まあ入ってしまったもんはしようがないな あんちゃん今後は人と神の比率が8：2 ということで」

カ「、、なんだってんだよ ほんとに」

オ「ほな 全員の限界をあげたことだ 次は修行をつけてる言えはコーチを紹介するぞ」

ア「あれ？オバニーが修行をするんじゃないの？」

オ「それでもいいんだが、1人で4人同時にやるのも効率がなだから1人1人ずつ マンツーマンで修行していくってことになったんや」

カ「へえー」

オ「んじや その修行つけてくれる奴らの所まで案内するぞ」

オ「ほんじやまたな エリス ！」

エ「はい オーバーさんも元気で皆様 修行頑張ってください」

そしてオーバーが何かを唱えるとエリスがいた空間からどこか神聖な建物の前に飛んだ

め「おおー これは神殿でしょうか」

オ「ああ この神殿は よく神様が特訓とかに使われる場所だ ここに人間が入ることはこれで2回目やな」

ダ「2度目、、、ということは前にだれか人間が来たと言うことなのですか？」

オ「ああ そいつらが1000年以上前にディニラスの封印を手伝った人間や さつき俺よりも強い奴がいるって言ったろ そいつはその封印を手伝った人間のひとりだった」

カ「まじか、、、そんなところに俺ら来てるのか、、、何だか場違い感あるな」

オ「外で話すのもあれだ 中に入ろう」

ア「ねえ？ オバニー 私たちに修行つけてくれるのって誰なの」  
オ「ん？ ああ この先の扉の向こうで待ってるで ってか そのうちの1人はアクア お前も知ってると思うぞ」

ア「私も知ってる？、、、」

そして大きく白い扉の前に着いた

オ「（コンコン） おーい 入るぞ」

そしてオーバーが扉を開けると

？「おお オーバーやつと来よったか！」

△「あ！ オーバーさん 待ってましたよー」

□「オーバー、、、来たか」

○「やっと来たー ちよつとオバニー時間かかりすぎ、」

つてあああああああ!!」

ア「あああああああ!!」

とアクアと○は目を合わせた途端

近ずき睨みたあつていた

○「あらあらー なんでここにあなたがいるわけ？ あんたはあのめんどくさい天界の死者を迎えるところで仕事してるんじゃないのかつたのー アクア？」

ア「何よあんたこそ 天界での宮殿で召使いとしてどうにか生活をしてたんじゃないんですか？」



リポカ」

リ「何よ」

ア「何よやる気?」

と今にも火花が散りそうなほど睨み合っている2人

カ「あのくオーバーさん これは、、、」

オ「またアイツらは、、、 アクアとにらめっこしてるのは リポカ  
アクアの幼なじみってやつだな アイツらは 小さい頃から喧嘩  
ばっかしててな リミル様がよう手をやいていたよ」

□「やめんか2人とも」

すると あの二人の間に仲裁に入った

リ「ふん」

ア「ふん」

オ「、、、ごほん んじゃお前らに紹介しよう こいつらがお前らに  
修行をつけてるれる神様たちだんじやまずはお前らカズマ達に自己  
紹介してくれ」

ネ「ああ よっ 俺はオーバーの弟の never (ネバー) 永久の  
神だよろしくな」

プ「初めまして私は フレムです魔法系の神様をしていますよろしくお願いします」

エ「私はエスパーダ 剣術の神だ」

リ「、、私はリポカそこにいるアクアと同じく水の女神よ よろしく」

オ「こいつらがおまえらに修行をしてくれる 神たちだ」

カ「やっぱり修行って神様から教わるんですね」

オ「おう！そうや神と戦うやら神に教わらんな さて 早速修行について説明するぞ さっきも言ったが修行はマンツーマンで行う あんたら一人一人にこの4人のうち1人がコーチになるって訳だ」

め「なるほど、、先程の自己紹介を聞く限り誰が誰をコーチするってのは何となく理解しました」

オ「理解が早くて助かるわ てなわけで

アクアが教わるのはリポカだ」

ア「ちょっとオバニー！なんで私のコーチがリポカなのよ！よりによって！」

オ「そう言うなアクア リポカに関してはリミル様直属でアクアを  
コーチしてやってくれって言われてんだ」

リ「そう言うことよ リミル様から言われてなかったらやってない  
わよ」

ア「むう、、、ママが言ってたなら、、、」

仕方ないわね いいわよりポカでもなんでも私をコーチしてみな  
さいよ！」

リ「なんで上から目線なのよ あんたは教えられる側でしょうが」

オ「だから喧嘩するなつての

、、、ふう さて次はめぐみん

お前さんのコーチはフレアだ」

フ「初めまして フレアです これからよろしくお願いいたしま  
す」

め「こちらこそ宜しくお願い致します

いちよう初対面なので自己紹介を」

カ（あれか）

ア（あれね）

ダ（あれだな）

め「我が名はめぐみんアークウイザードを生業としこれまであまた  
の魔王軍幹部を屠しり物 そして これから破壊神さえ屠るもの！」

、  
、  
、  
（。。）…チーン

カ（すっごい変な空気になったじゃねーか そうだよな 地上の方  
じゃ紅魔族の感性とか知ってるけど 天界の人が知ってるわけない  
よな！）

フ「…、か…、い …、す」

カ「…、？」

フ「カツコイイです!!!」

めぐみん以外「え?!」

めぐみん「ふふん そうでしょうそうですね あなたは分かりますかこのかつこよさを!」

フ「はい! すごくカツコイイです!めぐみんさん!」

カ「、、、 どうゆうことなんすか? オーバーさん」

オ「、、、 フレアは純粹なんだ 心の中はまるで透き通ったような感じのやつなんだ まあ、、、 子供っぽいつて感じで捉えてもいいぞ」  
カ「あつ、、、 そつすか」

オ「ンツん フレア めぐみん 盛り上がるのもいいがそれは後でいいか」

フ「!! 、、、 すっ／＼ すみませんでした」

ア「ねえダクネスなんだかあの子に対して母性本能が出てくるんですけど」

ダ「、、、 ああその感じは分かる」

オ「さて次は、、、ダクネス  
あんたのコーチは」

エ「私だ」

オ「おお 割り込んでくるな」

エ「茶番がすぎるぞオーバー この修行はディニラス討伐のためなんだ こんな腑抜けた空気になっていては  
ディニラスどころかやつの教徒にも負けるぞ」

オ「そう言うなエスパード 今はみなが交流するための言わばレクリエーションみたいなもんなんだ」

エ「勝手にしろ、、、」

私が お前の修行担当となったエスパードだ」

ダ「、、、私はダクネスと申します」

エ「、、、 はつきり言う

私はお前を認める気は無い」

ダ「?!」

エ「見て分かる お前は剣士では無い ただの鎧を来ているだけの  
ハリボテに過ぎない」

ダ「、は ハリボテ」

カ「おいあんたそれは言い過ぎなんじゃねーのか」

エ「お前らもそうだ お前らからは覚悟が感じない お前らが戦うのはお前らの世界の魔王とは比べ物にならない化け物なんだぞ それなのにお前らからは覚悟が、、意識がない」

カ「なっ、、」

エ「だが修行を行わないという訳では無いただお前が私についていけるかは知らないがな、、私は先に行っている」

そしてエスパードは 奥の4つある扉のひとつに入った

オ「エスパードな自分が剣士であることに誇りを持っている よく天界の兵士を鍛えるときもあるんだが あの厳しさもあつてかエスパードの元で修行をしたやつは全員途中で辞めていつている」

ネ「まああんな性格だけど悪いやつじゃねーんだ 根っからの正義感を持つてる熱いやつなんだよあいつは」

オ「そう言うことだ さて最後にカズマ お前の修行相手は」

ネ「俺だ」

オ「俺の弟　ネバーだ」

カ「おう、、よろしくお願いいたします」

ネ「そんな固くなるな　リラックスしとき」

オ「さて　修行相手について説明したな次は修行内容だ　修行内容についてはネバー達が考えたもの　を行うってことになってるそして　修行する場所だが

さつきエスパイダが部屋に入っていったろ

あの4つの部屋で生活、修行をしてもらう　もちろんあの中にはキッチン　風呂トイレ　など生活必需品が揃ってる

」

カ「設備がいいな、、」

オ「これで修行についての説明は以上だ　俺かは言うことはもうない　ほんじゃ修行頑張るんだぞ」

ア「あれ？オバニーも行っちゃうの」

オ「ああだがたまに顔出しに来るから　また会えるで　んじやまたな」

するとオーバーは部屋から出ていった



ネ「さてこつからは 俺たちが案内するな」

一同「はい」

ダ「、、、」

カ「ダクネス 大丈夫か」

ダ「ああ、、、大丈夫だ 心配ない」

カ「珍しいな お前があんなに罵倒されてるのに興奮していないなんて」

ダ「おま！、、、なんだかあの人が言うことこの言葉に重みがあるから、、、そういう風に捉えられないんだ」

カ「、、、なるほど」

ア「おーい2人ともーこつちよー」

カ「ああ 今行く まあとりあえずはエスパードさんと色々話してみろ」

ダ「ああ そうしてみる」

ネ「さて 今からこの部屋に入って行くぞ」

フ「めぐみんさんはこっちへ」

リ「アクアこっちよ」

ネ「あんちゃんはこっちで

金髪のねーちゃんはさつきエスパードが入っていったところに  
入ってくれ」

ダ「は、はい」

そして一行は部屋の中へ入っていくのだった

## この天界で修行をPart 2

カズマ視点

カ「すごい真っ白な部屋だな　まるで精神と○の部屋みたいだ」

ネ「さてあんちゃん　早速、と言いたいんだが　ちよいといいか」

カ「？」

ネ「サーチ　アビリティ」

するとネバーの前に青い画像のようなものが浮かび上がる

カ「あんちゃんコレ見てみ」

カ「え？　、、　！　これって

俺のステータス」

ネ「ああ　あんちゃんの今のステータスだ　オーバーから聞いたんだが

over up　の時に神の魔力が入ったんだってな」

カ「はい　なんだか不思議な感じで」

ネ「これを見るとなあんちゃんの魔力量や体力　他のステータスも

見えるんだ 魔力のところ見ると  
ほれ緑色のやつと青いやつあるだろ」

カ「はい 確かにこれって」

ネ「これは多分だが緑があんちゃんの元々の魔力 青がover  
upで入った神の魔力だろうな そして

魔力 50/??

神聖魔力 40/40

ネ「つてなってるだろ この空いてるところはover upで伸  
びた限界だ すごいな、、 over upして 半分の魔力ができ  
るってことはあまりないぞ」

カ「え?そんなんですか」

ネ「つても今までオーバーがover upしてきたのは天界の者  
だけだったからな 元々ステータスの高い神達のover up  
じゃ 伸ばせる限界は少ない 自分は人間がover upした  
後のステータスは見たことなかったからな 結構驚いた」

カ「そうなんですね」

ネ「そしてこれが」

体力 40/40

ネ「これが体力やらのステータスなんだが、、、少なくともねーか」

カ「ぐ、、、しょうがねーだろ俺あまり体力はない方なんだよ体力に関してはダクネスの方ははずば抜けている」

ネ「、、、、、よし決めた

あんちゃん この1年は魔力の量を増やすそして基礎体力 など  
剣術体術を基本にやっていく」

カ「、、、1年目からハードル高くない？」

ネ「安心しろ2年目3年目になるとこれの3倍ぐらいの修行をする」

カ「安心できる要素全然なかったんだけど！ こんなのできるかー！」

カズマは全速力で扉まで走る

ガチャガチャガチャ

カ「あれ？」 ドンドンドン

「開かない」

ネ「ああ言い忘れてたけど この部屋入ると1年は出られないんだよね」

カ「へ？」

ネ「だからこの部屋から出るには1年間頑張らないと」

カ「うつそだろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

カ「はあ、、、はあ、、、キッツ」

ネ「ほら頑張れよー あと50周！」

カ「数を言わないでください！ やる気が失せてしまいますから！」

俺は今この広い部屋を100週している、、、

ネバーさんが言うにはこれはまだウォーミングアップだと、、、

元引きこもりの俺にこの広さの100周はキツイって、、、

けれど 以前に比べたら体力の減りが激しくない これもオーバーさんが

over upをしたからだろうか

ネ「それが終わったら 腕立て伏せ

腹筋 スクワット を100回ずつなー」

カ「うつそだろー！？」

そしてネバーさんが言うには俺のこの1年の目標はエクスプロージョンを打つても倒れないようになれ、、、だそうだ

あのめぐみんでさえ1発で倒れるのに俺にやれって無茶だろ！

こうしておれの修行は始まった

アクア side

リ「アクア、、あんたのステータス、、」

ア「何よりポカもしかして私のやばすぎるステータスみてびっくりしてるのー?」

リ「ええそうよ ある意味びっくりしてるわ

何よこの知能の低さは!」

ア「うぐっ」

リ「昔からあんたは頭が弱いなどは思ってたけど まさかここまでとはね

over upしてくれたオバニーには感謝ね

決めたわよアクア あんたがこの1年間やることは

勉強よ」

ア「ええー！ 嫌よそもそもなんでこんな所まで来て勉強なのよ！」

リ「この低すぎる知能レベルをあげるためよ！ 今のあなたの知能レベルは子供以下よ！

とにかく！この1年何がなんでも勉強に取り組んで貰うわ」

ア「そ、そ、そんなー！ー！ー！ー！」

ダクネス side

エ「来たか、、」

ダ「どうも、、あの！」

エ「貴様のステータス、、影で調べさせてもらった、、器用さがこんな低いとは思わなかった。しかも剣術に関するスキルも何一つ持っていない

これからする修行に置いて剣は使わん私が回収する」

ダ「わ、わかりました、、」

エ「まずその不器用さを治すためにこれを1年以内で終わらせろ」



そしてエスパードが手を叩くと綿や布が大量に出てきた

ダ「これは、、、」

エ「見ての通り綿と布だ これらを使つてなんでもいいから作れ  
ただしこの量をこの1年で終わらせなければ貴様に修行することも  
認めることもない」

ダ「なつ、それは」

エ「つべこべ言わずにさっさとやれ！」

ダ「は はい！」

めぐみん side

フ「さて、、、早速なのですがめぐみんさん あなたの爆裂魔法を見  
せてくれませんか」

めぐみん「ふふん！いいでしょう 私の爆裂魔法をとくと見るがいい  
！」

めぐみん「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまおう覚醒  
のときたれり無謬の境界に落ちし理無限の歪みとなりて現出せよ！」

エクスプロージョン！

ドゴーーーーーん

広い空間に爆裂魔法の爆発 爆風が押し寄せる

め「あう、、、」

フ「めぐみんさん?!」

め「すみませんこの魔法は1発打ったら魔力を全部使うほどの魔法なので倒れてしまうのです」

フ「なるほど、、、しかしあの威力 今まで見てきた魔法でも桁違いに威力がやかかった、、、しかも人の身でありながらあの威力、、、敵にしたくないですね」

め「ふふん、、、さすがに神様も私の爆裂魔法にはビビりましたか、、、って

フレアさん!何を!」

フ「確か、、、このような魔法陣で 詠唱は、、、いいか そんで魔力量が、、、よしこのぐらいかな んじや行きますよ!」

め「その魔法まさか!」

フ「エクスプロージョン!」

ドゴゴoooooooooooooooooooo

その爆裂魔法はめぐみんのより遥かに凌駕した爆裂魔法だった

フ「おっと、、、ほんとに魔力量の消費が激しいですね」

め「フレアさん、、、あなたも爆裂魔法を、、、」  
フ「ああ めぐみんにはまだ言ってますね

僕はフレア 魔法の神  
またの名を

マジックコピーター」

め「マジック、、、コピーター、、、」  
フ「私は 見た魔法を自分が打てる魔力量ならば なんでも打てる  
という能力があるんです ですが相手が出した 魔法の魔力量が自  
分の魔力量より多いと出来ません」

め「なんですかそのチート能力は!」

フ「ですのでめぐみんはこの5年間での修行で私がコピーしきれない  
ほどの魔力量で爆裂魔法を打てるようになるのがこの修行での最  
終目標です!」

め「なるほど、、、、面白いではないですか！私は紅魔族随一の最強の魔法使い！この修行であなたがコピーしきれないほどの爆裂魔法を打ってやろうではないですか！」

こうして各々の修行が始まった

3ヶ月後

ネ「いいかカズマ まず体術ってのはこうやるんだ」

カ（なるほど、、、、わからん）

カ「ブリザード！」

ネ「まだまだだ！ そんなんじやまだうちわ程度の威力だぞ！」

カ「おっす！」

5ヶ月後

リ「いいアクア ここがこうなるでしょ そしてここをこうしたらこここの答えがでるのわかった？」

ア「zzzz、、、」

リ「、、、アクアーーーーー！！」

ア「ひゃ！ ひゃい!?」

8ヶ月後

ダ「えーつと確かここをこうして、、、

あつ！ 針が折れてしまった、、、」

エ（逆になぜ針が折れるのだ、、、）

フ「めぐみんさん魔力は様々なことにも利用ができます例えば、、、あそこの人形を、、、」

するとフレアは人形の周りにバリアを作った

め「おお！ 凄いですね、、、ですがこれはあまり爆裂魔法には関係が、、、」

フ「まあ待ってください 今人形を閉じ込めてますよね そこに、、、」

エクスプロージョン！」

バリアの中で爆裂魔法が爆発し中の人形は塵一つ残っていないかった

フ「このように閉じ込めてからの爆裂魔法なんてものあります 普通にバリアとしても使えるので便利ですよ」

め「、、、結構えぐいんですね」

こうして各々は1年間修行に取り組んだ

そして

1年後、

この天界で修行をPart3

カズマside

カ「、、、ふう

エクスプロージョン！」

ドゴーーーーー

カ「、、、!! 倒れない！」

ネ「おおー！ よくやったらカズマ！」

カ「はい！ ネバーさん」

ネ「にしても、、、1年前とは見違えたな、、、カズマ」

そう、俺の体は内側も外側も変化した  
まず外側 腹筋や筋肉が すごく着いた  
腹は夢のシックスパックになっていた

そして内側

俺の中の魔力量が愕然と増えた

サーチアビリティで見たところ

魔力 ?? / | 100 || 400

体力 300 / 250

となった、、すげえな増えたなしかもこれはさつき爆裂魔法を打つ  
たらあとの魔力量だ、、この量ならもう1発打てるほどある

ネ「さて、、カズマ1回この部屋から出るぞ」

カ「え？どうして？」

ネ「なーに この1年修行がんばったカズマにご褒美を与えにな」

カ「え！ ほんとですか！ ありがとうございます」

ネ「んじゃ早く行くぞ」

カ「はい！」

こうして俺たちはこの天界の街に行くことになった



カ「すごいな、、、ここ 何もかもが金色だ」

ネ「だろ？ 俺はあんまり金色は好きじゃないんだがな、、、 そう  
そう今から行くところはこの先だ」

そう言つてネバーさんが指をさした  
指した先には

まるで鍛冶屋のような建物がたっていた

カ「ここ、、、ですか」

ネ「ああ こここの鍛冶職人は一流でな ここでカズマの新しい武器  
を作つてもらおうと思つてな」

カ「ええ！ いいんですか！」

ネ「まあ詳しいことは中で話そう」

そして俺たちは鍛冶屋の中へ入る

ネ「おーい 親方ー いるかーい」

カ「親方、、、？」

？「なんじゃー、、、おお ネバーさんじゃないですかい んで、、、  
隣の人間は？」

ネ「紹介します 今自分が修行をつけているカズマです」

カ「サトウカズマです」

?「(佐藤、) おう わしの名前は ドワー 今回の鍛冶屋で働いてる 鍛冶職人だ」

ネ「んでネバーさん このカズマに合うような剣を注文したいんだが いいか？」

ド「おう どんな剣にするんだ」

ネ「んー、、 そうだ 魔力付与できる剣をお願いする」

ド「おう！ 任せとけ おーいカズマさん

ちよいと来てくれ今からあんたに合うように長さを考えるから」

カ「わかりました」

そして調整やデザインなど色々話し合った

ド「よし、、 こんなもんだな んじゃ出来上がり次第そっちに送らせてもらうわ」

ネ「ありがとうございます 親方」

カ「ありがとうございます」

ド「、、 そうだ カズマさん ちょっと残ってくれ」

カ「え?!、、 は、 はい」

ド「ネバーさんは戻ってていいぞ」

ネ「了解しました」

そしてネバーは鍛冶屋を出た

カ「…、あのーなぜ自分だけを、」

ド「単刀直入に聞くお前さん日本人だろ」

カ「え?! ちよ! なんで?!」

ド「やっぱりか いやー同郷者なんて初めてあったなー」

カ「…、同郷者ってあんた まさか!」

ド「そうだ 俺も日本人だった」

カ「あなたも日本人なんですか!？」

ド「おう多分お前さんも若くして死んで異世界転生したんだろ」

カ「え、ええ」

ド「俺もそうだった、、 工業高校の時にな鉄が倒れてきて そのままポツクリよ」

カ「それは、、」

ド「その後はアクア様にいろいろ説明されて異世界転生したって訳だ」

カ「あの、、ドワーさんも異世界転生者なんだよな、、特典とかも」

ド「あああるぞ特典　けどな俺の特典は武器でもなければ魔法でもねー」

世界一の鍛冶スキルだ」

カ「おー　でもなんで鍛冶スキルを？」

ド「さつき言っただけど俺は工業高校に行ってたんだ元々　工場なんかで働きたかったんだが　せめて異世界でなら鍛冶屋として働けるかなってなこのスキルで作った武器は一流だ　異世界の方では王都に住んでる王女に剣を作ったこともある」

カ「へえ〜　でもなんでこの天界に？」

ド「実は、俺は鍛冶屋やってる時にまた鉄が落ちてきてな　また死んじまったんだ

もう何十年前にな」

カ「うそだろ、、」

ド「俺もびっくりだよ同じ死に方を異世界でもするんだから　でもよ　そこでエリス様と天界であつたんだよ　んでエリス様に聞いてみたんだ　天界で鍛冶屋をやらせてくれないかってな　んで今こうして天界の鍛冶屋を営んでるって訳よ　そしてたまにだが神器開発にも関わることもある」

カ「へえー　にしてもまさか天界にも異世界転生者がいるなんて、、びっくりした」

ド「いやー　最初お前の名前を聞いた時にまさかと思ったが　どうだったんだ日本は、、」

そこからはドワーさんに今の日本の流行り物やアニメなんかの話で盛り上がった

そしていまはこんな論争をしていた

ド「ばっかだなお前！ ベ○ツトが最強に決まってるだろ！」  
カ「いやゴ○ータの方がいいねあのかっこよさ分らないのかよ」

ド「分かるわ！でもな最強って話になるとベ○ツトだよ合体したらほとんどあの状態なんだぞ！ 魔人○ウの時は何故か解けたけどな」  
カ「は？いや知らないのか？ポ○ラってフュー○ョンと同じで30分までなんだぞ？」

ド「え？」

カ「え？」

そしてなんやかんやあり

ド「いやー久しぶりに話したよドラゴン○ールについて」

カ「俺もです、、なあ ドワーさん  
ひとつしていいかな？」

ド「ん？なんだ？」

カ「ドワーさん神器とかも作れるんだろ？ならさ いつかポ○ラミ  
たいなのも作れるのか？」

ド「ポ○ラミみたいな合体出来るやつか、、どうなんだろうな、、作  
れるのか？」

カ「まあ無理だったら大丈夫だよ」

ド「む？ おい この天界一の鍛冶屋をなめんなよ！ いつか作っ  
てやるからな！」

カ「まああまり期待せず待ってますよ それじゃ俺はこれで」

ド「おう 気をつけて戻れよー」

こうして俺は予想もしなかった同郷者と知り合った  
カ（そーいやーあいつら今何してるんだろ、、）

## この天界で修行をPart 4

一方その頃

アクア side

ア「ふふん！ 見なさいリポカこのステータスを！」

リ「ん？ お！ 知能のステータス上がってるじゃない！」

ア「私だってねやる時はやるのよ 知能をあげるなんて造作もないわ！」

リ「まあ、、、

before

20



まあアクアからしたらこの増えでもすごいよね、；、多分」

ア「何か言った?」

リ「いや何も」

ア「ふーん まあいいけど んでリポカ こうして1年がたったけどあと4年はどうするのよ?」

リ「大丈夫 またこの1年何をやるかは練ってあるわ、；、

アクアあんたはプリーストだから回復や支援魔法はずば抜けて高いわ」

ア「あら何?あんたが私を褒めるなんて レタスでも飛んでくるのかしら?」

リ「ムカ」 そして女神や神の力を持つものだけが使えるゴッドブローやゴッドレクイエムはこの天界に置いて高レベルの技も使える今年はこの神聖技を磨くのよ」

ア「確かに回復能力や支援を強化すればカズマ達にも有利になるわ、；、でもそうしたら別にゴッドブローやレクイエムは強化しなくてもいいんじゃないの?」

リ「アクアー 最近ね裏でサポートする女性ってのは時代遅れらしいのよー」

ア「え?! そうなの?」

リ「今どきの女だつて拳や剣で戦うのよ それに 好きな人に自分

の戦うところを見せれば期待も持たれるしーもしかしたら相手がすきにな・る・か・も」

ア「ふーん、、、まあ、、、悪くないかしら」

リ「あら？ その反応、、、アクアもしかして好きな人でもいるの？」

ア「なっ！ ば ばかなこと言わないでも私には好きな人なんていないわよ！」

リ「あら？ いないの？ てつきりあの 男の子だと思ったんだけど」

ア「はあ?! な なんで私がカズマことを、 ススすきになるなんてー！」

リ「あら？ 誰もカズマなんて言っていないけど？ (?▽?) ニヤリッ」

ア「あ、、、 アウ／／／」

リ「へえく そうなんだー」

ア「違うわよ！ 私はカズマなんか、、、」

カ（ありったけの頼んだぜ 相棒！）

カズマなんか、、、

カ（背中任せたぞ アクア！）

なんか、、、

カ（女神はチートに入りますか？）

、、、  
」

リ（こりや 今自覚したな可愛いところあるじゃない、、、自分が好きになってたってことを ふふふ いじりネタゲットだぜ、、、）

リ「大丈夫 仮にそうだとしてもカズマさんには言わないよ」

ア「ほんととよね ほんとにほんとに言わないですよ！」

リ「わかったわかったから！」

めぐみん s i d e

フ「ではめぐみんさん お願いします」

め「すうー、、、 はあー、、、

プリズン！

からのー

エクスプロージョン！」

ドゴゴoooooooooooo

バリアの中で爆裂魔法が放たれる

め「おう、この1年 毎日魔力のコントロールやバリアを作る練習をしたからか魔力量も増えているので倒れませんか いまのこの魔力量なら あと10発って所でしょいか」

フ「めぐみんさんやりましたね」

め「ええ！ この1年フレアが教えてくれたからですよ 勉強になりました

そして私はこの技を

プリズンエクスペディションと名づけましょう！」

フ「おー」パチパチ

め「そしてフレアこうして1年でこのプリズンエクスペディションを覚えましたが、次はどのような修行を？」

フ「はい！ 今年はめぐみんさんのエクスペディションを複数出すという技を

作ろうかと、自分なりに名前を考えてチエインエクスペディションと言うのですが」

め「おぉーチエインエクスペディション、、、一体どのような技なのですか」

フ「見ててください」

フレアが魔力を高めるすると

め「！な爆裂魔法の魔法陣が複数！」

フ「チエインエクスペディション！」

ドゴゴoooooooooooo

ドゴゴoooooooooooo

ドゴゴoooooooooooo  
ドゴゴoooooooooooo  
ドゴゴoooooooooooo  
ドゴゴoooooooooooo

爆裂魔法が複数に打たれた

フ「ふう、このように同じ威力の爆裂魔法を同時に複数出すという技です」

め「おおー爆裂魔法を複数ですか！これは面白いですね！早速どのようにやるか教えてください！」

フレア「はい！」

ダクネス side

ダ「エスパードさん！」

エ「なんだ？」

ダ「あの量の布や綿全て使って縫い物を作り終わりました、これで修行も私を認めてくれますか」

エ「ふん、まあこの1年のお前の努力したと見届けた、よかろうお前に修行をつけてやろう」

ダ「エスパードさん」

エ「ただし！私がお前を認めるのはお前が私に勝ってからだ」

ダ「！はい！」

エ「まずは、、、私との前に、、、  
ダクネス！貴様はなぜ強くなる  
なぜ戦う！」

ダ「！、、、私は騎士だ！仲間を守るために友を守るために例え  
どんなに困難でも必ず、、、騎士として屈するなど、、、あつてはなら  
ないから！」

エ「ほう、、、面白い！なら全力でぶつかってこい！ダクネス!!」

ダ「はい！ 師匠!!」

エ「はああああアアアア！」  
ダ「はああああああ！」

ギイン

カズマ side

カ「それでネバーさん 今年はどのような修行を？」

ネ「ああ 今年の修行は、、 神聖属性の技の強化だ」

カ「神聖属性の技？」

カ「ああ 今かずまの中には神と同じ魔力がある それを使えば並の人間以上の力を持つことができる だが 人が神の技を使うことは本来ない 仮に人が使ったら体に力が追いつかないで反動がある だからこの1年カズマの体を鍛え その力の反動に耐えられる器を作った だから今年はそれを中心的になろうってことだな」

カ「なるほど、、 まあ神の技を使えるのなら使った方がいいよな ではネバーさんよろしくお願いいたします」

ネ「おう！今年もビシバシ鍛えるからな」



???  
s i d e

?? 「ああ、、、我らがデ이니ラス様―」

?? 「デ이니ラス様―」

デ이니ラス様 ―デ이니ラス様―

?? 「デ이니ラス様―」

○ 「はは！さすがはデ이니ラス様 この教徒たちの反応 最高だな」

□ 「これもデ이니ラス様の信仰力だ  
我らの願いはデ이니ラス様を強くさせる」

デ 「ああ、聞こえる封印されていても分かるぞ、、、俺の可愛い信徒達の声が、、、待っている、、、この封印もあと数年経てば解けるそうすればお前らが望む新世界を創造しようじゃないか、、、くくく、、、はっはははー！」

地上side

バ「、、、」

ウ「?どうしたんですか?バニルさん そんな険しい顔をして」

バ「ふん どうしたらこの店が繁盛するのかを考えてたところだ」

(なんだ、、、何かを感じるのだが、、、)

気のせいなのか、、、)

究極の聖戦編 (アルティメットバトル)  
この時の女神に真実を

修行期間1年2ヶ月後

ダクネス side

白い空間の中で今剣の擦り合う音が響く

ダ「ふっ はあ！」

エ「あまい！」

ダ「ぐっは、、、なんの、、、」

エ「ダクネス お前は攻撃力なら私より強いだが そのぶん ス  
ピードや繊細さが足りない もし素早い敵に遭遇すれば苦戦するだ  
けだ」

ダ「なるほど 素早い剣術、、、ですか」

エ「ダクネス今からある剣技をするよく見ている」

ダ「は はい」

するとエスパードは人型的を出した

エ「すうー」

するとエスパードからプレッシャーや圧が飛ぶ  
ダ(な！ これほどの圧、、、それにこの魔力量)

するとエスパルダのまわりをイナズマ  
が纏う

雷鳴剣 剣技

トルエノ・デストローダ

それはさながらイナズマのように一瞬の出来事だった  
エスパルダはイナズマの如く早急的へ距離を詰め 的を切った

ダ「す、すごい なんて速さ、、、」

エ「これは私が基礎としている剣技だ パワーはやや劣るが ス  
ピード繊細さはずば抜けている この1年ではこの剣技について  
みっちり教えるつもりだ」

ダ「おお、、、」

エ「これを習得すれば ダクネスのパワー にこの剣技の素早さを  
合わせればきつと強くなる はずだ」

ダ「!、、、 分かりました」

エ「では 続きを始めるぞ」

ダ「はい!」

そしてそこから数時間エスパルダとダクネスの打ち込みが行われ  
たそしてこの日の稽古を終えて夕食をとっていた

ダ「師匠1つ聞きたいことがあるのですが いいですか？」

エ「ん？どうしたんだ 改まって」

ダ「師匠はなぜ剣士に？」

とダクネスは尋ねるとエスパードは 懐かしむような悲しむようなそんな表情を顔にして答える

エ「剣士になった理由か、、 そうだな、、 長くなるがいいか？」

ダ「はい！ 師匠の話ならば」

エ「なら話すとしよう 実はな私は元々人間だったんだ」

エ「え?!」

エ「まあその反応が妥当だろう」

今から何十年前 私はある国の騎士団の団長だった だがある日  
その国に魔王軍幹部が現れた そいつを倒すために私が率いる騎  
士団も立ち向かった

だが そいつは強かった 次々に団員達はやつに殺された し  
まいにはやつは私に呪いをかけていった」

ダ「呪い、、 まさかそいつって、、」

デユラハンですか」

エ「ああ やつの名はベルディア 通称勇者殺しのベルディアとも呼ばれていた 私は自身の呪いをとくためにそして団員たちの敵討ちとして 1人でベルディアの待つ城へ向かった だが 私はあえなくやつに殺された」

ダ「そんなことが、、、」

エ「だから私からあなた達パーティに感謝したい ベルディアを倒してくれたことを」

ダ「いや 私は何も 戦っていたのはカズマ達でしたし、、、ですがベルディアにやられて何故ここに」

ダクネスは疑問に思い尋ねる

エ「私は 死んでエリス様にあつた そしたら今までの現世での功績もあり

ぜひ天界の兵を鍛えてはくれないかと言われてな その申し出を受け今にいたるってことだ」

ダ「そんなことが、、、」

エ「私は今度こそ仲間を死なせたくはない 殺させはしない そのために私は剣を振るどんなにその道が過酷でもな」

ダ「師匠、、、」

エ「さあ 風呂に入ったら直ぐに寝るぞ 明日も朝早くから稽古だからな」

ダ「はい 分かりました」

とエスパードは寢床へと向かった

1年3ヶ月後

カズマ side

カ「はあ、、、はあ、、、やっぱり普通の魔力を使う時より体力の消耗が激しいな」

ネ「普通はそうなるもんだ 人が神の魔力を使う時は」

俺はこの3ヶ月で少し成長した

アクアほどではないがゴッドブローが放てるようになったゴツト  
レクイエムはまだまだ、、、

そして俺はあることを感じとれるようになったそれは オーラだ  
1年前ではうつつすらとしか感じれなかったがネバーさんのオーラ  
を感じる事が出来た やはり兄弟血が繋がってるからかオーラが  
似ているな、、、リミルさんやアクアも似てるのか、、、

カ「ふう、、、」

ネ「よし今日はここまでだクールダウンしてこい」

カ「うつつ ネバーさん」

こうして各々はこの1年も自身の強化のため修行を行った

そして

修行を始める日から

2年半が経った、、そして

カ「今日でもう2年半経ったのか、、今日久しぶりにアイツらに会えるなそういやあの部屋って1年しないとあかないとか言ってたけど、、」

ネ「ああ あれは嘘だ あん時は外の奴らに扉を抑えてもらったのよ

だな アイツらがどんな成長してるのか 楽しみか？カズマ」

カ「楽しみではありません まあ元がダメだったあの3人がどんな成長してるのやら、、ってえ！そうだったんですか！」

と修行を始める前の大広場で3人を待つ2人

「カズマ！」

するとどこからか懐かしくも感じる声が聞こえた

カ「！、、久しぶりだな

めぐみん」



め「はい！ お久しぶりですカズマ」

「カズマ」

「カズマきーン久しぶりねー」

と続々に俺たちのパーティが揃う  
にしても

カ「お前ら 変わってないようで変わったなー」

アカアは少し身長が高くなってる気がする だいたい俺と同じぐ  
らいにはそして

あの特徴的だった頭のまる結びがなくなりポニーテールだった

そしてめぐみんは髪が長くなっていた

そして身長がだいぶ伸びている元々俺の胸ぐらいだったのが肩ま  
で伸びている

そしてダクネスはあまり変わってないような気もするが 少し顔  
が凛々しくなってる気がする

め「にしてもカズマがこの中で一番変わってるのでは無いですか  
明らかに2年半前とは違いますね 、、 おやその腰に装備してる  
剣、、なんですか？」

カ「ああこれか実はなこの天界の鍛冶職人に俺に剣を作ってくれて  
な その名も 魔装剣 Z」

あの修行期間中にドワーさんから送られてきたものだ ドワーさ  
んいわくこのZはドラ○ンボ○ルのゼット○ードからとってるらし  
い

ア「剣でZって安直じゃないかしら？ドラ○ンボ○ルのあれじゃあ  
るまいし」

さすが日本の文化を知ってるアクア勘が鋭い  
カ「んでお前ら この二年半でどんな成長したんだ？」

め「ふふん！私はずいにあの爆裂魔法を打っても倒れないようになり  
ましたよしかも連発可能です」

カ「おお！まじか！ すげえな」

あの爆裂魔法をマナタイトなしでなんども打てるなんてすげえな  
めぐみん

ダ「喜ベカズマついに私は剣が当たるようになったんだ」

一同「ええ!？」

カ「そう言うジョークか？ララティーナ」

ダ「その名で呼ぶな！ ああほんとだなんならカズマ今ここでやり  
あうか」

カ「ほおーう、、、いいのか俺がこの二年半をただ修行してただけと  
思ったら大間違いだぞ、、、今のお前がないて喚くようなことも考えて  
るんだからなー」

ダ「なっ！／＼ 何を、、、はあ！まさか私のおんなとこやそんなこ  
とをしてギルドの冒険者達に、、、 やっやめろー」

まあそんなことは考えてないんだけどさ、、、相変わらず妄想が激し  
いやつだ

さて1番心配だったのは

ア「今カズマが思ってること当てましようか どうせ私がちやんと

修行してたのかとか心配してたんでしょ」

カ「ああ」

ア「ちよ、まあいいわ私だってねこの二年半で成長したのよ  
これを見てみなさい」

クリエイティブ ウォーター」

クリエイティブ ウォーター？

と疑問に思うと

ア「アの手ひらから水が浮かぶ  
そして

ア「剣になれ」

と唱えるすると

水が自在に変形し剣になった

カ「おお！すげえな」

ア「どうよカズマこれはね水を魔力で操ってどんな形にでも変えら  
れる

クリエイティブ ウォーターよ」

なるほどクリエイティブってそういう意味と納得した3人  
とそこへ誰かがやってくる

カ「！リミルさん」

ア「! ママー久しぶりー」

リ「初めまして 皆様 私リミルと申します」

え? 初めまして?

カ「いや リミルさん 俺たちと前に会いましたよ 2年半前に忘れてしまったんですか」

リ「ああ そういえば言ってませんでしたね 私は今のリミルです 修行を始める前に会っていたリミルはあの時の5年後のリミルということですよ」

め「なるほど、、、 どうりで初めという訳です 確かにこの時間のリミルさんとは会ってませんでしたね」

リ「実は2年半前あの5年後から来た自分が2年半後彼らの記憶を戻しておくれと言われましてね」

カ「あの時去って行ったのはこのことを今のリミルさんに記憶の件を言うためだったのか」

リ「はい では早速で申し訳ないのですが、、、記憶の方、、、お戻しします準備はできてますか?」

カ「はい」

ア「ええ」

め「もちろんです」

ダ「はい」

リ「では、、、行きます」

記憶を戻せ、、

リバックメモリー！」

その時だった

一同「!!」

一同の脳内に記憶が戻る

カ「が！　ぐうう、、　あああ！」

ア「くうあ、、　はあ、、　はあ！」

め「うぐう、、　頭になにかが！」

ダ「はあ、、　があ！　これは、、　！」

貴様——！

ガタガタガタガタガタガタガ

カズマ　あと8分ください

こんな終わり方ふざけんなよー！

この世界にサヨナラだ

カ「はあ!!、はあ、、はあ!

そうだよ、、思い出した、、俺は、、!  
お前ら!」

俺がアクア達に尋ねると

3人がいつせいに俺に抱きついてきた

ア　め　ダ「カズマ、、カズマーーー」

泣きながら

この時俺も記憶を戻してその時あったことを思い出し　アイツら  
に泣きついてしまった

数分後

カ「お見苦しことをしてすいませんでした」

リ「い　いえいえ　いいんですよ　ところで特になにか変化ありませんか　いくら修行をしても5年分の記憶を戻したので支障がないかどうか知りたいのですが」

カ「俺は特に、、お前らは?」

め「、、、 私たちと特にですね」

リ「なら良かったです　そうです　久しぶりにパーティ出揃ったのですから少し出掛けてみてわ?」

め「、、、　そうですねたまには休息も大切です　では行きますか?」

カ「ああ行くか」

とカズマパーティー一行はこの天界にある街を散策した

ア「懐かしいわねーここにはよくママやオバニーと一緒に行ったわねー」

め「アクアはここに詳しいのですか?」

ア「ええ　ここのことなら端から端まで　知ってるわよ　ここのおすすめの場所を案内するわ」

とアクアは楽しそうに俺たちを引っ張って街を走る

アクアに連れられてここ天界の街を案内された　天界の商店街や公園　観光地もあるらしい

ア「この公園、、、懐かしいわね　よくこの公園でママと遊んだのよね　エリスともよく遊んだもの」

カ「へえー、、、にしても」

天界の公園といってもあまり地上の公園と余り変わらないな

ア「この遊具懐かしいわね!　これに乗ると　秒速300キロで走るそののコースターよ

、、、訂正地上と全然違う　てかなんだよ秒速300キロって新幹線よりもっと速いぞ?!

め「、、、」

カ「、、、お前やりたいのか」

とめぐみんに問うとぷいっとそっぽを向いた

まあいいけど

そしてその公園を後にした

その後商店街に売っていた食べ物を買って街を回っていた

そして天界の観光を終え神殿へ戻る

ア「久しぶりにこの街に来たしみんなどもあえて良かったわ」  
め「そうですね そういえば半年後の三年目では1度地上に戻ると  
フレアさんが」

カ「本当か！ 久しぶりに帰れるのか」

ダ「久しぶりに父に帰省報告をしに行かなくてはな  
皆がどうするか話し合う」

リ「皆さん 天界 楽しんでいただけましたか？」

め「はい時間を下さりありがとうございます」

ダ「ありがとうございます」

カ「、、、」

リ「カズマさん どうしました？」

カ「いや なんでもないです」

リ「そうですね、、、なら私はこれで」

トリミルさんは神殿の扉から出ていく

、、、 やっぱり聞こう今聞かないとこのことを引きずる気がする  
め「カズマ？どこへ行くのです？」  
カ「ちよつとな」

とカズマは神殿の扉から飛び出た



ア「、、、カズマ」

天界町 side

カ「リミルさん！」

リ「！ おや？ どうなされたのですか？ カズマさん」

カ「、、、実は聞きたいことがあるんです あなたに」

リ「、、、場所を変えましょうか」

リミルは指をパチンと鳴らすするとある部屋に飛ぶ

カ「!!」

リ「安心してください ここは私の家です  
ここがリミルさんの家か」

リ「そして、、、カズマさん私に聞きたいことは、、、なんでしようか」

とリミルさんが聞いてくる

カ「、、、本当のことか確信はありません、、、ですが聞きます リミルさん」

あなたは

本当にアクアの母親なのですか」

## あの水の女神の真実を

リ「、、、なぜそう思った 理由を聞いてもよろしいですか」

リミルさんは俺の問いかけには動揺はしていなかった

カ「、、、俺は修行をして神様達のオーラや魔力の質を感じとれるようになりました。そしてネバーさんの魔力の質オーラを感じた時オーバーさんに似てるなと思ったんです、、、。そして今日天界を回って天界にいる人たちを見てきました。そして 公園によった時ある親子を見ました。、、、両者とも魔力の質は瓜二つのようなもので俺は血の繋がりがあある人たちは似ているのではと思ったんです、、、。そして今日アクア とリミルさんと会って感じたんです

二人の魔力の質は全く似ていないと」

リ「、、、」

リミルさんは俺の説明を静かに聞いている

カ「アクアは水の女神 リミルさんは時の女神、、、親子だと言うのに全く慣例性がないとは前から思ってたんです、、、俺からの説明は以上です」

リ「、、、なるほど、、、 カズマさん では、、、少し昔の話をしましよ  
う、、、

アクアがまだ生まれて間もない頃の」

カ「、、、」

俺はこの話をじっくり聞くことにした

結論から言うに私はアクアの本当の母親ではありません アクアの本当の母親の名は ソリア 私の親友でした

彼女は昔から色んな迷惑に巻き込まれてて 私と初めてあったのは衝撃的なことだったの でもそんなことにも全然めげないで元気で明るい人だった

彼女はアクアを授かった時にとっても嬉しそうでした

ソ「あ！今蹴った 今蹴ったよ！もうすぐ会えるねー そうね、、、男の子だったらネロ 女の子だったら アクアにしましょう！」

そしてアクアが産まれてからは よくアクアの成長をよく私に話してくれました

ソ「聞いて！ 今日のアクアがすごく可愛かったのよ！ もうハイできるようになったのよ！ そしたらオーバーが すごくびっくりしてもう笑っちゃったのよ プークスクス」

リ「へえー もうハイハイできるようになったのね、、、にしてもソリア その人をバカにするような笑い方向とかならないの 今まで何度誤解されたか」

ソ「なに？今更 もう何年の付き合いじゃな今更変えるのはねー」  
リ「まあね」

アクアのことを話す時の彼女はとても輝いていたわ

ですが、、、ある事件が起こったんです

今から数千年前

デインirasがこの天界を襲撃したのです

カ「！」

やつは天界の半分を崩壊寸前までさせました

デ「はっはは！ この俺を歴史に刻むために、、、この天界を滅ぼしてやろうか！」

スラツシャー レイン カーニバル！」

デインiras鎌のような形をした魔法を無数に飛ばし天界の者 建物を次々に崩壊させた

ソ「はあ、、、はあ、、、」

リ「！ソリア 大丈夫でしたか」

ソ「ええ、、、アクア ごめんね怖かったよね」

ソリアはアクアに謝る

リ「さあここにもいずれば被害が来る

あいつの魔法に当たれば最後 破壊の魔力で体が壊されてしまう

わ  
」

ソ「ええ」

私たちは避難徐となっていた神殿に行こうとしていた

そこに

リ「あ！」

私は人混みにもまれ転んでしまった

ソ「リミル！ 後ろ！」

リミル目掛け鎌が飛んできていた

リ「！」

その時だった

リ「？、、、なんで、、、！」

私に鎌は当たらなかった  
なぜなら

ソリアが庇っていたから

ソ「がつ！　、、リ、、ミル　、、大丈夫？」

リ「何してるのよ！　あなた、、なんで！私を庇って」

ソ「なんかね、、体が勝手に動いて、、た」

リ「あんたは馬鹿だよ、、なんで、、私のために、、自分の命を、、」

ソ「、、リ、、ミル　最後に親友として、、頼みたいことが、、あ  
るの、、」

リ「頼み、、？」

ソ「、、アクアを、、頼みたいの、、」

ソリアは瀕死の状態でアクアを  
私に渡してきた

リ「、、、そんなこと言わないでよ 待ってて今助けを」  
ソ「いいの、、、もう私は、、、ダメだから、、、それにあなた言ってた、、、  
じゃない、、、当たったら、、、破壊されるっ、、、て」

リ「、、、でも、、、でも！」

ソ「こんなこと、、、親友のあなたにしか、、、頼めない、、、だから  
お願い」

ソリアの体がどんどん崩れていく

リ「そんな、、、ソリア、、、ソリア！」

そしてソリアの体は崩壊し

ソリアは死んでしまった、、、

カ「、、、そんなことが」

リ「私は自分を一生恨んでいます あの時転んでいなければ ソリ  
アが死ぬこともなかったはず、、、、以来私は親友の頼みを守るた  
め、、、アクアを自分の子のように育てていきました、、、」

カ「そのことは アクアは」

リミルさんは静かに首を振った



リ「、、、あの子にその事を言ってしまったらあの子は私を恨むでしょう、、、」

私は、、、その事が怖かった 恨まれることが 自己中な考えなのは 承知の上、、、

アクアには、、、ずっと笑顔でいて欲しかった、、、」

ア「、、、知ってた」

その時奥から声が聞こえた

カ「！アクアどうしてここに！」

ア「カズマがママをおつていったから私も追いかけたの でも途中で見失っちゃって、、、でもママのことだからって思ってたこの家に来たの」

リ「、、、アクア、、、ごめんなさい、、、本当にあなたの母親を、、、ソ

リアを私のせいで」

ア「違う ママのせいなんかじゃないよ」

リ「いいえ、、、私のせいなのよ 私はあなたに本当のことを言うのが怖かった 恨まれるんじゃないかって ただ自分のことを守るために、、、真実を言えなかった」

ア「いいの、、、それに私は真実を聞いてもママを恨んだりしないわ」  
リ「！」

ア「例え実の母親でもなくても私の今まで育ててくれたのはママですもの」

それに、、、実は薄々感じてたの実は私はママの子じゃないのかわつて、、、魔力の質や親子なのに全然似てなかったから、、、ママ 私は真実を知ってても 例え本当の母親じゃなくても恨んだりしない

、ママはママだよ」

リ「アクア、」

リミルさんはアクアに近ずき抱きしめ泣いていた  
俺は今は二人の時間にしようと部屋を後にした

## この地上に帰省を

あれから俺はアクアが出てくるまで外で待っていた  
そしてアクアが出てくると

少しスッキリした表情をしていた

カ「なんか 悩みが晴れたみたいなの顔してんぞ」

ア「、、、まあそうかもね、、、カズマ」

カ「ん?どした」

ア「修行頑張りましょうね」

アクアが手を差し伸べる

カ「、、、ああ」

俺はその手を握り握手をした

その後俺たちは神殿に戻り 各部屋に戻り次の日から修行が始  
まった

127

そして、、、半月が過ぎ

修行をして3年が経った

カ「よつと、、、お前ら準備大丈夫か?」

ア「バッチリよ」

カ「こつちも大丈夫です」

カ「よし、、それじゃ、行くぞ 地上に」

俺たちは3年ぶりに地上に帰る

リミルさん曰くさすがに数年地上に戻らないと恋しいのではと意見され3日間の帰省をさせてもらうことになった

そして俺たちはリミルさんに1度エリス様のいる空間へと移しそこから地上へ戻った

地上 side

カ「、、ここは」

め「アクセルの近くの停留所ですね」

ア「ここ懐かしいわねー 私とカズマが初めてアクセルに来た時ここに来たものね」

カ「そーいやそーうだったな」

カ（あれがもう4年ほど前、、か時が流れるのは早いな）

カ「よし それじゃギルドに向かうか」

そして俺たちは街並みを見ながらギルドへ向かった

め「3年間この街並みを見てませんが、、変わりないですね」  
ダ「そーうだな」

ア「ギルドに行ったらひっさしぶりにシユワシユワ飲むわよー」

カ「昼間から飲む気かよ、、っとそーうこうしている間に」

俺たちはギルドの建物の前に着いた

カ「、、、にしても、、、やけにギルドが静かだな」

め「ですね、、、」

カ「とりあえず、、、入るか」

俺はギルドの扉を両手を使い開けた

ルナ「いらっしや、、、！」

カ「あ お久しぶりです ルナさん 、、、？どうしました？」

ル「カ、、、カズマさん、、、ですよね、、、それに、、、アクアさんにめぐみんさん、、、ダクネスさん、、、」

ルナは涙目になりながら俺たちに確認と取った

カ「まあ、、、そうですけど、、、どうしたんですかルナさん？」

ル「！こうしちやいれない！」

とルナはギルドの奥に行ってしまった

カ「、、、どうしたんだ？」

とアクア達に聞いてみるも全員首を傾げる

その時

緊急！ 緊急！

発見しました！ 勇者サトウカズマパーティ 発見しました！

とまるでここから王都まで届くような音量でアナウンスがされた

一同「え？」

すると、、、ギルドの外からどンドンどンドン、、、と足音が近ずいてくる

冒険者「カズマたちが戻ったって本当か！」

冒険者「本当なのか！ルナさん！」

ゆんゆん「めぐみん達が帰ってきたんですか！」  
ダスト「あいつらが帰ってきたのか！」

次々とアクセルの街の冒険者がギルドに来る

カ「なななななんなんだ！これ?!」

ア「なにになになに?!」

者  
ル「皆さん！今ここに3年間行方不明となっていた魔王を倒した勇

サトウカズマパーティが今ここに帰ってきたのです!!」

一同「わあああああ!!」

ダ「よーしお前ら宴会だー！ー！ー！ー！」

俺たちは、、、何がなんだか分からないままになっていた、、、

宴会中

ダ「おーいカズマ 飲んでるかー」

カ「ああ飲んでるよ、、、にしてもお前らなんかあったのか?」

ダ「何かあったはこつちのセリフだ！

お前らこそ！この3年間どこいったんだよ！」

カ「まあ、、、色々事情があつてな、、、」

ダ「その色々つてなんだよー」

、、、俺はダストにこの3年間何をしていたのかを話した

ダ「、、、どしたお前までめぐみんみたくなつちまったのか」

カ「んなわけあるか！ 全部ホントの話だわ、、、まあ普通聞いても信じられねーよな、、、俺がダストだったら同じ反応をすと思う」

ダ「仮によ、、、その3年を修行をしていたことはいい、、、ただな！何か一つ言つてから行けよ！」

カ「しやうがなかつたんだよあん時はそんなことしてる暇なかつたんだから」

ダ「、、、お前たちがいなくなったこの3年間大変だったんだぞ、、、ゆんゆんはやつれてるし 街の奴らはあの爆裂魔法の音が聞こえないからつて禁断症状を起こした奴もいるこの3年間王都や紅魔の里ほかの街の奴らもお前らを探してたんだ 大変だったぜ、、、やつぱこの街にはお前らがいるといいんだよ」

カ「ダスト、、、」

その後はこの丸一日宴会に持ち越しだった

その後俺たちは屋敷へ向かった3年も放置してたので掃除が大変だと思ひ向かおうとしたら、、、まあ驚いた屋敷は外も中もピカピカだった



なんとも俺たちがいなくなつてから俺たちがいつ帰つてきてもいいようにとギルドの役員さんが掃除をしてくれたそうだ

ア「ただまー！ やつぱりここが落ち着くわねー」

カ「そうだな、、まあこの3年修業づくしだったからな」

め「ですね、、さてこの後どうします？」

カ「そうだな、、この街を久しぶりに回つてのもいいが、、ほかの町の人に挨拶にも行かなきゃだよな、、ダストが言つてたが紅魔の里やら王都の人たちが全面的に協力してくれたらいいからな」

め「そうですね、、私の親にも心配させてしまいましたからね」

と俺たちは風呂呂などに入りサツパリしてから

王都 紅魔の里へ向かった

この後俺たちは紅魔の里へ向かった

前日から全世界各地に俺たちが見つかったという新聞記事がばらまかれ

紅魔の里の人も既に知っていた

ひよいざぶろーさんやゆいゆいさんは

娘の帰還に泣いていた

そして三年のうちにこめっこがだいぶ大きくなつていた

その後あるえとも会つたら小説のネタにしたいと言われ、、数時間取材された

その次に王都へ向かう

王都に着いた直後 騎士団の方が城へ案内してくれた

城へ案内され中に入り

アイリス達と面会をした

、、その時俺はアイリスに飛びつかれた

それと同時に後ろの方や前の方から

から殺気を感じた主にめぐみん達やクレアからだろう、、背筋が凍るかと思つた

その後は王都へ色々な冒険者が集められパーティが行われた

、、地上に来てから飲み食いしかしてないと思つたのだが、、まあいいか

## この元幹部達と再会を

その後パーティを終えた俺たちは王都の宿で宿泊し最終日にアクセルへ戻ってきた

カ「ふう、、、さすがに2日連続宴会やらパーティは疲れるな」  
め「ですね、、、だいぶクタクタになりましたね」

ダ「だな、、、では私は少し素振りをしてくる」

カ「、、、なあダクネス」

ダ「ん?どうしたカズマ」

カ「、、、付き合ってやるよ」

ダ「なあ!?!／／ カ!カズマ! おお前あの時私を振つといてめぐみん達もいるのに!」

カ「?んまあいいや んじゃ外で待ってんぞ」

ダ「え?、、、外?」

カ「だから付き合ってやるよ 練習に」

ダ「あつ、、、は、はめたな!カズマ!!」

カ「はあ?」

お前が勘違いしただけだろ、、、

屋敷中庭

カ「ダクネスとやり合うなんて見合いの時以来か」

ダ「そうだな あの時はずまに水責めをされ その次に氷魔法をかけられ、」

め「そんなことしてたんですか、」

カ「おい！ 間違っではないけど 誤解を生むようなことを言うな！

はあ、、」

俺が練習に付き合ったのは訳がある

それは本当にダクネスは攻撃が当たるようになったのか 俺は修行をしてからあいつらの実戦を見ていない

なのでまずはダクネスの攻撃が当たるといのは本当なのか検証するということだ

ダ「では、、いくぞ」

そう言っつてダクネスは俺に距離をつめてきた

ダ「はあ！」

ギイン

ア「!!ほんとうだったのね

当たるとはな、」

ああうちのクルセイダーはもうただの壁じゃないようだ

カ「本当に当たるとはな、」

俺は魔装剣 でダクネスの剣を受け止める

修行もあつたからかスピードも上がっているダクネスのパワーがあるからか

より攻撃が重い

ダ「このぐらいではまだやられないでくれよ カズマ」

カ「そこまで弱くはねーよ！」

俺はダクネスの剣を押し返し距離を取る

ダ「続けていくぞ！はあ！」

カ「こい！」

そしてそこから1時間俺たちの練習は続いた

カ「ふう、よし今日はここまでにするか」  
ダ「そうだなちようど昼頃だろう  
昼食にするか」

俺たちは一度屋敷に入り軽く汗を流し昼食をとった

カ「そういえば俺たち帰ってきてからウイズの店に行っていない  
な」

め「そういえばそうでしたね」

カ「よし久しぶりに行くか 3年間で店が潰れてなければいいんだ  
が」

俺たちはウイズのいる店へと向かった  
だが俺たちはこの後予想もなかったことが起こることは今は誰  
も知らなかった

俺はウイズの店に着き 扉を開ける

ウ「いらつしやいませ、！カズマさん それに皆さん！帰ってきて

ていたんですね」

カ「おう 久しぶりだな ウイズ」

3年たつてはいたがウイズの見た目は変わらずだった

そして奥からは

バ「おおー 誰かと思えば3年間どこかへ姿を消していた 勇者  
御一行様ではないか」

カ「お前も相変わらずだな」

バ「小僧もな、、、と言いたいところだが 小僧は相変わらずという  
か、ウイズ、、、 汝も気づいておるであろう

小僧から神の魔力を感じるのを」

ウ「ええ 一昨日この付近に神聖な魔力をふたつ感じたんです ひ  
とつはアクア様と思ったんですが まさか2つ目がカズマさんだつ  
たなんて」

カ「気づいてたのか!」

バ「当たり前だ 以前は感じなかったものだからな 、、、 貴様らこ  
の3年間何をしておったのだ?」

俺たちは2人にこの3年間何があつたのかそしてこれから何が起  
こるのかを話した

ウ「この世界が減ぼされる、、、」

バ「ふむ、、、 神の魔力があるせいかな今まで通り小僧の心を少ししか  
見通せないが、、、 小僧が言っていることに嘘はないようだ、、、 この件

に関しては吾輩も去年から気にはなっていた」

ア「どういうことよ」

バ「去年、、、突如どこかからか破滅の魔力の圧を弱くだが感じてな、、、その時は気のせいだと思っただが 小僧らの話を聞いて確信が ついた、、、あれは只者ではないぞ」

ウ「バニルさんがそこまで言うなんて、、、」

ア「確かにうつすら感じるわね、、、」

封印が弱まっているからかしら、、、」

おれはバニルの方をみると

バニルは何やら考えていた

そして

バ「小僧 少し表に出てはくれないか」

カ「は？ まあいいけどさ」

め「どうしたのでしょうか、、、わざわざ外に出るなんて」

そう言ってカズマはバニルについて行く アクセルの街を出て少し遠くの野原に行つたところでバニルが止まった



カ「おいバニル どこまで行くんだ？」

バ「単刀直入に言うぞ小僧 吾輩を倒してみろ」

一同「ええ!？」

カ「は?! いやいや なんで俺とお前が戦うことになるんだよ そもそもお前と俺がやりあったってどう考えてもお前が」

バ「小僧 自分がどれほどの魔力を持っているのか どれほどの力を持っているのか自覚していないのか？」

カ「力って、、まあ色々あって俺の中に神の魔力が入ってるけどさ、、」

バ「、、ふふふ、、ふははははははは！ やはりお前は対した人間よ この数年である魔力 あのオーラ何があったのか気になる、、これは楽しくなりそうだぞ」

俺はここまで楽しそうにしているバニルを見た事がなかった

さあ 魔王を倒した勇者カズマよこの 見通す悪魔にして地獄の公爵

バニルを倒してみるがいい！」

## この悪魔と決闘を

カ「ホントに言ってるのかよ、」

バ「来ないならこっちから行くぞ！」

バニルは地面を踏み込みカズマにちかづく

カ「な?! くっ！」

カズマは腕を組みバニルの拳と受け止める

カ「この力、お前マジで言ってるのか」

バ「言っただであらう本気で来いと吾輩も本気で行くに決まっておるわ！」

バニルは怒涛の勢いで俺へ攻めてくる

おれはそれを避けながらバニルに話しかける

カ「そもそも！なんで俺と戦うんだよ」

バ「吾輩は前にも言っていたであろう 女神には1発キツいのくらわしてくれるわと」

カ「そんなこと言ってたな！だからってなんで俺を！あれはアクアの時で！」

バ「悪魔と神はついの存在 そして決して分かり合えない 存在だ 今までは小僧を人間として扱っていたが、今の小僧は人間とは程遠い力とオーラをもった そしてついには神の魔力を持ったという、そうなってしまったてはもう小僧を人間として扱う事はできない、神と同等の扱いをさせてもらう！よって 貴様にも1発きついのをくらわしてくれるわ！」

バニルはそう言っつて俺に殴りにくる

俺は拳を腕で払いバニルと距離をとる

カ「、、そういうことかよ、、ならこつちも本気でやるぞ、、バナル」  
バ「望むところだ」

俺は腰にかけていた魔装剣 Zを抜く  
バ「、、来い」

カ「はあ！」

俺は地面を踏み込み込みバナルにちかづく  
おれは剣へ魔力を流す

この魔装剣は文字の通り魔力を装う剣  
魔力によって色々な属性付与させることが出来る

カ「エンチャントフレア！

バーニングスラッシュ！」

魔装剣に炎がまといバナルとの距離を詰める

カ「はあ！」

バ「ほう、、魔力を剣に流し炎を纏わせたか面白いだが まだ甘い  
！」

バナルは俺の剣をさけ 拳を入れようとするが俺はどうか剣で  
受け流す

カ「、、さすがは元魔王軍幹部で自称魔王より強いバナルさんと呼  
ばれてるだけあるな」

バ「小僧まだ余裕そうだな」

カ「いや、、結構ビビってはいるがな そりゃ一人で強敵と戦う  
のなんて魔王戦以来だしな！」

俺はそう言っってバナルへ攻めていく

カ「はあ！」

バ「どうしたまだ加減でもしているのか」

カ「このやる、、、エンチャント！セイクリッド！ウオーター！

オーロラスラッシュ！」

水の魔力の神聖な魔力を合わせた

魔装剣でバニルへ攻撃をし

バニルの片腕を切り落とす

カ「ちい 腕か、、、」

バ「くっ、、、さすがに神聖属性は効くな」

カ「お前の本体はその仮面だろ その程度、、、なんてことないだろ」

バ「、、、まあそうだな」

バニルは土で腕を作り直す

バ「、、、ならばこれならどうだ、、、」

パチン

バニルが指を鳴らすと地面が盛り上がりどんどん人形が出来上がっていく

カ「バニル人形か、、、厄介なもんを作りやがって」

バ「行け！」

バニル人形は一斉に俺の元へ入っていく

カ「大勢なら！ライトオブセイバー！」

光の剣をだし人形軍団を一掃する

バ「まだまだだ！」

バニルは次々と人形を生み出し俺の方へ攻めさせる

カ「くっそ 数が多いな      ライトオブセイバー！ライトオブセイバー！」

無数に来る人形をおれは次々と倒していく

バ「…、ほうこれも難なくこなすか」

カ「お前本気と言っておいてあの殺人光線は打ってこないんだな」

バ「ほう…、お望みならばしてやってもいいぞ…、乱発！バニル式殺人光線！」

バニルの指の先から次々に光線が放たれる

カ「な！ ちい      くっそ！ 数が多い」

その光線はその名の通り乱発

四方八方から光線が飛んでくる

俺は剣で光線をはじくが1発1発がかなり重い

そしてその名の通り乱発

ア「！こっちに光線が！」

敵味方関係なくその光線は飛んでくる

め「任せてください！ プリズンシールド」

めぐみんがアクア達を囲うようにバリアを貼る

め「これで大丈夫です」

ア「すごいわねめぐみん」

バ「ほう爆裂魔法しか覚えていなかったあの魔法使いが、、」

カ「あれならアクア達に被害は行かなそうだなあれなら俺も存分に  
行ける！」

俺は魔装剣をかまえる

カ「はあ！」

俺は地面を踏み込み間合いを詰める

バ「ふっ はあ！」

バナルはその攻撃を避けカウンターを仕掛けるが 俺は剣でその  
攻撃を流す

カ「セイクリッドクリエイトウオーター！」

バ「殺人光線！」

俺の魔法とバナルの光線が相殺される

カ「まだ決定打がだせないな、、隙がない」

バ「どうした魔王を倒した勇者の実力はこんなものなのか！」

バナルは俺の方へ攻めてくる

カ「くっそ この ライトニング！」

バナルは魔法を避ける

バ「魔法をそんな至近距離で打てば、、はあ！」

バナルの蹴りが俺の腹に入る

カ「があ！　、、　ちい」

バ「隙ができるに決まっているであろう　まだ行くぞ！　殺人光線！」

光線が俺めがけ飛んでくる

カ「くっ！」

俺は剣で光線を受け止める

カ「ぐぬぬ、、　はああー！」

俺は光線を押しバナルへ近づく

バ「ほう、、　なら威力をあげるとしよか！」

カ「ぬお！　この、、　負けるかー！

がああああああああー！」

俺は地面を踏み込みバナルへ近づく

ア「、、　すごい　カズマがあああの悪魔もやり合うなんて、、」

カ「はあああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は殺人光線を剣で振り払い空の方へ飛ばした

バ「これすらもこなすか」

カ「だてに修行してるんでな」

バ「ならば、、　行け！」

バナルは指を鳴らしバナル人形を生産する　そして

バ「この攻撃を耐えてみる！　乱発殺人光線！」

俺に向かって人形そして光線が攻めてくる

俺は魔法で人形を倒していき剣で光線を防いでいく

カ「くっそ！　光線の時だけでも苦労したのに人形までか！」

バ「ふはははは！ さあ存分に苦しむが良い」

光線と人形が四方八方から俺を狙ってくる

カ「クリエイトウオーター！

インフェルノ！ ライトニング！ちい さつきより多くなってやる！」

これじゃ埒があかない…、なら

カ「人形とお前諸共飛ばしてやるよ！」

この距離感なら行けるこれで決める！

カ「エクспロージョン！」

ドゴーーーーー

バニルや人形達はその爆裂魔法に巻き添えになった

カ「はあ…、はあ…、 さすがに魔力もそこにつきそうだ」

そして俺はバニルがいた場所へ向かうと

バニルは仰向けで倒れていた



バ「、、、」

カ「さすがのお前も爆裂魔法は耐えられなかったろ、、、これで、、、俺の勝つ、、、!!」

その時だった

仰向けに倒れていたバニルの体が砂に変わった

カ「!! これは」

バ「ふははははは！ 騙されたな小僧！」

カ「お前、、、なぜ！」

バ「あの時小僧が光線と人形に手一杯の時に偽物と入れ替わっていたのだ」

カ「なに！」

バ「さて、、、そろそろ決めさせて貰うとするか」

すると俺の地面の下から人形達が出てくる無数のバニル人形が俺の体の身動きを封じてきた

カ「な！ くっそ人形が クツソ離せ！、、、くっそ 力が、、、入らね、、、」

バ「油断大敵だぞ小僧 あれほど魔法を使つて しまいには 爆裂魔法を放つた貴様の魔力や体力も限界だろう さて、、、吾輩も決めさせてもらうとするか」

バニルは光線を最大まで溜めている

バ「威力最大のこの光線を食らうがいい」

め「まずいです！ あの威力はとんでもないものです！ いくらカズマでも！」

ウ「バニルさん！カズマさんを殺すつもりですか！」

ア「あんなの食らったら！カズマ！逃げて!!」

カ「クツソ こいつら固くなってきて身動きが、、、?!」

バ「くらうがいい、、、」

カ「!」

最大出力 バニル式殺人光線！」

その瞬間俺の目の前はバニルの光線で真っ赤になっていた

この仮面の悪魔に決着を

ア「カズマーーーーー!!」

光線がカズマに直撃し爆発が起きた

バ「、、、」

光線を打った先は土煙に覆われていた

ア「、、、バニル、、、よくも、、、

カズマを!!」

バ「、、、これで終わりか?小僧!」

アめダ「?!」

バナルはカズマがいたところに声をかけアクア達が光線を打った先を見る

カ「、、、、まだだ、、、、

俺は、、、この世界を、、、あいつらを守るのに、、、こんなところで、、、躓いてたまるかよ!!」

俺は記憶を戻したその日の夜 泣いてしまった

あの時自分に力があれば、、、あいつらを死なせるところもなかったと後悔をして 死んでも復活なんて普通はおかしいこと だから自分で決めた二度と死ぬことはしないと

だが 俺は再びチャンスを貰えた

そしてリミルさんの気持ち、、、俺は決心をしたこの修行で力を持ちあいつを、、、デイニラスを倒すと

、、、あの野郎、、、本気で打ってきやがった クツソ、、、回復は、、、今の魔力量じゃ無理だ、、、なら

俺はバナルを直視する

「これはあまり使いたくなかったんだが、、、使わしてもらおうぜ、、、奥の手ってやつを」

バ「ほう、それは一体なんだ」

カ「ネバー」

俺はたった一言呟いた

カ「これが今の俺ができる 最強の戦い方だ」

バ「、、ふむ 何か変わった様子はないな、、?!」

カ「、、、エクスペロージョンエクスペロージョンエクスペロージョ  
ンエクスペロージョンエクスペロージョンエクスペロージョンエク  
スペロージョンエクスペロージョンエクスペロージョンエクスペ  
ロージョン!!」

俺は息が出続ける限りエクスペロージョンと唱えた

俺の行動にアクア達は驚く

ア「えええ！　？ちよつとカズマ！さつき魔力が少ないって！」

め「そうですねよ！しかも連発なんて　以前私が打った時も私の体に  
異変もあつたでしょう」

ダ「あれだけの爆裂魔法をマナタイトなしで、、、いったいどれだけ  
の、、、あれをまともに受けたらさすがのバニルも、、　!!おい  
あれを」

と爆裂魔法を打った先には

土で体を覆い　バリケードのように守っていたバニルがいた

バ「、、、何故だ　あれほどの魔法を打つていながら　ここで爆裂魔  
法を連発、、、だがあれだけ打つていれば小僧は魔力切れで、、、!!」

バニルはカズマの方向を見ると

カ「…、誰が…、魔力切れで倒れるだって？」

バ（どういふことだ…、まさかあれだけ打つてもまだ魔力が残っているというのか）

カ「…、今おまえが思っていることに答えを言ってやる　俺はさつきネバーと唱えた　…、これが俺が3年で得た力　俺は

「ネバー」

これを唱えれば30分間　魔力　体力とその他のステータスが一切減らないチートみたいな支援魔法だ

…、まあ月一でしか使えないがな！」

バ「…、ふはははは！　…、小僧　どうやら決めに来たな…、」  
カ「ああそしてこれも新たに手にした力だ」

俺は拳に…、

神の魔力を流す

ア「！あれは」

アクアならすぐにわかるだろう

俺は今

ゴツドブローを発動した　だが少しアレンジを加えてな

普通のゴツトブローはどんなモンスターもワンパンできるほどの威力だから単発だった、、だが俺はネバーを使えばその攻撃を無限に続けられるのではないかと考えた

そしてこれが俺が考えた　オリジナルの神技

カ「ゴツドブロー改め　ゴツトグローブとでも言おうか」



バ「ほう、、神の魔力を常時拳に流し 近距離戦を挑むか しかも先程言ったことが本当なら小僧は30分間魔力切れがないか、、こい小僧」

カ「言われなくてもな！」

俺がネバーを教わったのは修業を初めて1年経ったある日

ネ「カズマ 実はなこの修行において 目標がいくつがある 今からそのうちの 1つを教える」

カ「いったいどんなのなんですか」

ネ「今から教えるのは ネバー これはある意味禁術とも呼ばれている 技だ」

カ「禁術、、でもなぜ？」

ネ「これは別に攻撃魔法じゃない 支援魔法の類のだが この魔法に勝る支援魔法は他にない この ネバー と唱えると30分間 体力 魔力 そのほかのステータスが一切減らないつまり無限に使えるんだ」

カ「ええ?! そんなにすごいですか それじゃ禁術になりますよ、、でもなぜ ネバーさんは覚えてるんですか？」

ネ「この魔法は俺たちの先祖から代々受け継がれてきた魔法なんだ だからこの魔法を使えるのは俺たちの家系だけ、、他人に教えることも本来なら禁止なのだが 今回は特別に許可がおりてな」

カ「そんなことが、、」

ネ「だから この魔法をカズマには修行期間3年までにこの魔法を完璧にしてもらおう 、、そうそうこの魔法は月に1度しか使えない 無理に2回を使おうとすると体が 壊れてしまう」

カ「わかりました！」

カ「行くぞ、、、すうー、、、はあー」

バ（なんだ、、、この状況で深呼吸、、、）

バ「だが 隙を作るとは傲慢ややつ！

くらうがよい バニル式

殺人k グハア!!」

カ「、、、誰が隙を作るって」

俺はバニルを上から殴り地面に叩きつける

ウ「、、、いまカズマさんの動きがまったくみえなかったのですが、、、  
一体何が、、、」

ア「簡単なことよ、、、カズマは見えないほどのスピードであいつに  
近ずき

攻撃を与えたのよ カズマは神の魔力を使っているからあらゆる  
ステータスが格段と伸びているわ、、、ざつと5倍程かしらね」

バ「くっ やるでは無いk カ「ふっ」ダハアー！」

カ「言つたる手加減しねーって」

ア「多分今のカズマは

この世界でいちばん強い存在になっているわ」

バ「…、なら 吾輩も本気にしよう

人形達よ 吾輩を纏われ！」

バナイルは人形を地面から生成し自分の体に纏わせる

そして

バ「ふはははは！ 吾輩を奥の手を使わせてもらった 名をつける  
なら ジャイアントバナイルとでも言おうか」

バナイルは土で体を大きくし 約3mほどになっていた

カ「そんな 大きすぎや俺のスピードに追いつけるのか？」

バ「随分と傲慢になったな小僧 舐められたものだ！はあ！」

バナイルは俺に攻撃をするが俺はそれを避け背後に周り 拳をふるった

が

カ「！ …、硬い」

バ「そうだ この硬さはアダマントイトをも凌駕する硬さ…、あの爆裂魔法にすら耐えられるものだ」

カ「なるほど…、さつき爆裂魔法連発を防いだのはこれを使ったのか…、」

バ「そういうことだ小僧 はあ！」

バナイルは俺に向かって巨大な拳で殴りつける

カ「が、、」

俺はその拳を片手で受け止めた  
カ「だからなんだって話だがな」  
俺は拳をに力を入れるそして

グシヤ

バナルの拳を粉碎した

バ「なに?!」

カ「行くぞ、、」

カズマは地面を踏み込みバナルに近ずき攻撃を仕掛ける  
バ「ちい、、舐めるなー!」  
もう片方の拳で俺を殴りに来るが俺はそれを避ける  
そして

猛スピードで攻撃をだし始める

カ「ふっ はあ! ふっ おりゃ!」

俺はバナルの体に連撃を入れる

バ「ぐっ があ、、はあ、、」

カ「そろそろ出てこいよ、、」

カ「ゴツドブローー!」

俺はバニルの巨体の腹に拳をふるったそして

ジャイアントバニルの体はひび割れ

粉碎し爆発した

バ「…まさか…あの小僧が…」

カ「…さて…そろそろ時間が終わりそうだ…これで決める」

カ「セイクリッド エクソシズム！」

バニルへ浄化魔法をかける

バ「くっ…、脱皮！」

バニルは仮面を投げる。そしてその投げた仮面から新たな素体を作り出す

バ「あの威力まともに食らっていたら…」

カ「隙だらけだぞ」

バ「!!」

カ「喜べよ この技をくらうのがお前が初めてだからよ！」

ゴツドブローラツシユーーー!!

俺はバニルの仮面に向けてラツシユを叩き込む

カ「はああああああああああああああああああ!!」

バ「ぐふあ! ぐふう、、、があ!、、、まさかここまでとは」

俺はありつたけの魔力を拳にためる

カ「これが俺の全力だあああーーー!!」

ゴツ

ト

ブ

ローーーーー!!

おりやーーーーー!!

おれはバニルの仮面めがけ俺の拳を飛ばす

そして

ピキとバニル仮面からヒビの入る音になる

カ「はあ、はあ、30分ジャスト、、、、」

俺はその疲労から 地面に座り込む

バ「まさか、、、、この見通す悪魔を冒険者でありながら、、、、1人で倒すとは やはり面白い人間よ、、、、」

サトウカズマ　、、、、もはやこの世界では汝が最強かもな」

カ「はあ、、はあ、、地獄の公爵様にそう言っつて貰えるとは光栄だね、、、、最強ね、、、、本当にそうだったら良かったよ、、、、いいのかほんとに？いくらお前が破滅願望を持つてるって言っつても」

バ「吾輩は破滅願望がある、、、、だが吾輩は次の残機を使っつて蘇るであろう　、、、、吾輩の夢を叶えるまでは死ねんな　それに

吾輩がいないとあのポンコツ店主がなにをしでかすかわかったもんじゃからな

それと　貴様らに1つ予言を伝えよう

汝 この先の選択あやかれば 汝らの味方の命尽きる、と」  
カ「なんだよそれ！」

バ「つまりこの先選択することがあれば慎重に選ぶべきということ  
だ

詳しくは言えんのでな、」

カ「、、そうかい ありがとうな

それじゃ、、その仮面、、割らしてもらうぜ」

バ「ふん 好きにするがいい」

そして俺は地面から立ち魔装剣をかまえ

バニルの仮面目掛け突き刺す

そして



仮面は貫かれ  
パリンと音を立て 仮面は割れた

バ(さらばだ、い)

ちていった  
バニルの仮面が割れると同時に素体となっていた土の体が崩れ落

め「カズマがここまで強くなっているなんて」

ア「もうびっくりね、」

ウ「まさか あのバニルさんを倒してしまうなんて カズマさん本当に強くなったんですね」

各々がカズマの成長に驚いている  
がひとつ不可解な事が起きている

ダ「、、なあ 、、まだバニルは復活しないのか」

カ「そういや確かに、、あいつどっかに隠れてんのか、、けどそんなことするよなやつでも、、！、、」

ア「ねえ、、みんな 聞いて欲しいんだけど、、いいかしら」

め「?どうしたのですアクア改まって」

なにかの異変に気づいたらアクアが皆に話をする

ア「実はね、、私、修行もあつてだいぶ遠くにいる邪悪な魔力を感じることができるようになったのよ」

ウ「それは凄いですね ですがなぜそのことを?」

カ「、、アクア、、お前もわかったのか」

ア「この世界のどこからも悪魔の魔力を感じないの」

ウ「え、、、」

め「そんな!! だってバニルはまだ残機があると、、、」

ダ「本当なのかアクア カズマ」

カ「ああ、俺もアクアほどではないが感じ取れる 広さを例えるとここから王都までだが、、、この世界のどこからもバニルの魔力を感じ取れない」

ダ「じゃあ、、、バニルは最後の残機だったのにカズマに勝負を、、、」

ウ「そんな、、、バニルさん、、、 どうして、、、あんな嘘を、、、あなたの夢はどうするんですか、、、 ダンジョンを作るんじゃないんですか、、、」

カ「ウイズ、、、」

俺達はウイズと共にアクセルの街へ戻り店に戻った

そしてとうとう地上から帰る時になる

ウ「お久しぶりに皆さんに会えてよかったです」

ダ「ああ こちらもだ、、、大丈夫かウイズ?、、、その、、、バニルのことは」

ウ「ええ 大丈夫です、、、あのバニルさんですからいつかひよっこり戻ってくると思うので」

カ「、、、そうか それじゃ行ってくるな」

ウ「はい 天界での修業頑張ってくださいね」

ウイズからの応援をもらい俺たちは店を後にしアクセルの外壁の出入り口に移動する

だがあの時のウイズの笑顔はいつもとは違い、、、自分を誤魔化していたような笑顔をしていた気がする

ア「カズマ、、、後悔してるの？」

カ「、、、まあな ウイズの顔を見てしまったらよ」

ア「、、、そうよね、、、でもあの悪魔のことだし 地獄にでもいるのかしらね なんにせよあの悪魔がそう簡単にいなくなるわけないわ」

カ「、、、だな」

そして俺たちは俺のレポートでエリス様がいる空間に行き天界へむかった

## この修行にひと手間を

あれから天界にもどってから修行が始まる、そして半年が流れる

俺はネバーさんの実践もふまえ修行を行っている

ネ「、、、どうしたカズマ、、、 なにか迷っているのか」

カ「、、、まあ、、、ちよつと」

ネ「悩み事あるなら話しとけ」

カ「、、、いえ大丈夫です」

ネ「そうか まあカズマがそう言うなら いいんだがな さて今日はここまでだ」

カ「今日もありがとうございます」

ネ「ああ そうだ カズマ明日この部屋でてリミル様に会いに行くぞ」

カ「え？リミルさんに？どうして」

ネ「何やら新しいことを教えるらしい」

新しいこと、、、

そして明日になり俺とネバーさんは部屋を出る

ア「あら？カズマどうしたの？」

ア「カズマがいた」

カ「お前こそどうしたんだよ ここにいるなんて」

ア「なんかママに呼ばれてね だからここにいるの」

カ「お前もか」

ア「カズマもなの？」

リ「来てくれましたか2人とも」

オ「おう 久しぶりだな 2人とも」

ア「ママ それにオバニー！」

カ「リミルさん どうして俺とアクアだけを？」

リ「それは2人だけにしか、、正確には神の魔力ある秘伝を教えるためです」

アカ「秘伝、、」

リ「ええ、、実際にオーバーに見せてもらいましようでは オーバーよろしくお願いいたします」

オ「了解しました じゃあ 2人ともよく見とけ これが秘伝だ

覚醒」

その瞬間オーバーから膨大な量なオーラ 魔力圧を感じた そして今のオーバーさんには絶対に勝てないと確信できた

カ「な！ なんて圧、、」

ア「見てるだけで押しつぶされそう」

オ「これが秘伝 覚醒だ！ これを使うと自分の体力魔力その他のステータスが50倍になるものだ」

カ「まんま棒超野菜人じゃねーか」

ア「50倍、、、そんなに」

オ「これはカズマやネバーが使える  
ネバーとは少し違うあっちは月一の30分間だが この覚醒は月  
一などという制限はない

だが この覚醒はネバーより扱いが難しい いっぱ 力の力量魔  
力の流しすぎで自我を失って暴走をおこすところがある」

カ「それは、、、」

ア「でも カズマがネバーを習得したのが2年弱なのよ 間に合う  
の？」

オ「そこは、、、根性だ」

カ「精神論かよ！」

オ「さて この1年と半年は俺が直々修行をつけてあげよう！ 覚  
悟しろよ」

カ ア 「よろしくお願いいたします」

こうして俺とアクアはオーバーさんからの教えを受けることに  
なった

めぐみん side

め「、、、チエインエクスプロージョン！」

その直後爆裂魔法の魔法陣が複数出現し 連続で爆裂をおこした

フ「すごいです！ めぐみんさん

この3年半でここまでいくなんて、、、」

め「、、、いいえまだまだですね

フレアさん さっきのチェインエクスペロージョンあなたはコピー出来ますか？」

フ「、、、正直怪しいですが多分まだコピー出来ます」

め「ですよね、、、この修行でダクネスもカズマもアクアもすごく成長しています

、、、ですが 私は成長しているのでしょいか もちろん フレアさんと修行を初めてから比べたら 成長したと思います 、、、ですが今の私でカズマのパーティにいて良いのでしょうか ダクネスは当たらなかつた剣を当てるようになりアクアも頑張つて知力を伸ばしてる 私だけ苦手を克服をせず ただ自分が得意なことだけやってみみたいな苦手なことから逃げてるのではないかと、、、そう感じてしまふんです」

フ「、、、僕はそうは思いませんけどね」

め「どうしてです？」

フ「僕だって魔法以外はからつきしダメで剣も触れないし 体術だってダメでした けど、、、ある時オーバーさんがこう言ってくれたんです」

オ「いいか 人はそれぞれ得意なこと不得意なことは必ずある不得意なことを克服するのはいいことかもしれない

だがな 別に得意なことだけを伸ばしたっていいんだ 自分の長所を強さを伸ばしていつてよ じゃあ不得意なことはどうすればいいか？ 仲間だ 仲間と一緒に頑張つていくんだ 何も一人で抱え込まなくてもいい 支え合つていけばいい

それが仲間つてもんだ」

フ「だから めぐみんさん そんなふうを考えなくても大丈夫ですよ」

め「、、、そうですね 私は何を迷っていたのでしょうか」



そう 私にはあの仲間たちがいる 頼りになる仲間がいる これ  
でいいんだ

カズマが支えてくれたこの爆裂道一度辞めようとしても応援をし  
てくれた

そんな彼の期待に答えるために

め「私は世界一 いや この世で1番の魔法使いになってやりま  
しょう!!」

我が名はめぐみん! アークウイザードにして 爆裂魔法を操る  
もの この世で唯一の最高最強の魔法使いになるもの!」

ダクネス side

エ「ダクネス、、、お前にある技を教えよう」

ダ「ある技、、、ですか」

エ「ああ この3年半でお前は剣術そして必殺のデストローダをマ  
スターした そして今から教える技は私が使う技の中で威力はいち  
ばん高い その分体への負担は大きい だが今のダクネスなら  
その心配もないだろう」

ダ「、、、」

エ「その技とは

トルエノ・デル・ソル だ」

ダ「トルエノ・デル・ソル、、、」

エ「この技は発動したら 周りに雷属性のオーラが出る それはまるで雷がケルベロスのような 形になる  
そしてそれは放った相手を噛みつき 動きを封じ そこへ 神速の速さで斬る、、、という技だ」

ダ「なるほど、、、」

エ「では早速だが その型を教える」

ダ「よろしくお願いいたします」

アクア カズマ side

オ「どうしたお前ら？もうへばつちまったのか？」

カ「はあ、、、はあ、、、これ、、、ネバーの時よりきつい」

ア「そうね、、、勉強よりきついんじゃないかしら、、、」

まず覚醒の仕方は神の魔力を持つことが絶対条件 そして 魔力そして精神が滑らかであり清らかなものでなければならぬ

だが俺には神の魔力と人の魔力が混じっている

オーバーさんいわくもし覚醒ができてもざっと半分2.5倍強くなると言われた

純粋な神の魔力だけではないからな、、、そこは仕方ない

この修行を初めてはや2ヶ月

アクアの方はもう一歩のところらしい

、、、俺も頑張ってかないとな

## この天界に襲撃が

?? side

今から1年前

? 「最近、、何やら天界の方で徐々に大きくなっている魔力があるな」

○ 「ああ、、そうだな 気になるのか」

? 「んなわけねーだろあんぐらいの力じゃ俺たちに到底及ばない」

修行3年9ヶ月

? 「、、遥かに伸びているこの2年で」

○ 「驚いたな 2年弱でここまで伸びている、、なあどうする

ナガト」

ナ 「そうだな、、少しちよつかいでも出しに行くかお前は来なくてもいい」

○ 「へいへい 、、んで何しに行くんだよ」

ナ 「、、天界に行く、、奴らを潰す準備をする」

天界 s i d e

修行期間3年11ヶ月31日目

この覚醒の修行を初めて半月が過ぎようとしている

カ「ふう、、、」

ア「はあく、、、」

オ「よし、、、 2人とも

始めろ！」

ア カ 「!! 覚醒！」

その瞬間 自分の中の力が魔力が溢れてくる  
俺やアクアの周りには緑 青 のオーラを纏う

カ「出来た！、、、 けど まだこの力量  
ざっと18倍、、、」

ア「私もね、、、 25倍ぐらいかしら、、、」  
やはりアクアの方が純粋な神の魔力だからか覚醒への適性が早い  
オ「この短期間でここまで出せる方がすごいもんだ よく頑張った  
な2人とも」

カ「オーバーさんの教えがあつたからですよ」

ア「本当にありがとう オバニー」

オ「この調子なら覚醒も完璧に行けるかもな」

ア カ 「はいー」



め「、、、これが紅魔族随一の天才魔法使いの実力です、、、さすがの最大出力の爆裂魔法、、、魔力のほとんどが使われましたね、、、今の魔力量では今までの爆裂魔法1発だけですかね」  
フ「、、、本当に凄いですよ、、、人間でここまでの威力、、、敵にしないです」

ダクネス side

ダ「、、、ふう」

エ「よし、、、今だ！」

ダ「、、、トルエノ・デル・ソル」

雷がダクネスの周りに纏わり

ダクネスが剣をふり雷のオオカミが数匹的に噛み付く

そこへ 素早く剣を叩き込んだ

ダ「はあ、、、はあ、、、」

エ「この数ヶ月でよくここまで仕上げられた だがまだ甘いところはある  
そこを仕上げてください」

ダ「はい！」

修行期間4年目

カズマ side

この修行を初めてもう4年になろうとしている 4年前と今では魔力が何十倍も変わっている 力も前よりすごくついている

カ「ほんとに俺ら強くなってるんだな」

ア「ええ、、これもオバニーたちのおかげね」  
カ「そうだな、、?!」

その時  
突如地面が揺れた

カ「なんだ！この揺れは爆裂魔法では無いぞ」

オ「大変だ！2人とも」

ア「オバニー！何が起きたの！」

オ「2人ともこつちへ来てくれ  
もうあの2人も来てる」

俺たちはオーバーさんに連れられて外へ出る

するとそこには

天界の街が火の海となっていた

ア「なによ、、これ」

オ「わからん とにかく街の奴らを避難させる！」

カ「分かりました」

そうして俺たちは街に残されていた人たちを神殿へ避難させた

そして俺たちパーティーオーバーさん達そしてリミルさんと話し  
合っていた

フ「一体何が起きたのです、、、」

リ「それを説明するために皆さんに集まっていたいただきました、、、まずはこの映像を見てください」

リミルさんが映像を映し出すそこには

天界の人たちを襲う悪魔達が映っていた

カ「なんだよ、、、こいつら」

リ「この悪魔は上級デーモンです並のデーモンと比べて遥かに強い悪魔です」

ダ「そんな悪魔がこんなにも、、、」

リ「偵察藩によると奴らは4つの班に別れており今この天界の森で息を潜めています奴らをこのまま放置するのは危険です

カズマさん、、、協力して頂けませんでしょうか」

カ「、、、もちろんさせてください」

ア「ええ 悪魔ごとがこの天界を滅ぼそうとするなんて100万年早いんですよ」

リ「ありがとうございますでは各班に別れ敵のアジトへ突入悪魔を倒しましょう」

全「はい！」

こうして東西南北に別れてる敵陣へ

東にネバーさんリミルさん



西にフレアさんリポカさん  
南にエスパードさんオーバーさん  
北に俺たちが行くことになった

## この天界で戦いを

俺たちはデーモン達がいる北方面に足を運んでいる

カ「魔力感知によると、、、あつちか」

め「、、、にしても疑問です」

ダ「何がだ？」

め「この4年間何もなかったのにとつぜんの悪魔たちの襲撃、、、とても不自然だと思うのです」

ア「つまり、、、これは誰かが悪魔を引き連れて天界を意図的に襲わせたってこと？」

め「恐らく、、、」

カ「ってことはあの4つの中のうちどこかに首謀者がいるって訳か」

ア「どちらにしても この天界を襲うなんて許せないわ」

カ「落ち着けアクア、、、いいか打ち合わせ道理に行くぞ」

作戦はこうだ

まず敵のアジトへ爆裂魔法を放つそれが戦いの合図でもある

今のめぐみんの爆裂魔法ならあのデーモン達は一溜りもないだろう

そして爆裂魔法から逃れた奴らがいたらめぐみん以外の俺達でそいつらを倒していく

仮に首謀者が北の方にいたらめぐみんが空に爆裂魔法をしてオーバーさん達に連絡する

カ「つと、、、ここか」

め「では、、、いきます」

カ「頼んだぜ、、、」

め「、、、！エクスペロージョン！」

ドゴーーーーー

南side

カズマたちの方から爆裂魔法が見えた

オ「おうおう 派手になってんなー、、、さてあれが開戦の合図だ  
この天界に喧嘩売ったこと後悔させたる」

エ「ああ、、、奴らに思い知らしてやろう」

オ「天界式武術、、、」

エ「雷鳴剣 剣術、、、」

オ「セイクリッド 発勁！」

エ「トルエノ・デストローダ！」

オ「バーが拳をつくとその圧でデーモン達が吹き飛び  
エスパードの技により次々にデーモンが切られていく

西side

フ「行きますよ！リポカさん」

リ「ええ 行くわよ フレアくん！」

フ「フレイムメテオ カーニバル！」

リ「セイクリッドクリエイトウオーター！」

空から炎と水の雨が降り注がれデーモン達を倒していく

東side

リ「では行きますよ」

ネ「はい リミル様」

ネ「天界式武具、、、三節棍

ネバー エンド ラッシュユ！」

三節棍を持ち次々とデーモンと倒していか

リ「あなた方はやっては行けないことを侵しました その罪は地獄でも償えることはないでしょう、、、リミリット」

リミルはサークルを作りその中のデーモンは時が戻され自分が産まれる前まで戻され存在が消えた

北side

俺たちは爆裂魔法を放ったあとの森に隠れたデーモンを駆除している

カ「ふっ！ さて、、、これだけだ、、、大半はやっただろう、、、」

ア「、、、いえ 何やら嫌な予感がするわ」

ダ「ああ、、、どこからか誰かに見られているか」

カ「、、、！ そこか！狙撃！」

俺は森の中へ狙撃をすると

放った矢が空中で止まった

？「ほう、、、人間がよく気づきましたね」

と声が聞こえそこから矢を持ちながらやつは現れた、、、

カ「明らかにそこから盛れてるんだよ 魔力感知を舐めるな」

? 「ほう、人間相手だから甘く来たが、これ程とはな」

ア「あんた、一体何者、明らかに普通のデーモンじゃないわよね」

俺はめぐみんへ目で合図した

めぐみんも理解し爆裂魔法の準備をしている

? 「俺か、俺は

デイニラス教 教徒幹部 ナガト と申します」

ダ「デイニラス教 幹部、」

カ「つまりデイニラスの仲間ということか」

ナ「ええ そうですね」

め「ふん！」

めぐみんが爆裂魔法を空に打ち上げる

ナ「!、私にはなく空へ、何を考えているのです?」

カ「こつちもこういうのを考えてるんだよ 悪いがこつちも助っ人を呼ばしてもらおうよ」

ナ「ほう、、、それはいい作戦ではないか、、、だが甘い

スローマジック展開」

ナガトは空へ何かを放つとそれはドーム型のようになった

カ「！ 何をした！」

ナ「今放った魔法によりこの付近の結界の外の時間は遅くなった」

ダ「なんだと！」

ナ「これで今の魔法を見てこちらに来るにしても時間が遅くなっていくからつくのは今から1時間後ってところかな」

カ「嘘だろ、、、」

ナ「そして何故俺がこの天界を襲ったのか それはな お前らを始末するためだ ココ最近この天界で徐々に力を大きくしているヤツらが出た 俺はそいつらを始末しに来たんだ」

ア「始末ですって、、、」

ナ「だが そちらから来てくれるとはこちらとしても都合がいい、、、 さあディニラス様のために、、、あなた方を始末しましょう」

## この幹部の足止めを

ア「、、、この魔力圧あの時のディニラスほどではないけど こいつ  
もとんでもないやつよ」

カ「ああ、、、あいつからの圧を肌で感じる」

カ

(どうする、、、あいつの言ったことが本当なら俺たち以外の味方の応援は望めない、、、あいつを1時間この場で留めるもしくは倒せるなら、、、まずは)

カ「インフェルノ！」

俺のはなった魔法はやつに直撃した

ダ「、、、どうだ」

だが

ナ「ほう、、、これほどの威力を人間がですか、、、が残念、俺に魔法は魔法は効かないんだ」

カ「なるほど、、、なら」

ダ「ふっ！」

ダクネスがナガトに近づき剣を振るう

ダ「近距離戦でかたをつける！」  
がナガトはダクネスの剣をバリアを作り防いでいた

ナ「へえ！ 君ほんとに人間？ あの速さ尋常じゃない、、、ほんとに君たちは邪魔な存在のようだね！」

ナ「フレアガーデン！」

ナガトは炎を床一面に広げるが  
俺たちは飛んでよける

カ「魔装剣、、、行くぞ」

カ（やつに魔法が効かないのなら  
エンチャントの類も効かないのか、、、  
試すのは簡単だがやつに効かないのから意味が無い、、、）

カ「はああ！」

ナ「おっと 君も剣を使えるのか でもふたりになつてもどうにも  
ならないよ！」

カ「ダクネス行くぞ」

ダ「ああ」

ア「頼んだわ2人とも」

カ「ああ」

ナ「来ないのか？ならこっちから行かせてもらおうか！ ライジン  
コメット！」



魔法陣を空にだしまるで雷のように  
電気を降らせる

ダ「あれに当たるのは避けた方が良さそうだ」

カ「だな 避けながらやつに近づく！」

俺たちは雷を避けながらナガトへ近づいた

ナ「へえー なかなかやるじゃないか ならもつと降らせよう！」

カ「ちい 雷の魔法陣が増えやがった」

ダ「なら それより素早く動くだけ

雷鳴剣 必殺

トルエノ・デストローダ！」

ナ「！ちい」

ダクネスが技を出すともものすごい速さでナガトへ近づいたがバリ  
アで防がれた

ナ「ふうゝ、危ない 恐ろしい速さだ」

ダ「これで終わりだと思うな

はアアアアアアア！」

ナ「バリアルーム！」

ダクネスはバリアを張ったナガトのバリアに無数の斬撃を叩き込  
む

だがバリアは全く割れる気配がない

カ「ダメだこのままだとダクネスの体力を削られるだけだ、」

カ（どうする、、、こうなったら、、、）

カ「ネバー！　そして、、、

覚醒！

め「!!　カズマ、、、その姿は」

俺はネバーと覚醒を同時発動した

修行の時に1度試したがただでさえ扱いの難しいこのふたつを同時にやるのは今では15分が限界だ　だが今はこれにかけるしかない

カ「アクア！お前も手伝ってくれ！」

ア「!!、、、ええ　　覚醒！」

でもサクがあるの？」

カ「ああ、、、あいつは今バリアを貼っている　それを俺たちふたりのゴッドブローで壊しその隙にダクネスが相手を切る」

ア「なるほど、、わかったわ」

カ「じゃあ 行くぞ！」

俺とアクアはダツシユでやつの元へ近づく

カ「ダクネス！一旦引いてくれ」

ダ「!! ああわかった」

ナ「！」

カ「行くぞアクア！」

カ ア ゴツドブローーーーーー！！

カ ア はあああああああ！

ナガトに目掛けて2人同時に拳をぶつける

ナ「その程度の拳でこのバリアを割れるとでも、、！」

すると

徐々にバリアにヒビが入ってくる

カ「もう少しだ！ ゴツドブローラッシュュ！」

ア「おりややややや！」

ナ「くっ！」

カ「これで、、どうだー！ー！ー！」

パリーンと音を立てバリアが砕けた

カ「今だ！もういっちょ行くぞアクア！」

ア「ええ！この天界に喧嘩を売ったことあの世で後悔しなさい！」

カ ア 「ダブルゴツドブロー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺たちが拳を振るとやつは数メートル後ずさりした

カ ア「はあああああああ！」

ナ「ぐうううっこの、、！」

カ「今だ！ダクネス！」

ダ「ああ！」

雷鳴剣 必殺奥義、、、

トルエノ・デル・ソル」

その瞬間落雷のような音を立ちダクネスがナガトを切りにいった

カ「はあ、、、はあ、、、くつそ、、、ネバーを使つてるとはいえ体への負担が大きい、、、」

ア「大丈夫？ヒールしとく？」

カ「大丈夫だ、、、後で自分で回復しとく」

ナ「まさか、、、」

全員「!!」

ナ「これ程までとは、、、少々侮っていたようだ、、、なので

これから半分、、、力を出しましょう」

ダ「半分だと、、、」

ナ「ライジンコメット、、、」

カ「また雷攻撃か、、、」

(もう1回避けながらもう1発叩き込む！)

カ「行くぞアクア ダクネス」

ナ「、、、オーバー」

その瞬間

俺たちの頭上に無数の魔法陣が発動された

カ「?!、、、なんだよ あの数」

ナ「死ね、、、」

ナガトが腕を下ろすと

魔法陣から雷が無数に降ってくる

カ ア ダ 「があああああああ！」

め「カズマ！ダクネス！アクア！」

カ「がぁ、、、 はぁ、、、 なんだよ あの威力」

ダ「くっ、、、 あの威力が半分、、、だと」

カ「、、、！おいアクア！おい しっかりしろ、、、！」

くっそ さっきの雷でアクアが気絶してしまった

この状態を維持できるのもあと8分、、、

その間にケリをつける

カ「めぐみん、、、アクアを頼む、、、」

め「カズマ、、、ダクネス、、、」

カ「ダクネス、、、まだ動けるな」

ダ「ああ、、、もちろんだ」

ナ「ほう まだ動けるやつがいるのか、、、」

カ「お前を倒すまではな、、、まだ死ねないんだよ、、、」

ダ「貴様は私たちの仲間を傷つけた、、、その償いは、、、地獄でして  
もらう」

## 番外 この作品の振り返りを前編

番外

どうもです 私はこの この素晴らしい世界に祝福を！

リトライ wonderful World を書いている 花々  
フです

この度このりとすばのUA数5000を突破しました

これも読んでくれている皆さんのおかげです

カ「おい作者 このメタ小説こつちでもやるのか？pixivでもやってたけどこつちだと需要ないんじゃないか」

まあまあそれは置いといて まあ今回は5000突破も含め今までの話を振り返って行くって感じよ

カ「なるほどね、ってか他の3人は？ pixivでの時にはア  
クアもいたのに」

ああ今回は彼女達は来ないよ 代わりにゲストを呼んでるから

カ「ゲスト？」

ドワー「ども 第9話この天界で修行をPart3以来出てきていないドワーです」



カ「ドワーさん！久しぶりですね」

ド「存在を忘れられてるんじゃないかと思ってゲストとしてきた」

それじゃ早速これまでの話を振り返っていいこう

まず世界破壊編こと終わりの始まり編

実は p i x i v の方では1話が1番伸びているんだよな

カ「まあ自分でもどうやって幸せな時間が壊れてしまうのかは気になるな」

ド「確か 1話を投稿するに当たって少し変えたところがあつたんだよな」

そうなんです実は p i x i v だと文字数の制限がないので数百でもOKだったのですがこのハーメルンでは1000以上ないと出来ないで少し変えたのです 追加の文そして 話数変更

特に世界破壊編は変えました

実はこのハーメルンでの1話は p i x i v での2話ぐらいなので  
す

カ「だから話の話数が変わってしまったんだよな」

どうにか天界修行編から話数が合うようにはしました

さて本題に戻すとこの破壊編ではカズマが魔王を倒して5年後の世界に突如破壊の神にして創造の神でもある

ディニラスが世界を破壊しに来ました

ド「このすばの二次創作には珍しいラスボスが最初から出てくる話だよな」

カ「確かよ作者はこのりとすばはシリアスもあつてかつこのすば感のある作品にしたいと言つてたが今のところ結構シリアスだよな」

うぐ、まあ確かにシリアスになつてはいるまあそれはさ物語がどんどん終盤になつてきたということでもあるんだよ

なんだかんだいま4年目だよあと1年でデ이니ラスと戦うんだから

カ「正直修行について語つてたの1年目だけだったよな」

修行の時って下手に修行内容書いて2ヶ月後とか数週間後とかやっちゃうとテンポがな、結構はしょつてしまったのはあれだった

ド「おーいまだ破壊編なのに先行き過ぎだ」

おつと　そしてデ이니ラスはアクセルの街に降り世界を破壊するというカズマ達は世界を守ろうと戦うがデ이니ラスの圧倒的な力によつてカズマは倒され世界は破壊されてしまった、

カ「いきなり破壊するとはな、作者も思い切るよ」

そして世界は破壊された

そしてその頃天界にてある神達が会議をしていた　なんともあの世界にはあの方の生まれ変わりがいるだとか

だが世界を破壊されては意味が無いとそこで立ち上がった女神が

時の女神リミル様

リミル様はリタイムにより世界を5年前に戻した

カ「つてことは俺たちが魔王を倒した後つてわけだ」

ド「破壊された世界を戻せるリミル様ホントすごいわ」

カ「そーいや作者 この話の大体の結末つてもう決まってるの？」

ああ 決まってるしもう書いたよ 自分的にはいいなとは思ってる

あとここで先取り情報この先の物語であの方が出てきます

カ「あの方つて生まれ変わりのやつつてこと？」

さうどうぞお待ちください

そしてリタイムが成功したカズマたちの世界カズマ達は世界を破壊されるという夢を見た

するとそこへ現れたりミル様そして彼女はなんと

アクアのお母さんだった

カ「これつて結構なオリジナル設定よな」

ド「原作読んでる人から設定崩壊だとか言われそうだ」

それ言つたら他のこのすば二次創作なんで全部そうn

カ「おい！それ以上は喧嘩を売る発言になる！」

、、そしてリミル様によってエリス様のいる天界へ行く

そしてそこでカズマ達が見た夢はなんなのか　なぜ呼ばれたのかを話されると言うのが世界破壊編のラストだ

そして次は天界修行編

カズマ達は天界で修行を受けることになったそしてオーバーさんからオーバーアップをしてもらい自分の限界を伸ばしてもらった

カ「そこで俺が神の魔力を得たんだよな、、ある意味この作品はKAZUMA作品なんじゃ、、」

まあ確かになでの今回のカズマは原作での性格を充実にしているので急に冷酷になったりキレキレの判断をするキャラではないはず

ド「嘘つけ　バニルと戦ってたカズマなんてすごくオラオラだったじゃねーかあれ　初めエスカールかと思ったぞ」

こら他作品から名前を持ってこない

そして修行が開始となったがみんなでやる訳ではなく専門の神様とマンツーマンでの修行となった

カ「この作品は基本的に天界で話が進むから地上にいる原作キャラ達が薄くなってしまおうよな」

ド「まあ俺もオリキャラだしな」

このリトライ wonderful World が終わったら番外  
で修行期間5年で地上にいた皆が何をやってたのかを書こうと  
思っています

カ「皆の行動がわかるって訳だ」

い、さして一旦振り返りは終了これにて振り返り前半は終わりになり  
ます

次は修行編 Part 2 から最新話まで

それではさようならー

カ「またなー」

## 番外 この作品の振り返りを後編

さて

りとすばの振り返り後編と行こう

今回はこの天界で修行をPart2から最新話までを振り返ろう

カ「思えば 究極の聖戦から怒涛の展開よな  
アクアとリミルさんやバニルそして天界襲撃」

ド「ほんとに怒涛よなそしてここから俺の出番がなくなってきた、」

まあ展開が怒涛すぎて次はどんな展開にしようか悩んではいる  
一応このりとすばの結末とかやりたい展開はもう書いてるからあ  
とはそれを入れていくわけで

カ「ならもつと話を早く投稿できるよな？」

、、はい

さてまずは天界で修行をPart2を振り返ろう

カ「この回は主に修行で何をするかを話してた回だな」

ド「あのカズマが修行してるなんてな、、俺はすぐに辞めるんじゃないかと思ってたよ」

カ「俺はやる時はやるカズマさんなんだよにしてもアイツらがあんな感じでやってたとわな、、」

そしてPart3にてカズマの修行の成果がわかったな

カ「俺でも自分がマナタイト無しで爆裂魔法を打てるなんて思ってたよ」

ド「まあ戦う相手があれだ 爆裂魔法も使えないとどうしようもない」

そしてネバーさんが祝いとしてある鍛冶屋へ行くんだそこであったのが

ド「この俺ドワーさんってことよ」

カ「そして元日本人にして元転生者でもある佐々木秀梧さんである」

そーいやドワーさんの本名はpixivの方でしか発表してないのね

改めてドワーさんこと 佐々木秀梧さんです

ド「その名前で紹介されるのはあれだな、」

そしてPart4

ここではアクア達の修行の成果が分かります

カ「アイツらもすごく強くなったよな」

ド「思ったのがよ この修行になってからよ めぐみんながすっごく大人しくなった気がするんだよ」

カ「、、確かに 今の戦いの時もしつかり戦いをしていたし」

それはだな、、この修行期間は5年 つまり時がたっているわけだ  
カズマ お前も修行開始の時は17でも今では21だ

カ「ふーん、、ええええええ！」

ド「当たり前なことなのになんでそんなに驚く」

カ「いや、、修行ばっかしてたから歳をとったという認識が薄れて  
て」

つまりだこの修行にてみな成長してるのだから力も心も

カ「だよな、、ダクネスも23で、、めぐみんが19、、アクアに  
関しては触れないが」

つまりな 修行で心も体も強くなり そして歳を重ねて大人しく  
なつて言ったというわけだ

カ「修行終わりには俺は22か、、」

まあ歳の話は置いてこの時の女神に真実を

この回は修行から2年半カズマ達が久しぶりにアクア達と再開す  
る回

カ「つても話の間隔が短いから久しぶり感がないんだよ」

ド「話数だと2話ぶりだからな」

こつちだと2年半も経ってるの！ ワンピ〇スだって修行からの  
シャボンデーー再会早かったろ？

カ「それとこれは別だろ」

とにかく 再会したわけですここで現れたのはリミル様ですがリミ  
ル様はカズマに会うのは初めてという

カ「このリミル様は今の時間軸のリミル様だったんだよな」  
簡単に言うと



2年半前カズマ達に修行をしてくれと言ったあとリミル様は今の時間軸のリミル様に説明そこで2年半後記憶を戻して欲しいと頼んだというわけ

そしてついに世界が破壊された記憶を取り戻したカズマ達  
そのあとは天界の至る所をぶらっとした  
だがその時のカズマは何かを悩んでいるようだった

カ「、、あの公園にあつた時速300万キロのジェットコースターはバカすぎるだろ、、」

天界は陸とは別格なのだよ

そして天界を散歩した後神殿に戻る

そこでリミル様と会う　そしてリミル様が帰っていくがそこをカズマが追いかけた

追いついたカズマはリミル様にこう言った

あなたはほんとにアクアの母親なのですかと

そしてあの水の女神の真実をへ続く

その答えは

リミル様はアクアの本当の母親ではなかった

カ「何か伏線貼ってたなら分かりやすかったが唐突にこの設定が来て読んでる人もびっくりするよ」

まあ強いて言うならアクアの母親なのに水の女神じゃないという

とこだな

そしてリミル様は過去を話す

なぜアクアを育てていたのか　そして過去に何があったのか

アクアの本当の母親の名は　ソリア　もちろん水の女神である

見た目は本当にアクアにそっくりで明るいところや笑い方なんかもそっくりであった

だがある日　デイニラスが天界を半壊させるほどの襲撃が始まった

デイニラスが1度封印されたのはこの後である

そしてデイニラスの攻撃で町や天界の人達が襲われる

その攻撃がリミルにあたってしまうその時

その攻撃を庇ったのが　ソリアだった

ソリアは最後にアクアを頼むと託し

死んでまう

カ「その話を聞いた時、ほんとにリミルさんは辛かったんだなと思っただよ」

ド「ああ　目の前で親友が庇って死んでいったなんてな、」

そこからアクアのことを本当の子供のように育ててきたリミル様

だがアクアには本当のことを言わなかった

本当のことを言ってもアクアに嫌われたくないというのを恐れて

だがそれを聞いていたアクアは

ア「例え実の母親でもなくても私の今まで育ててくれたのはママですもの

それに、、実は薄々感じてたの実は私はママの子じゃないのかなって、、魔力の質や親子なのに全然似てなかったから、、ママ私は真実を知ってても 例え本当の母親じゃなくても恨んだりしない、、ママはママだよ」

と言った

カ「たとえば本当の母親ではなくてもリミルさんがアクアを育ててきたことは紛れもない事実だからな」

そして次話 この地上に帰省を

この回はカズマ達が3年ぶりに地上に帰ってくるという話

カ「あつちだと俺達が行方不明扱いだったとは思わなかった」

そりゃ3年も姿を現さなかったら行方不明って扱いだろ

そしてカズマ達が戻ってきたことを知った地上にいたみんなと宴会を沢山していた

カ「3日間の内2日間は王都でもアクセルでも宴会三昧だったな」  
飲み食いしすぎだろ

カ「あんたが考えたシナリオでしようが！」

そして3日目ここが山場だな

カズマ達は久しぶりにウイズやバニルに会いに行った

バニルに会うと バニルはカズマの神の魔力のことやディニラスの件を勘づいていた

カ「さすがの地獄の公爵様と言うかなんというか」

そしてカズマ達はこの3年間何をしていたかを話した

そして その話を聞いた後バニル何やら考えていた

そして

バニルはカズマを呼び出し アクセル外の野原へ足を運んだ

それは何故かそれは、、

バニルがカズマに決闘を挑むからである

バニルはカズマの言葉を無視しカズマへ攻撃を始める

カズマはそれに答えるように魔装剣を抜きバニルと戦う

勝負はほぼ互角 お互いの魔法や攻撃が激しくなる

そして

カ「エクスプロージョン！」

カズマが爆裂魔法を放ちバニル諸共吹き飛ばした

と思っていたが

そのバニルは土で出来た偽物

バニルは土でカズマの動きを封じそして

最大火力の殺人光線が飛ばされた

だがカズマはまだ倒れていなかったそして

カ「使わしてもらうぜ、、、とっておきを」

カズマが修行にて得た力、、、それは

カ「ネバー」

このネバー30分間自身の魔力体力その他のステータスが一切減らないまさにチートのような魔法

そしてそのネバーを使ってる時だけの特別な技

ゴットグローブ

神の魔力を拳に身体中にまわし自身の身体能力魔力をあげるとい  
う技

それによりバニルはその圧倒的な強さに瀕死まで追い込まれる

そしてカズマのゴッドブローがバニルの仮面にあたり  
バニルの仮面にヒビが入る

バニルはまた次の残機で復活するとカズマに言った

そしてカズマは魔装剣でその仮面を貫いた

しかしバニルは現れない…、

カズマ達はバニルの残機があれで最後だったのではないかと思っ  
た

アクアの探知にもバニルの反応はなかった  
バニルはこの世界から姿を消した

カ「あいつは…、なぜ最後の一機だったのにわざわざトドメを刺さ

せたのか、でもあいつの事だ それにも何か考えがあるのかもしれないな」

そしてこの修行にひと手間を

この回は修行をしてはや3年リミル様はカズマアリアを呼び出し

神のみ使える技を教えてください

その名も

覚醒

この覚醒を使えば身体能力や魔力を極限まで強くするものである  
カ「まんまスーオーサイ○人だぞ」

そしてめぐみんダクネスも今までとは別の修行を行う

そしてこの天界に襲撃を

ある日突然天界へ何者かによる襲撃が行われた

その犯人はデーモンだ だが普段天界などには来ないデーモンが  
来るなんておかしい

そこでカズマ達は何者かによる計画的な襲撃なのではないかと考  
え

デーモン達が固まる4方向へ別れその基地を殲滅に行く



リミル様やオーバーフレア エスパードなどが各地のデーモンを駆除する

そしてカズマ達も爆裂魔法によりデーモンを討ち取ったが

そこへ悪魔では無い謎の人物

その正体は

ディニラス教徒 幹部 ナガト

ナガトの力は凄まじく

カズマ達を追い詰める

果たしてカズマ達はナガトを倒すことができるのか、

とここまで最新話のあらすじだな

カ「これからどうなっていくんだか、、、謎だな」

ド「ああ　そして俺の出番もあるのかも謎だな、、、」

まあまあ　ちゃんとこの後の展開でドワーさん出てくるから

それでは今回は以上です

これからもこの　この素晴らしい世界に祝福を

リトライ　wonderful World　をよろしくお願  
い  
します

あとよろしければ評価や作品へのコメント待っています

## この幹部へ鉄槌を

ダ「、、、どうかあの雷を避けて近づければ、、、」

カ「ああ、、、あの数の魔法陣の魔法を避けるのはきついぞ、、、」

ダ「だがそれしか奴に近づく手段は、、、」

カ「、、、なあ、、、一つだけ思いついたサクがある」

ダ「本当か！」

カ「ああ、、、めぐみん！」

め「！はい」

カ「前バニルからの光線をバリアで防いでたよな」

め「ええ あのパリアはある程度の魔法も耐えられるバリアです」

カ「それを俺ら2人に付与することってできるか！」

め「ええ 可能ですよ」

カ「そうか、、、じゃあ頼む」

め「分かりました」

ブロックアーマー」

俺とダクネスの周りに青いバリアがはられた

ダ「これは、、、」

カ「これならあの雷に当たったとしても何回かは防げるはずだ」

ナ「ほう、、そんなことも出来るかだがそれでもお前らは俺には勝てない」

ダ「行くぞ」

カ「ああ」

俺たちは同時にナガトへ近づく

ナ「無駄だ、、ライジンコメット！」

再び上空から魔法陣が出現し雷が降ってくる

カ「ダクネス！このまま突っ切れ！」

ダ「ああ」

俺たちは雷を無視するように直線に走る

雷がバリアにあたるがビクともしない

ダ「行くぞ カズマ！」

カ「ああ！」

ダ「トルエノ・デストローダ！」

カ「エンチャント セイクリッド

ヘブンズスラッシュ！」

ナガトの間合いに入り2人同時に切り込む

ナ「ぐう、、ちい」

ナガトが距離を取り再び落雷を降らせる

カ「まだまだ！」

カズマ達は再び真っ直ぐ追いかける

ダ「奥義！」

トルエノ・デル・ソル！」

カ「エンチャントゴット！」

ゴットスラツシユーーー！」

再び同時に連撃をする

ダ「はあああああああああ！」

カ「はアアアアアアアアア！」

ナ「この、、、ぐはあー！」

カ「よしこのまま畳みかけ、、、  
がア！」

ダ「カズマ！」

カ「くっそ、、、ネバーがきれちまった、、、ダクネス！お前はそのまま行け！」

ダ「！、、、わかった」

ダクネスは再び攻めに行く

ダ（このバリアにもヒビが入ってきている 決めるなら今しかない）

ダ「トルエノ・デストローダ！」

雷を無視し真っ直ぐナガトへ近づく

ダ「はあああああああああああ！」

ダクネスがナガトに切り入りナガトを吹き飛ばす

それと同時にバリアが割れてしまった

ダ「はあ、、、はあ、、、」

ダクネスは剣を杖代わりにして地面に膝をついていた  
カ「、、、ダクネス、、、大丈夫か、、、」

ダ「まずは自分の心配をしろカズマ、、、」

ナ「なんだ人間 もう終わりか、、、」

ダ「!!」

ナ「ヒール、、、いや 人間にしてはよくやった、、、だが ここまでだ」

カ「あいつ、、、まだ動けて、、、ダクネス！俺も手伝」

ダ「私がやる」

カ「馬鹿野郎！1人なんて」

ダ「お前はネバーと覚醒の重ね発動それ以上体を酷使したら どうにもならなくなるぞ」

カ「だからってお前も！」

ダ「騎士として！」

カ「!!」

ダ「騎士として仲間のために戦うのは当然だがそれがたとえ1人になつたとしても 私は諦めない」

カ「ダクネス、、、」

ダクネスはナガトの方へ向かっていく

ナ「さて動けるのは君だけになった」

ダ「ああ だが これで終わりにする」

ダクネスはその場で構える

その時

膨大な魔力がダクネスの周りに漂う

め「これほどの魔力、、、まさか！」

カ「あいつ、、、これほどの魔力なんて命を削ってるようなものだぞ  
！」

ナ「ほう、、、我が身を犠牲にしてまで私を倒そうとするか、、、」

カ「当然だ！ 騎士として仲間のために命をはって戦うまで、、、」

ナ「なるほど、、、ではその意気込みに敬意を払いましょう」

ナ「マジックイクステインション」

ナガトの後ろに魔法陣が出現する

カ「ダクネス、、、」

ナ「さあ こい」

ダ「、、、」

トルエノ・デル・ソル」



ダクネスの攻撃とナガトの魔法が同時に放たれた

め「ダクネス！」

ダ「はあああああああああああ！」

ナ「へえあああ！」

お互いの攻撃が激しくぶつかり合う

ナ「ははは！ この技を耐える人間は初めて見た！、、、だが」

ダ「!!」

ナ「無意味だ」

ナガトが魔法の中をかいくぐりダクネスの懐に手をかざす

ナ「サヨナラだ」

ライジンストライク」

雷がダクネスの体を貫通する

カ「!! ダクネス！」

ダ「があっ、、、がは、、、」

ダクネスが地面にふせ血反吐を吐く

ナ「ほう、、、まだ生きてるか、、、随分頑丈なやつだな」

カ「ナガトーーーーー！」

俺はナガトへの怒りで頭がいつぱいだった

カ（この際俺の体がどうなってもいい、、、 もう一度ネバーを、、、）

ナ「さて、、、あとは殺していくだけだね」

ナガトは俺たちを見渡す

ナ「先にこいつを殺してもつまらない、、、仲間の死を見ながら己の痛みに苦しんで死なせてやる

最初は君だ」

その先には

めぐみんがいた

め「い、、、いや、、、」

カ「めぐみん！があっ、、、逃げろ！」

ダ「めぐみん、、、」

ナ「もう遅い、、、大丈夫 楽にいけるように一瞬で終わらせてやる」

ナガトが魔法陣を手に出し  
魔法が放たれた

カ「やめろ、、、」

やめろ—————！！」

ギイン

ナ「!、、、なんだ、、魔法を弾かれた」

? 「どうやら間に合ったみたいだな」

ナ「、、、、」

カ「!!あなたは

エスパーださん!!」

この聖なる剣に誓いを

エ「間に合ってよかった」

カ「でもどうして、、、あいつの魔法で遅くなってる」

エ「ああ あの時爆裂魔法を見て即座に行くために自分へ速度上昇の魔法をかけたんだ だがあの魔法のせいかここまで来るのに時間がかかってしまった  
すまなかった」

ナ「ほう、、、貴様あの剣の神 いや

神速の雷鳴、、、エスパードか」

エ「、、、貴様、、、何者だ」

ナ「、、、俺はナガト デイニラス教徒  
幹部だ」

エ「そんなやつがこの天界になんの用がある?」

ナ「分かるだろう? この天界を沈めに来た そして、、、何やら私たちに對抗するために力をつけてるらしいじゃないか そいつらも消しに来た」

エ「ほう どこからその情報を」

ナ「情報も何もそこにいる4人を見たら分かる 明らかに人間の力を凌駕している

神の力いや、下手すりやそれ以上の力を持つかもしれない」

エ「だから消すと、」

ナ「そういうことだ」

エ「なら尚更 容赦はしない！」

エスパードはナガトへ間合いを詰める

ナ「シールド」

ナガトは手のひらから シールドをはる

ナ「どんなに早くても当たらなかつたら意味ないよな」

エ「ならば お前に攻撃を当てるまで！」

エスパードはナガトへの攻撃を素早く続ける

ナ「いい加減目障りだな、」

フレイム バースト」

ナガトの周りを炎が包み その炎がエスパードに噴射されるがエスパードは飛んで避ける

エ「！ ふっ …、 やっかいだな」

ダ「し 師匠、」

エ「動くな!! ダクネスお前は傷が深い 待機だ！」

ナ「後ろに構うな！」

エ「！ふっ」

エ「あの魔法は厄介だな、」

ナ「その程度なのか？ 神速の雷鳴」

エ「舐められては困る！」

エスパードはナガトへ近づくと

ナ「そう簡単に近づかせない

ライジンコメット オーバー！」

カ「！エスパードさん あの魔法は」

エ「心配するな」

エスパードは雷を無視するように真つ直ぐ進む

ナ「！なに!？」

エ「トルエノ・デストローダ」

ナガトの懐へ踏み込み斬撃を入れる

カ「すごい、、、あれを全部避けたのか、、、」

め「いや、、、避けたような動きはなかったです、、、」

ナ「ぐう!、、、何故だ なぜ魔法が効かない」

エ「私は剣の神にして雷の神でもある、、、そんな私が雷をくらうと思うか？」

ナ「、、、ふっふふふ 確かにそうですね、、、ですが私が雷だけを使う魔法使いではありませんよ

フレアキャノン！」

ナガトは弾幕のようにエスパード目掛け狙う

エ「！ふっ」

エスパードは走りながらその攻撃を避ける

ナ「逃がしはしないぞ」

エ「ふっ はあ！」

カ「…、すごい なんつうスピードで走ってるんだ…、」

ナ「なぜだ…、何故だ！ なぜ当たらない！」

エ「トルエノ・コチャード」

エスパードは走りながら ナガトへ斬撃を打ち込む

エ「ぐは！…、がア…、きい！」

め「凄いです…、」

ダ「圧倒している」

ナガトはその場に膝を着く

エ「あれほどの悪魔の仲間を連れて天界を襲うなど こちらを舐めていたな」

あんな悪魔ごときで私らがやられることは無い」

ナ「…、はは」





！、、仲間、、仲間、、うるさいんだよ！」

ナガトは魔法を放つがそれはエスパードダを通り過ぎる

エ（どこを狙って、、！）

その先には

ダクネスがいた

カ「！ダクネス」

エ（くっそ 間に合え！）

エスパードダはダクネスの前に立ち魔法を防ぐ

エ「ぐうっ、、」

ダ「師匠！」

エ「ダクネス！下がれ！」

め「ダクネス！こっちへ」

ダ「ですが 師匠！」

エスパードが魔法を食い止めてる間にダクネスは後ろへ下がる

ナ「その魔法に気を取られていいのか！」

エ「なに」

ナ「、、、、エクスダイナ」

エスパードの上空に大きな魔法陣が発動された

エ「な！」

ナ「死ね、、、」

ナガトが腕をおろす

ダ「師匠—————！」

その瞬間

エスパードのいた場所へ巨大な爆発がおきる

カ「なんて威力、、、」

め「そんな、、、」

ナ「、、、！ ふつつふ あれほどの爆発を受けまだ生きていたか」

その爆発あとのところに

エスパードがまだ立っていた

エ「はあ、、、はあ、、、」

ナ「あの爆発魔法を耐えたのは褒めてやる、、、だが 今のお前はど  
うだ 爆発により焼けた肌 魔法による負傷 状況は俺が有利だ」

エ「、、、例えそうだとしても、、、私は、、、あいつらを、、、仲間を守る  
ために戦う、、、それが私の騎士道だ、、、」

ナ「何故だ？仲間なんてものを守って何になる？ 友情？絆？信頼  
？そんなものが何になる！ そんなもの簡単に消え去るんだよエス  
パード 貴様の言う騎士道とやらも この俺が砕く！」

エ「、、、私は！、、、私の騎士道を貫く！

こいつらは誰一人として殺させはしない！！

お前は私がここで！倒す！

雷鳴剣 剣技 秘伝！」

エスパルダが構えたその瞬間  
エスパルダの周りに魔力が溢れ後に  
雷のように光り出す剣は雷を纏い光る

ナ「ほう、、、まだそんな力を残していたか ならば、、、

私もその勇士に敬意を払おう

マジック “オール” イクステインション」

ナガトの周りに数多の魔法陣が出る

ナ「、、、」

エ「、、、



やがて土煙が晴れていく

カ「、、、どうなったんだ、、、」

ダ「！見ろ！」

そこには

腕を切り落とされたナガトと膝を  
地面についでいたエスパードがいた

ナ「ぐっ、、、  
があああああー！」

やつの体は無数の斬撃の傷そして切られた右腕 裂けた口 まだ  
息をしているのが奇跡のような傷をおった

エ「くっ、、、 足が、、、」

カ「エスパードさん！ あいつは」

エ「ああ あいつは致命傷をおった  
もうまともには動けまい」

ア「うう、、、うーん」

め「！アクア気がつきましたか」

め「めぐみん、、、！そうだ あいつは！」

め「あいつなら エスパードさんが」

アクアは周りを見渡し現状を把握する

ア「そう、、、めぐみん カズマをこっちまで運んでくれないかしら  
、、、カズマも随分重症のようだから」

め「！分かりました」

エ「、、、おい、、、もうすぐ援軍がくる、、、今のお前ではあいつら  
には勝てない、、、大人しくしている」

ナ「そうか、、、それは大変だ、、、」



なら、ひとつでも戦力は減らそうか」

その時 切り落とされた腕の手のひらから紫色の鎌のような形をした魔法が放たれ

その先には

ダクネスがいた

め「、、!! ダクネス！ 避けてください!!」

だが今のダクネスは深手を負い動けなかった

エ「!!」

め「ダクネス！」

ア「ダクネス！」

ダ「!!」

その瞬間　グサツと鈍い音が響く

ダ「、、、？　なぜ当たって、、、?!」

不思議に思ったダクネスが顔を上げると、、、そこには

め「そんな、、、」

ア「嘘でしょ、、、」

「ガア、、、!!」

攻撃はダクネスには当たらなかった　なぜなら

ダ「、、、そんな、、、どうして、、、」

師匠!!」

## この剣の神に冥福を

そこにはダクネスを庇うようにエスパーダが大の字になっていた  
その腹部にな鎌のようなものが刺さっていた

ダ「師匠、、、なんで、、、」

エ「はあ、、、弟子を守るのも、、、師匠としての務めだ、、、  
があ、、、」

魔法を受けたエスパーダは口から

血反吐を吐き その場に仰向けに倒れる

そして刺された腹部から血が大量に出てくる

ナ「、、、やはり仲間など不要だ、、、」

エスパーダ そのせいでお前はもう取り返しのつかないことにな  
った」

カ「!! エスパーダさん！」

すると、、、エスパーダの体は徐々に崩壊を始めた

ダ「!!師匠!! どうして、、、体が！」

ナ「、、、だが 結果的には 戦力は大幅に削れた 、、、この際だ教  
えてやる 、、、今打った魔法は デイニラス様の魔力が入っている魔  
法 つまり、、、

破壊の力がある魔力だ

その魔法を直接くらったエスパーダは、、、まもなく死ぬだろう」

め「!!そんな、、、」

カ「破壊能力、、、」

カ（これがリミルさんが言っていた、、、

破壊の、、、力）

ナ「さあ エスパードが死ぬ今なら貴様らを殺すのに時間はいらん  
、、ん？」

天界兵「見つけました オーバー様」

オ「見つけたぞ！ やつだ！」

ナ「ちっ 援軍がきたか、、今回は引くとしよう、、次は殺す」

そう言っってナガトは自分の腕を回収しどこかへ姿を消した

カ「!!待て！ があ！ くっ！ くっそ、、体に力がはいらね、、」

オ「ちい！ 逃げられたか、、!! エスパード！ おい しっか  
りしろエスパード！」

オーバーは倒れているエスパードのもとへ駆けつけ体を起こす  
カ「エスパードさん!!!」

オ「回復班！早く回復を！」

ダ「!! 回復魔法だ！ 早く師匠に回復魔法を!!アクアでも誰でも  
いい！  
早く！」

エ「もういい、、、 もういいんだ  
ダクネス」

ダクネスの手を抑えるエスパーダ

ダ「何を言ってるんですか!!今すぐにも回復を！」

エ「今回復したところで、、、おそらくこの体の崩壊は止まらない、、、  
自分の体のことは自分がよく分かる、、、

私はもう、、、ダメだ」

ダ「ダメだなんて言わないでくださいよ、、、 まだこれからもつ  
と、、、私に、、、 剣を教えてくださいよ! 師匠!! 師匠!!」

ダクネスは泣きながらエスパーダに言う

エスパーダは残念そうに

エ「すまないな、、、 お前の成長を、、、最後まで見届けることができ  
なくて」

エスパーダの体は崩壊寸前

もう足はなくなっていた

エ「みんな、、、 すまない 私は先に逝く、、、」

オ「エスパーダ、、、」

エ「、、、 オーバー、、、 ダクネス達を、、、 頼んだぞ、、、」

オ「!!、、、 ああ」

ダ「そんな、、、 嘘ですよね、、、 師匠  
死んでしまうなんてそんな、、、 師匠!」

エ「、、、 私はもうすぐ死ぬ、、、 だから、、、 ダクネス  
最後に、、、 話しておきたいことが、、、 ある はあ、、、 はあ、、、 喋

れるうちに話しておきたい、」

カ「エスパードさん、」

ダ「師匠、」

エ「ここで私は死ぬだろうだが

私の死は気にするな 仲間を守る 私はそれを全うした お前  
らにはまだやらなくては行けない事がある、それはとても辛いこと  
だ、だがこれだけは覚えていて欲しい、

自分のことだけは疑うな

何があっても自分を信じろ

その決断にその行動に

全て胸を張れ」

ダ「師匠、」

エスパードは腰にかけていた自分の剣をダクネスに差し出す

エ「、ダクネスに 私の剣を渡そう、今まで私から何かを与え  
たことが、なかったからな」

ダ「そんな！ 私は、あなたから沢山もらいました あなたのお  
かげで、あなたが教えてくれたから！ 、、 本当の騎士になれたん  
です、、 だから！」

エ「私は、もうダメだ、、だからお前たちに希望を、、 未来を託  
す、、私はお前たちが、この素晴らしい世界を、平和にしているれ  
ることを、信じている、、お前らはもつともつと強くなれる、、」

ダ「師匠、… 約束します！ 私たちは必ず ナガトを、… デイニラ  
スを倒します！」

エ「…、… 頼んだぞ …、ダク、… ネ、… ス」

エスパードは微笑みながら目を閉じ

体は灰のように崩れ落ちていった

オ「…、…」

オーバーは静かに涙を流す





神速の雷鳴

エスパルダ

破滅へのカウントダウン編  
この展開に驚愕を

ここはどこだ、、、

なぜ俺はここにいる、、、

俺は、、、病室で寝てて、、、そして

俺は当たりを見渡す

すると

誰か人影のようなものが見えた

誰かいるのか、、、何か聞こえる

? 「g z / t h v \ r y b c s u j c 4 u h v c g f c」

何か話しているようだが何を話しているか分からない

すると その影は奥の方へ消えていく

！待ってくれ！

俺は追いかけようとする

なにかに躓き

転びそうになる

そしてその瞬間

カ「はあ！、、、夢、、、」

目が覚めると俺が寝ていた病室だった

カ「あの夢、、、なんだったんだ、、、」

それも気になるが

、、、  
まずはあいつの所に行こう

天界への襲撃に対する戦いは今回我々の大敗北という結果になってしまった

その後俺たちはオーバーさん達が神殿まで運んでくれて看病をしてくれた

俺たちは各病室で今は休息となっている

だがみな身体共に心へのダメージも大きかった

特に

ダクネス side

ダ「、、、」

コンコンと病室の扉からノックが聞こえた

カ「俺だ、、、入っていいか？」

ダ「、、、ああカズマか、、、入ってくれ」

カズマが扉から入ってきて私の横へ座った

カ「どうだ？状態は」

ダ「ああ この通り回復した アクアの魔法のおかげだな」

カ「そうか、、、なあ ダクネスその、、、」

ダ「、、、師匠のことか？」

カ「！、、、ああ ここに来たのもそれに関して聞きたかったから来た、、、話したくないならそれでもいい」

ダ「カズマ、、、私は今回の戦いで、、、ものすごく後悔している もつと強ければ もつと技を磨いてれば、、、師匠を助けられたんじゃないかと、、、」

カ「ダクネス、、、」

ダ「だが いつまでも落ち込んでる訳には行かない、、、今落ち込んでいたって 時間は待ってくれない デイニラス復活までもう1年だ、、、本腰を入れる時期だ そして師匠に託されたこの思いも果たすために」

カ「そうか、、、それとダクネス あまり一人で抱え込むなよ お前はよく自分だけで背負い込むんだからな あの時みたいに」

ダ「あ あの時はしよがなかつたんだ！、、、まああの時はお前が助けに来て嬉しかったが」

カ「仲間見捨てるリーダーがどこにいるってんだよ」

ダ「、、、やはりカズマは優しいな」

カ「、、、そんなんじゃないよ」

そこから私たちは数分話をした

そして

カ「、、、じゃあ俺はもう行くよ」

ダ「ああ、、、ありがとう カズマ」

カ「、、、おう」

カズマが病室から出て行った

ダ「、、、」

私は部屋の棚の上に置いてある師匠の剣を見る

(「、、、頼んだぞ、、、ダク、、、ネ、、、ス」)

ダ「くそ、、、私がもっと、、、もっと、、、強ければ、、、」

私は再び涙を流していた

自分の実力が自分の不甲斐なさが、、、情けなくなってきた

カズマ side

病室外

カ「、、、」

ダクネスの部屋から泣き声が聞こえてきた、、、

カ（この4年間修してきたのに、  
まだ、これでも足りないのか）

俺は自分の病室へ戻ろうとした時

カ「、、、アクア」

ア「カズマ、、、」

カ「お前もダクネスに会いに来たのか」

ア「ええ、、、でも今はまだ1人にした方が良さそうね」

カ「ああ、、、なあアクア ちよつといいか」

俺たちは神殿の中庭のようなところのベンチに座った

ア「どうしたの?」

カ「いや、、、そのお前も大丈夫だったか?」

ア「私はもう平気よ完全に回復したわ めぐみんも修行を再開して  
るもの」

カ「そうか あの戦いで1番負傷してたのお前だったからよ」

ア「、、、」

カ「?どうした」

ア「、、、私 怖いの」

カ「、、、」



ア「また目の前で大事な仲間が死んでいくのが、、、」

カ「、、、」

ア「今回はカズマのようにリザレクションが効くわけじゃない、、、誰も死なせないようにするためにこうやって修行をしたのに、、、」

カ「、、、俺もだよ、、、今回ので自分の力のなさを実感した、、、」

ア「カズマ、、、」

カ「だからこそ まだ強くなるためにこの1年修行しなきゃならぬい、、、次は仲間を守るほどに」

ア「、、、ええ そうね」

カ「ああ」

ア「あとカズマ」

カ「?どうした」

ア「最近 変な夢を見るの 誰かが私を呼んでるような夢を」

カ「お前もか!」

ア「え!カズマもなの?」

カ「ああ 誰かが呼んでるんだがそれを追いかけると夢が覚めて、、、」

ア「私と同じ!、、、何なのかしら」

カ「ああ、、、今度ネバーさんに聞いてみるよ」

ア「ええ」

カ「よし　じゃ俺は部屋に戻るよ　ごめんなアクア　急に呼んで」

ア「いいのよ　じゃあ　私も部屋に戻るわね」

そう言つてアクアは自分の病室へと戻つていった

カ「明日からまた修行だ、」

俺は自分の病室に着きベットに座り込む

カ「、、、」

(俺は、、、もう強くなれないのか、、、これが限界なんじゃないか、、、  
くっそ、、、もつと、、、もつと力があれば、、、)

、、、いや今とやかく考えても意味が無い

カ「、、、寝よう」

俺はベットに入り眠りにつく

カ「、、、うーん　結構寝ちまったか、、、」

俺は寝ていた体を起こすため体の伸ばすそして目を開くと

病室ではない 真っ白な空間にいた

カ「…、もっかい寝よう」

俺は再び眠りにつく

? 「おい おーい もしもーし?」

カ「…、」

? 「おい!…、起きないな…、」

仕方ない

おりやや!」

カ「いだだだだだだ!! なんだよ! さつきから! うるさいし! 頬を引っ張るな!」

? 「やっと起きたか」

カ「ああん! …、つてあんた…、誰?」

? 「俺か?」

俺の名前はじゅん　そして単刀直入に言う

お前は俺の生まれ変わりだ！」

カ「……………はあ?!」

## この謎の人物の正体を

この謎の人物の正体を

カ「はあ!? 俺が、、あんたの生まれ変わり!?!」

じゅ「そう言ってるだろ」

カ「急にそんなこと言われてびっくりしないわけないだろ」

じゅ「それもそうだな、、 さてお前が1番気になってることは

生まれ変わりのこともあるが なぜ俺がここにいてお前と話しているのかそしてここはどこなのか」

カ「、、、」

じゅ「まずひとつ ここはどこなのか

ここは精神世界つまりお前の心の中とでもいえばいいかな そして俺がお前の意識をここに飛ばしたということ」

カ「心の中、、、」

じゅ「ああ そして2つなぜお前の心の中に俺がいるのか これが重要なんだ」

カ「何がなんだ?」

じゅ「その前に、、少し昔話をしよう 、、 あれは そう約100

0年前

俺はお前たちがいたあの世界で冒険者をしていた」

カ「あの世界の、、しかも1000年前!」

じゅ「俺たちはあの世界の初代魔王 を仲間と共に倒し1度世界を救ったんだ」

カ「初代魔王、」

じゆ「ところが魔王を倒したあとのある日 突如天界からある者が来たんだ」

カ「、、、！まさか」

じゆ「そう、、、リミルさんだ

そしてリミルさんは俺たちに頼んできたんだ

ある神が暴れている 止めて欲しいと」

カ「!!まさかそいつは！」

じゆ「ああ 今お前らが倒そうとしている張本人

デインニラスだ」

カ「、、、まさか1000年前1度デインニラスを封印した人間って」

じゆ「ああ 俺達だ」

カ「、、、ならなんで俺の生まれ変わりに、、、」

じゆ「そこなんだ、、、俺はデインニラスを封印した後そのまま ぽっ

くりな

しかもその時に力の圧により 時空に穴が空いていた 俺の魂は天界に行くことなく 時空の中をさまよい続けた、、そして ある時小さな穴を見つけそこへ俺は入り込んだ、、そしてお前を見つけたサトウカズマ」

カ「、、、、」

じゅ「だがなお前に魂が入り込んだ途端俺の今までの記憶は全て消えたんだ」

カ「え！なんで、、、もしかして」

じゅ「ああ 天界からじゃなくても人間への再びの転生は前の記憶が無くなる」

カ「昔アクアも言ってたな、、、」

じゅ「ではなぜ 俺は記憶を取り戻しているのか 気になるだろう？」

カ「なんでなんだ？」

じゅ「俺の記憶が戻ったのは4年前

そう、、、お前たちが修行する前だ

カズマお前オーバーにover up やった時神の魔力が入っただろ その時だ」

カ「あの時にか、、、」

じゅ「実は俺もover upをしてもらったんだよオーバーにその時に、、、

な？」

カ「もしかしてあんたにも！」

じゆ「ああ入ってきたよ 神の魔力がな

その感覚が 俺の記憶を呼び起こしてくれた」

カ「、、、じゃあなんですかに俺をここに呼ばなかったんだ？」

じゆ「それは まだお前が力を持っていなかったからだ」

カ「力、、、」

じゆ「だがお前もあの修行もあつて

お前の力は遥かに伸びた

だから呼んだ」

カ「、、、随分上からなんだな」

じゆ「ああ そしてカズマ 俺は物事ははっきり言うほうなんだ、、、

今のお前ではディニラスには勝てない」

カ「！」

じゆ「、、、ましては俺にもな」

カ「じゃあどうしろってんだよ！」

じゆ「まあ待って待て そのためにお前をここに呼んだんだ」

カ「はあ?..」

じゆ「お前たちがあいつに戦うまであと1年ある その1年 俺と修行をしろ」



カ「ここで1年って、、、つてかここって俺の心の中なんだよな  
現実の俺の体はどうなってるんだよ」

じゆ「まあ、、、ここに意識があるから あっちだとほぼ昏睡状態だ  
な」

カ「はあ!？」

じゆ「安心しろ ここですいた力とかはちゃんと自分のものになっ  
てるから」

カ「、、、つまり俺はここで1年間 実際の修行ではなくイメージト  
レーニングをするってことか」

じゆ「そゆこと そして1つやっておきたい事がある」

カ「やっておきたい事?」

じゆ「俺と戦え」

カ「はあ? さっき俺にお前は俺に勝てないって言ったのにか  
?」

じゆ「あくまで目星でだ 実際に戦ってみないとお前の力は分から  
ない

ほれかかってこい」

カ「そんじや、、、お言葉に甘えて!」

俺は踏み込みじゆんへ近づき 拳を顔めがけ振る

だが

じゆ「、、、その程度か？」

この拳はじゆんの手によって受け止められた

カ「ちい、、、まだまだ！」

カズマが攻撃をするがじゆんはそれを全て避けていく

カ「くっそ、、、当たらねえ、、、」

じゆ「そのぐらいのスピードなら俺は目をつぶってでも避けられるぞ もっと本気出してこいよ！」

カ「、、、ああそうかい、、、なら

覚醒！ これで相手になってやる」

じゆ「はい」

カ「はあああああ！」

カズマは攻撃を入れるが

じゆんに再びガードされる

カ（、、、さつきと防御の仕方が変わった、、、さすがのあいつでも覚醒相手では防御を固くするか）

じゆ「さすが覚醒の力 あいつとやってる時を思い出すよ」

カ「よそ見してる場合か！」

じゅんへ蹴りを入れようとするが  
じゅんも蹴りで返す

カ「ぐっ、っ、」

じゅ「もつと力入れてみろ！」

カ「くっ　押される、っ、」

じゅ「、、！　スキあり」

じゅんはその場から姿を消した

カ「な！どこに行った、っ、」

カズマは当たりを見渡す

じゅ「こっちだ」

その声が聞こえてきたのは

上からだった

カ「！あいつ空も飛べるのかよ、っ、」

じゅ「行くぜ、っ、」

じゅんは空を飛び回る

カ「くっそ、っ、すばしっこい」

じゅ「こっちだよ！」

じゅんは俺の背後から蹴りを入れる

カ「がああ！、、、」

じゆ「まだまだ」

そのままの勢いで攻撃を続ける

じゆ「おらおらおらおら！」

カ「がああ グツ、、、」

じゆ「トドメだ、、、」

じゆんは高く飛びその勢いで急降下してくる

カ「！」

じゆ「はあああああああ！」

その勢いのままカズマへキックを食らわす

カ「ぐっうう、、、」

じゆ「これで終わりだ、、、

はあああああああ！」

カ「があああああああ！」

カズマはキックにより吹き飛ばられる

じゆ「、、勝負ありだな」

カ「はあ、、はあ、、くっそ、、」

じゆ「これが今の俺とお前の差だ」

カ「くっ、、そ、、」

カズマはそのまま気絶してしまった

カ「、、う、、うーん」

じゆ「お？起きたか？」

カ「、、俺、、確か、、あんたに負けて、、」

じゆ「ああ そのまま気絶した」

カ「、、そうか」

じゆ「どうだった 俺と戦ってみて」

カ「、、正直あんたはあのナガトよりも強いだろう」

じゅ「、、、 ああそうかもな」

カ「なら 俺が言うことは一つだけだ

お願いします 俺に修行をしてください」

カズマはじゅんへ礼をして申し込む

じゅ「、、、 ふっ 元から断るつもりもねえよ 顔上げな」

カ「、、、」

じゅ「そんじゃ 改めて俺はじゅん  
よろしくな カズマ」

カ「ああ よろしく じゅん」

こうして俺の新たな修行が始まった

アクア side

ア「うーん、、、よく寝たー、、、」

寝ていたからだを起こすように体を伸ばすそして目を開くと

白い空間にいた

ア「、、、へ？ どこなのここ、、、」

？ 「目を覚ましました？」

ア「！ なになに!? 、、、あなた、、、誰？」

？ 「私はそら 元女神なの そして

アクア あなたは、、、私の生まれ変わりなの」

ア「、、、、、、

は  
あ  
?!  
「



## この英雄達のお話を

この英雄達のお話を

一方現実世界

め「、、、カズマ、、、アクア、、、」

ダ「一体何があったというのだ、、、」

カズマ、、、昨日まで、、、いつも通りに」

2人の目の前には

意識を覚まさない昏睡状態の

カズマとアクアがベットに眠っていた

め「ダクネス、、、」

リ「、、、ダクネスさん めぐみんさん、、、」

ダ「！、、、リミル様、、、」

2人は神殿のある部屋に呼ばれた

リ「カズマさんそしてアクアについて我々も調べたのですが、、、特に呪いにかかっているわけでも、、、病気で寝たきりという訳では無いのです、、、ましては死んでもいません、、、」

め「そんな、、、では仮にリザレクシオンをしても」

ダ「、、、復活することは無い、、、」

リ「はい、、、あの二人がなぜ急に昏睡状態になってしまったのか、、、こちらとしても」

天界の人達そしてめぐみん達はなぜカズマ達があんなふうになってしまったのか分からずじまいだった

2人は再び病室へ戻る

め「、、、」

ダ「、、、」

2人は黙って2人を見つめる

めぐみんはカズマのベットの隣に座る

ダ「、、、めぐみん」

め「、、、カズマ、、、アクア 目を覚ましてくださいよ、、、 またいつもみたいにみんなで楽しく冒険しましょうよ、、、」

ダ「、、、めぐみん」

め「それに、、、まだ、、、修行は終わってないんですよ、、、 デイニラ

スを倒して、、、またあの世界で、、、みんなと一緒に、、、過ごしましよ  
うよ、、、なのに、、、なんで、、、」

めぐみんは泣きながら2人の手を握っている

ダクネスはそれを見ることしか出来なかった、、、

数時間後2人は病院から出る

め「それでは　ダクネス、、、修行、、、頑張ってください」

ダ「、、、ああ」

各々は自分の修行場へ戻って行った

ダ「、、、」

ダ（、、、どうすればいいんだ）

アクア精神世界 side

ア「あなた　元女神なのね、、、

ってことは　ある意味墮天したってこと?」

そ「墮天というか　長く天界で過ごしてたし　地上での生活っての

も憧れてたの だから神様をやめて 地上でアークプリーストとして冒険者をしてたわ」

ア「へえー ちなみにどんな冒険をしてたの？」

そ「色んなことがあったわ 魔王軍との討伐 そして初代魔王との戦い、、、」

ア「あの世界に初代魔王なんていたのね、、、 カズマさんが倒したのって何代目だったのかしら、、、」

そ「その後も色々あったわ」

ア「あつ そうだ聞きたいんだけど  
私はあなたの生まれ変わりなのよね  
なのになんで私の中にいる訳？」

そ「、、、 そうね 、、、 いいわよ 話してあげる 魔王を倒したあと  
あなたの母リミルさんからディニラスを倒して欲しいと頼まれたの」

ア「ディニラスに！」

そ「ええ そしてあの天界で修行をしていたわ あなたたちみたい  
に」

ア「そらにそんなことが」

そ「そしてついにディニラスとの戦い 、、、 けど、、、 やつは強かった  
修行をしていたのに その戦いで仲間は消滅、、、 そしてこの  
私も、、、 死んでしまったわ」

ア「、、、」

そ「そして私は魂だけの存在になった　そして天界で幼いあなたを見つけた

あと　正確には生まれ変わりってより、、憑依に近いかな私の場合　あなたを見つけて私はアクアに憑依した　そして今に至るって訳」

ア「そうだったのね、、で　なんで私をここに?」

そ「それはね　アクアあなたを育てるためよ」

ア「育てるってもしかして　ここで修行しろってこと?」

そ「そうね　ここでは私からあなたへ女神としての力を教えていくわ」

ア「、、　って言っても私も女神よ　今更隠された秘密なんて」

そ「あるわよ　、、　知りたい?」

ア「!、、　もしそれでみんなを守れるなら、、　いいわ　やってやるわよ!」

カズマ side

カ「っても具体的にはどんな修行をするんだ?」

じゅ「そうだな、、　ネバーを使えて覚醒もある程度、、　ならあの魔法も出来るかもな」

カ「あの魔法?」

じゅ「カズマとりあえずこの1年での修行の内容は　覚醒を最大限

まで強化そして 俺の使っていた魔法を覚えることだ」

カ「じゆんが使っていた魔法、、、」

じゆ「1つはさつき俺がやった空を飛ぶやつ

そしてもうひとつが今から見せるやつだ」

カ「どんなやつなんだ、、、」

じゆ「まあ 見てな」

そうしてじゆんは少し距離をおく

じゆ「ふう、、、

フォースバスター」

その瞬間じゆんの手から魔法陣が4つ出現する  
そして

火 水 風 土の魔法が混ざり合いながら放たれた

じゆ「ふう、、、これが俺が使っていた 4つの属性の魔法を混ぜ合  
わせ同時に発射させる

フォースバスターだ」

カ「4つの魔法を、、同時に」

じゅ「ああ ちなみにさつきは火水風土でやったが 別の属性でもできる

例えば

火雷闇光 とか 水氷火土

つてな感じだな」

カ「凄い、、」

じゅ「だから カズマお前にはこれを1年で死ぬ気で覚えて欲しい  
何せ 俺もこの技を使い慣れたのが2年弱かかったからな けど4  
年修行してるお前からしたら大丈夫か」

カ「ああ やってやるよ」

## この冒険者の過去話を

カ（そこから俺とじゅんの修行が始まった）  
じゅ「まずは フォースバスターについてだ 魔法は構造状 同時に2個発動するってのは不可能に近いんだ

だが、この技はそれを可能にする

しかも4つの属性を同時に放てる

だが この技は4つの属性を使う分魔力も食う だが お前の魔力量は人間よりもはるかに多い その気にはしないで行く」

カ「なるほど、」

じゅ「じゃあ いくぞ！」

カ「おっす！」

アクア side

ア「それで女神の隠された力って、、 なんなの？」

そ「それはね 感情による身体強化よ」

ア「、、感情による 身体強化？」

そ「そう そもそも女神とか神が使う魔法って感情を元に出てるのよ？」

あなたよくゴッドブローを打つ時なんて言ってた？」

ア「え？ 確か、、」

女神の怒りと悲しみを乗せた、、拳」

そ「そしてゴットレクイエムの時は？」

ア「愛と悲しみの鎮魂歌、、」

そ「どれも愛とか悲しみとか怒りとか か感情が入っているのつまり神の魔法は感情しだいでまた別の魔法も出せるって訳 そ



ここでアクアにはこの1年で新しい神技を作ってもらわ

ア「新しい技って、、そもそも私も私でゴツドブローやレクイエムも小さい頃頑張って習得した技なのよ

いきなり1年で神技を作ってそれを使いこなせるようになってのは

、、

そ「確かに難しいわ でも今はやるしかないの」  
ア「ううん、、わかったわ！やってやるわよ！」

天界 s i d e

ダ「ふっ！、、ふっ！」

私は師匠の剣を手に馴染ますために素振りを行っていた

ダ「はあ！ へえあ！

、、ふう」

素振りを終え少し休憩しようとした時

コンコンと扉がノックされた

ダ「？ 誰なんだ？」

扉を開けるとそこには

ダ「！めぐみんじゃないか どうしたんだ？」

め「、、、いえ ちよつと話に来たというか」

ダ「どうだめぐみん最近は何？」

め「はい 最近は修行の最終段階として 修行期間に覚えた派生の爆裂魔法の強化をしています」

ダ「そうか それにしても 久々だな

ここ数年お前たちに会う時はあつてもものんびり話す時間がなかったからな」

め「ですね 、、、今までは会う度色々な話をしていたんですがね」

ダ「、、、で めぐみん 本当のところはどうなんだ？ 、、、本当に修行は順調なのか？」

め「、、、」

ダ「お前はパーティの中でもカズマの次に仲間思いの奴だ あの二人が昏睡状態のことをお前がすんなり受け入れられるとは思えない」

め「、、、ええ そうです ココ最近修行をせず、、、ただただうつ伏せて泣いていました 私の心は、、、もうボロボロです

修行をしてきた、、、でもそれでも勝てない相手がいる そいつにダクネスの師匠さんは殺されてしまった そして

カズマ達が寝たままに、、、なんで、、、

なんでなんですか、、、この魔法を信じて今まで生きてきました1度は挫折しかけその道から逸れようとした でもそれでもカズマは私の爆裂魔法への道を勧めてくれた、、、その彼が今では昏睡状態、、、もうカズマのあの顔が見れない もうあの声で爆裂魔法の点数も言ってくれない 、、、もう私には生きてく意味が、、、ないんです、、、」

めぐみんは涙を流して話した

め「ここへ来たのはもうどうすればいいか分からなくなったのでどうすればいいのかを、、、あなたに聞きに来たんです」

ダ「、、、私とて何も凹んでいない訳では無い 師匠の死 修行しても倒せなかった敵 仲間の昏睡状態 不幸なことばかりだ」

め「、、、」

ダ「だがな めぐみん 今は苦しいだろう 起こってしまったことは変えられない 過去は変えられない 、、、でも

未来なら変えられる デイニラスを倒せなかった本来の5年後も未来のこと

その未来を変えられるのは 今なんだ」

め「、、、今」

ダ「私はお前たちと幸せに暮らす未来を作るため 救うため 修行しやつを倒すカズマたちの昏睡状態も奴らが関係してるかもしれない 奴を倒せばカズマ達も目覚めるかもしれない」

め「、、、未来を救うため」

ダ「、、、ああ」

め「、、、そうです 今は苦しくとも

未来なら自分の力で変えられる

そして その未来でまたみんな冒険したい!」

ダ「、、、ああ!」

め「ダクネス、、、ありがとうございます」

カズマ side

カ「なあ? じゅんが冒険者やってた時ってどんなパーティーメンバーがいたんだ?」

じゅ「ん? そうだな 面白いやつばっかだったよ 俺のパーティーは

俺含めて4人だったんだ」

カ「4人ねー俺たちと同じだな　、、、

ちなみにそいつらって問題とか起こすタイプだったか?」

じゅ「起こすというか、、、なんというか　別にカズマの仲間のあい  
つらほどではないが　少し巻き込まれるってのはあったかな」

カ「巻き込まれること?」

じゅ「ああ　うちの仲間にとらって奴がいてな　そいつがまあ運が  
ないんだよ」

カ「あつはは　うちの女神とそつくりだ」

じゅ「普段は可愛くて気が利くし良い奴なんだけど　んーちよつと  
抜けててな」

カ「なるほど　それならまだそのそらさんって人の方が良さそ  
う、、、」

じゅ「まあそんな奴でも俺の大事な仲間だったんだ　、、、でも、、そ  
れがやつによって殺された、、、」

カ「、、、」

じゅ「カズマ　少し自分のことに対しての情報に訂正をさせてくれ

俺はお前の生まれ変わりと言ってはいたが　少し違う　俺は幼い  
お前に憑依した霊という存在なんだいわゆる

怨霊って奴だ」

カ「霊って、、、急にそんなホラーチックな、、、って待て待て!　霊  
だとしたら俺今までアクアに浄化魔法やらをかけられてるのになん  
でじゅんは俺に憑依出来てたんだ?」

じゅ「ああ、、、さあ俺でもさっぱりなんだ　、、、まああえて言う  
なら

俺がこの世に未練を残していてそれが原因で浄化を受けてもカズ  
マに取り憑いてたんだ」

カ「なるほどな、、、じゃあ　じゅんの未練ってのはなんなんだ?」

じゅ「、、、心当たりはある　1つは

ディニラスを倒すこと、、、

そしてもう1つは、

あいつに、そらに会いたいことかもな」

カ「、、なるほど」

じゆ「、、ああ」

カ「あのよ そのそらさんに会わせるつてのは無理だとは思つてはいるけど

、、デイニラスを倒すつていう未練だけは絶対に晴らす」

じゆ「カズマ、」

カ「だからじゆん 俺に色々教えてくれ」

じゆ「、、ああ！」

## この天界に目覚めを

この天界に目覚めを

カ「はあ！ へえあ！」

じゆ「いいぞーカズマ！この数ヶ月で凄い成長してるじゃねーか！」

カ「はあ！」

じゆ「うお！、、、 あつぶねー 頬を掠めやがったか、、、ほんとに凄いな」

カ（あれからもう9ヶ月ほど経っていた 俺とじゆんはこの精神世界で ひたすら修行をしていた この数ヶ月で俺は凄まじい成長をした）

じゆ「、、、 よしカズマ 俺と修行を初めてもう9ヶ月経った訳だ  
ここらで カズマがフォースバスターと浮遊ができるようになったか テストをするぞ」

カ「はい」

じゆ「まずは浮遊からだ

いつでもいいぞー」

カ「おっす！、、、 はあー、、、」

俺は深く深呼吸をし集中する

じゆんから教わったこの浮遊の仕方は

足の裏から見えない魔力の出しそれで浮くというまるで棒龍玉での浮遊方法とそっくりなのだが、、、

カ「、、、 ふっー！」

じゆ「！おおー！随分高く飛べるようになったじゃねーか！」

俺はこの数ヶ月でこの浮遊を習得した  
カ「よし！」

じゅ「よく習得できたなー、だがこれはまだ序の口だ　次が本番  
だぞ、」

次　フォースバスター」

カ「はい！」

カ（この技は本当に扱いが難しい、でもやってやるよ！）

カ「はああ、」

カズマが腕を前に構えると

赤　青　黄色　緑の魔法陣が発動した

カ「、、！　フォースバスター！」

俺は4つの魔法陣から一斉に魔法を放つ

カ「はあ、、はあ、、よし！出来た！」

じゅ「、、ほんとにすげえな　カズマ

あのふたつの技をこれだけの期間で出来るようになるなんてな」

カ「これも全部　じゅんが教えてくれたからだよ、、こちらこそあ  
りがとうございます」

じゅ「さて、、これだけ出来れば俺からもうお前に教えることはな  
いな

そろそろ　現実世界のカズマを起こすとするか」

カ「、、そっか　これでお別れなのか？」

じゅ「さあな　、、、じゃあ　残る4ヶ月あつちで頑張れよ！」  
カ「、、、はい！」

その時俺の体がだんだんと透けていく

カ「じゅん！ほんとにありがとう！」

じゅ「おう！達者でなー！」

アクア side

そ「、、、凄いわアクア　この9ヶ月でここまで行くなんて」

ア「ありがとう　そら　ここまで出来たのもあなたのおかげよ」

ア（私はこの9ヶ月で自身の新しい神の技を作り出した　そらの協力もあつての事だけど）

そ「そこまでできたなら私の役目もここまでね」

ア「そうなの？」

そ「ええ　あとは現実世界の方に任せるわ」

ア「、、、わかったわ」

すると私の体がみるみる透けていく



ア「これって、、、」

そ「アクアの意識が目覚めようとしてるのよ、、、じゃあこれでお別れね」

ア「、、、そうね そら!」

そ「なに?」

ア「絶対にディニラスをぶっ倒して来るからね!」

そ「!、、、ええ 頼むわ」

天界side

カ「、、、うう、、、」

俺は見知らぬ天井を見ながら目を覚ます

カ「、、、ここどこだ?」

ア「、、、うう」

カ「あれ?アクア なんで隣にいるんだ?、、、」

俺が色々なことを考えていると

この部屋の扉が開かれた

めぐみん s i d e

カズマ達が目覚めなくなってもう9ヶ月、、、  
私たち2人は修行をしつつ月一でカズマたちの見舞いに来ていた

め「、、、今日で9ヶ月目ですよ」

ダ「そうだな、、、そうめそめそするな　もしかしたら今日は起きてるかもしれないだろ？」

め「、、、そうですね　今日は2人の大好きなものを持ってきましたし

アクアはシユワシユワの匂いでも起きそうですもんね」

そうこう話している内にカズマ達がいる部屋の扉の前に来た

め（この扉を開けるのはもう何回目だろう　、、、また寝ている彼らを見ることになるのか、、、）

2人は扉を開ける

カ「、、、お！めぐみん　、、、久しぶりだな」

ア「あらダクネス！久しぶりー」

め「……」  
ダ「……」

カ「？おい どうした？そんな死人が起きたのを見たような目で見て」

ア「そうよ そんな顔だと幸せが逃げちゃうわよ？」

すると2人は俺たちに近づいてきた

そして

カ「うお！ め めぐみん！」

ア「わあ！ ダクネス!？」

2人が俺たちに抱きついてきた

カ「ちよ なんだよ ……ってかこんなこと前にもあったような、…  
！」

その時

め「うう…、 うぐう…、 カズマ…、 カジユマ…、」

カ「、、、 ああ カズマだよ」

ダ「アクア、、、 お前ってやつは、、、」

ア「、、、 ごめんね ダクネス」

あれから数分が経った  
俺たちは病室を出て  
ある休憩室で

正座をさせられていた

、、、  
ん？

カ「ちよつと待て！あんな感動的な感じだったのになんで俺たち正

座させられてたんだよ」

ア「そうよ私たち何も悪いことしてないわよ」

め「、、、いいえ！ あなた達2人は数ヶ月も目覚めなくて私たちが2人に心配をかけたんです！」

ダ「今回ばかりはめぐみんの方に賛成だ 普段攻められたい私だから今回ばかりは攻めをさせてもらう」

カ「おい！攻めとか言うな」

め「罰として2人には爆裂魔法を食らって貰う、、、と考えていたのですが、、、さすがにそれは危険なのでダクネスあれを」

ダ「ああ 持ってくる」

カ「、、、何を持ってくる気なんだ」

そしてめぐみんが持ってきたものは

水晶だった

カ「、、、水晶？」

め「ええ それでは2人とも その水晶に 魔力を流してみてください  
さい」

ア「え？そんなことでもいいの？」

カ「、、、なら いいけど わかった  
アクアやるぞ」

そうして俺とアクアは水晶に魔力を流す

カ「この感じ懐かしいなー

昔めぐみんとゆんゆんがウイズの店に行った時に仲良くなる水晶  
を使って

恥ずかしいーことをバラされてたよう、、、な、、、ん？」

ア「、、、ね ねえ？めぐみん、、、これ、、、まさかあの水晶ではない  
わよね」

め「はい あの時の水晶では、、、ないですよ」

カ「、、、そ そうか、、、でもなんでこの水晶に魔力を流すんだ？」

ダ「その水晶はな 魔力を流してる者の本音や恥ずかしい隠し事を  
映し出す 水晶だ」

カ「、、、」

ア「、、、」

カ ア 「はあああああ!？」

カ「はあ！ちよまでよ！なんだよそれ！」

ア「そんなものだったの！これ！」

め「しかもその水晶に魔力流し込んだら最後 魔力を流してる者の本音や恥ずかしい隠し事が全て出るまで 永久に魔力を流すというものです！ ですので途中で辞めるなんてことは無理です！」

カ「ちい ならこの水晶を壊すまで！」

俺は水晶を持ち地面に叩きつけるが

水晶は割れなかった

ダ「残念だが その水晶の硬さはこの世でいちばん固いと言われる素材を使っているらしい」

カ「はあ!? くっそ 誰だよ！こんなもん作り出したやつー！」

め「それは私がこの天界の鍛冶職人さんに頼んだオーダーメイドものです」

カ「天界の鍛冶職人、ゝゝ！

ドワーーーーーーさーーーーーん！」

そこから俺たちは数時間俺とアクア両者の本音や恥ずかしい隠し事が映し出された

カ「…、修行より…、辛い」

ド「へつくしよん！ …、んー風邪でも引いたか？」



## キャラクター設定集 (仮)

これまでのキャラクター設定集

この設定集は主にカズマパーティのみの設定集です  
全キャラの設定集は本編完結後に出します

サトウ カズマ

修行開始時17歳 現在22歳

主要技 剣術 魔法 格闘

所有武器 魔装剣 Z ちゅんちゅん丸

弓矢

取得技

魔装 エンチャント

全種の魔法の元素を剣に纏わせることが出来る

初 中 上級の魔法全てを習得

ネバー

魔力 体力その他諸々のステータスが一切減らないチート支援魔

法

ただし効果は30分

覚醒と同時に発動させると限界活動時間は15分となる

覚醒

自身の神の魔力を覚醒させることで力を飛躍的に伸ばせることが  
可能

現在約38.5倍の力を出せる

※前に25までと言っていたがじゅんとの修行もあり限界度が伸び  
神と同じ50倍ほどの力を引き出せる

ゴッドブロー

神の魔力を得たことで技を出すことが可能に

ゴツドグローブ

常に神の魔力を拳を纏わせる技ネバー使用時限定技

ゴツドブローラッシュ

ネバーを使っている時専用技

その名の通りゴツドブローを連発で打つ技

ネバーを使わないでこの技を使えば

1度で魔力切れを起こす程魔力を消費する

ゴツドレクイエム

神の魔力を得たことで技を出すことが可能になった

エンチャントにも使える

浮遊

じゅんとの修行で習得した技

浮遊時間は最高1日中

浮きながら技を使うと消耗が激しくなり 浮く時間が短くなる

フォースバスター

じゅんとの修行で習得した技

4つの属性の魔法を同時に打つことが可能

全属性対応

アクア

主要技 魔法 剣術 回復魔法 支援魔法

主要武器 杖 魔法で作った剣

クリエイトイブ ウォーター

水を生み出し それを自由自在に形を変えることが出来る

れを使い

水の剣 水龍剣流水を作る

水の魔法全般

アークプリーストの技全て

宴会芸スキル

神の技全て

アアの新しい神技

アアの修行で今までにないアアだけの神技が生まれた  
覚醒

それらの修行もあり現在は47.6倍まで力を引き出せる

めぐみん

修行開始時15歳 現在20歳

使用武器 杖

使用技

爆裂魔法

エクスポロージョン

プリズンエクスポロージョン

プリズンで相手を閉じ込めその中で爆裂魔法を放つ

元ネタは異世界かるてつとめぐみん達がカズマ達を指導から助けるために使った技

チェインエクスポロージョン

威力は少しだけ落ちるが爆裂魔法を複数同時に放つ魔法

ファイナルエクスポロージョン

今のめぐみんの魔力ほぼ使って放つ魔法

その威力は神をも恐れるものであり

空間に穴を開けられるほどの威力

プリズンシールド

魔力で作るバリア

ブロックアーマー

味方にバリアをはる技

ダクネス

修行開始時19歳 現在24

主要武器 剣

雷鳴剣黄雷 エスパードの武器

主要技 剣術 クルセイダーのスキル  
エスパーダから教わった

雷鳴剣 剣技

トルエノ・デストローダ

トルエノ・デル・ソル

シントルエノ・デル・ソル

新技

??????  
coming soon、、

質疑応答

Q 今後ゆんゆんやダスト達の出番はあるのですか？

A 無くはないです。

ですがこのファンなどに出てくるオリジナルキャラクターは出てきません

Q 仮にネバーを2回連続使用したらどうなるのですか？

A 魔力が暴走し使用者の寿命を削ります ただでさえ扱いが難しく1ヶ月に一度しか使えない技を2度使うとなるとそれなりのデメリットが出てきます

Q じゆんとそらの過去の話なんかはするのですか？

A 今のところは考えてはいません

Q 今書いているこのリトすばが終わったらどうしますか？

A 新シリーズが出るかもしれないです

仮にやるならクロスオーバー作品なんかは、、ですかね

Q 雷鳴剣黄雷やエスパーダ など仮面ライダーネタがありますか、、  
あなたは仮面ライダーが好きなんですか？

A はい 好きです

Q 結局ドワーさんは出てくるのですか？

A 出てきます なんならその人がいないとこの先、、おっと 少  
し言い過ぎたかも知れませんが

Q この話で カップリングというのはありますか

A ない訳では無いです この話はカズアクを中心にはしていま

す

Q 後日談なんてものは書きますか？

A 書いてます なんならもう書き終わってますね

Q この物語を書く時どのよう制作しましたか？

A まずどのような二次創作にするかを決めてから

自分がその話でどんなことをしたいかを一通り案を出します

実際 エスパードアの死や 最終決戦などはほんとに初期の方である程度形は出来ていました

簡単に表すと

物語の流れは

世界が破壊される

それが戻られてデ이니ラスを倒すために修行

そして力をつけるもナガトに苦戦

残った1年カズマ アクアはそらとじゆんに修行をつけられる

でしたが

自分が書き始めた頃は

世界が破壊される 修行する

エスパード戦

最終決戦

修行内容

アクアの過去 リミルの過去

バニルとの戦い

じゆん そらの修行

と時系列順ではなくバラバラで進めていました

じゆんとそらの修行内容は最近考えたのですが

じゆんだけは存在自体は初期からありました

Q ここから先新キャラは出てきますか？

A 敵にナガト以外の幹部がいます そいつが出てきます  
そして味方サイドにも新キャラは出てきます そのキャラは

以外な、、やつかもしれませんが

Q 最後の質問です 究極の聖戦編でなぜバニルはカズマに決闘を申し込んだのでしょうか

A バニルは未来を見通しました

その結果を見てカズマに決闘を挑んだのです 、、僕から言えるのはここまでです

Q 物語関係ないのですが花タフさんは

お気に入りと感想どっちを貰ったら嬉しいですか？

A どっちも貰っても嬉しいどちらかと言うとコメントを貰う方が嬉しいですね

逆にこちらから皆様に質問しても宜しいですか？

Q 皆さんはこの物語はどのように終わると思いますか？ ぜひコメントなどに書いてみてください

## この修行に終了を

カ(俺たちが意識を覚ましてから3ヶ月が経ったあれからは今まで通り部屋で修行を行っていた 俺はじゅんから習った技の振り返りをしつつ魔装剣の手入れ や覚醒の訓練などを行っていた)

それと同時に俺はダクネスと共同訓練をしていた 基本的にダクネスとは剣のぶつかり稽古やダクネスの使う雷鳴剣の技なんかを教わった と言っても それっぽい動きでやっていたからダクネスのよりは威力は低くはなる 、、、、そしていよいよデイニラス討伐日まで残り一日のなったのだった)

カ「、、、、残り1日か、、、、」

ネ「そうだな、、、、カズマ 長いようで短かった5年だったな」

カ「はい ネバーさん まだ早いかもしれませんが この5年間俺に修行をつけてくれて ありがとうございます」

ネ「なあに 礼なんていいんだよ

、、、、ほんとに強くなったな」

カ「！、、、、ありがとうございます」

あの ネバーさん 少しお願いがあるんですが」

ネ「ん？ なんだ？」

カ「、、、、ネバーさん 少し散歩してきてもいいですかね？」

ネ「なんだ そんなことか ああ いいぞ」

カ「！ありがとうございます」

ネ「おう 気をつけて行ってこいよ あいつらも連れてってやれ」

俺は少し着替え部屋を出ることにした

…、とその前にアイツらも呼んでいくか

俺は扉の前に立ちノックする

ア「あら カズマどうしたの？」

カ「ああ 少し散歩しようと思ってな

1人じゃ寂しいと思ったからみんなを呼びにな」

ア「ふうーん まあ たまには息抜きは必要よね 待ってて準備してくるから」

とアクアは部屋に戻って行った

さてと2人も誘っていくか

俺は神殿の出口で3人を待つ

カ（この1ヶ月でここまで修復されてるなんて…、なんか紅魔の里を思い出すよ）

め「お待たせしましたー」

カ「おう ようやく来たか」



ア「なんだか久しぶりね この4人で歩くなんて」  
ダ「だな 前回つたのは2年半前だからな」  
カ「もうそんな前か、、早いな」

め「ここで立ち話もあれなので 行きましようか」  
カ「だな」  
そうして俺たちは天界の街を回るようになった

カ「にしてもここ回るのも懐かしいな」  
め「そうですね 私も最後にここに来たのはもう何年前のことか」

ア「めぐみん 発言がお年寄り臭いわよ」  
め「な！ 誰が年寄りですかまだ20歳ですよ」  
ダ「まあまあ落ち着け2人とも  
、、ふふっ」

ア「?どうしたのよ ダクネス急に笑いだして」  
ダ「いや何 こんな感じのやり取りも懐かしいなど感じてな」

め「ダクネスの方が発言がお年寄り臭いですよ」  
ダ「な!?!」  
カ「はいはい 落ち着けて 全く相変わらずだな、、つと着いたか」

俺たちはあるところに着いたそこは

ドワーさんの鍛冶屋だ

ここに来た理由はこの前ドワーさんに魔装剣の修正を頼んでいて  
今日それが終わったので取りに来たのだった

カ「お邪魔しまーす」

ド「いらっしやーい お！ カズマじゃねーか 魔装剣完璧に仕上がったぜ」

カ「おおー！ さっすが 天界の鍛冶職人だね」

ド「よせよー 全く 、、、、いよいよ明日なんだな」

カ「ああ 明日俺たちは行くよ」

ド「早いなー年月が経つのは 俺がカズマとあつたのなんてもう4年前だからな」

カ「ですね」

ド「あ！そうだそうだ ちょっと待ってな」

とドワーさんは店の奥に行つてある物を持ってきた

ド「ほれ これ持ってけ」

カ「これは？」

ド「これはブレスレットだな」

ア「ブレスレット？腕とかにつけるあの？」

ド「ああ これをカズマに渡そうと思つてな」

カ「え？なんで俺に」

ド「いいから いいから こいつを持ってけ 俺からのお守りだと思つてくれ

きつと 役に立つと思う」

カ「ドワーさん、、、、」

ド「じゃあ お前ら 明日 頑張れよ

またな！」

カ「、、、、ああ！」

こうして俺たちはドワーさんの店を出て天界にある草原に来た

ダ「ものすごい広いな」

ア「本当 アクセル近くの野原みたいみたい」

カ「ここならカエルは出てこないから安心だな」  
ア「ちよ！ 嫌なこと思い出させないでよ」

と俺たちは取り留めのない話をした

め「今 地上のみんなはどうなっているのですかね、」

ダ「そうだな、、、前回も戻ったがまた皆に何も言わず帰ってしまつたからな」

カ「、、今になって初めて思うよ

俺たちってほんとに世界を救うために頑張ってたんだなって」

ア「数年前のカズマに今の状況聞かせてあげたいわ 絶対信じないでしょうけど」

カ「まあカズマですしね」

カ「確かにな、、」

俺たちは草原に座り景色をみる

カ（明日、、もし負けたらこの景色もあの地上も全て破壊される、、）

カ「、、はアア」

ア「?どうしたのよ ため息なんか吐いて」

カ「お前ら ちよつとこつち来い」

ア「ん?どうしたのよカズマ」

カ「まあ?明日がいよいよ決戦って訳なんだが、、その気合いを入れるために 円陣でも組もうぜ」

ア「何よ カズマのくせにやる気満々ね」

カ「一言余計だ」

め「おお いいですね やりましょう」

カ「よし じゃあ輪になれー」

俺たちは輪になり肩を組んだ

カ「俺たちはここで5年修行した その5年間は色んなことがあった、、だが

それも全て明日のためのことだ」

ア「ええ あのデイニラスをぶっ倒すためにここまでやってきたのよ」

め「そうですね 奴に私の最大爆裂魔法を食らわしてあげますよ」

ダ「ああ 地上の皆やここの人達も守るために」

カ「、、俺たちは明日 世界をかけた戦いが始まる でも 約束だ 必ず勝ってみんなで帰るぞ」

め「当たり前ですよ 我が爆裂道はまだまだ終わりませんからね！」

ダ「ああ 私もまだ死ねん」

ア「ええ！みんなで生きて帰って 宴会するわよ！」

『おおー！』

そして日は落ち 夜が来て

夜が開けようとしている

出発は日の出

俺は防具をつけ 武器を持ち 支度をし

神殿の扉を開ける

外にはアクア達が待っていた

俺たちは昇る太陽に向かい歩く

そして オーバーさん リミルさん ネバーさんフレアさん  
ポカさん が列に加わる  
リ

さあ 救おう この素晴らしい世界を守るために

## この幹部との戦いを

俺たちは日の出と共にデイニラス教徒達がいると思われる本拠地を目指している

カ「あそこがか、、、」

オ「ああ デイニラス教徒の本拠地だ そしてあのデイニラスが封印されている場所でもある、、、」

ネ「突撃は今からあと30分後だ、、、 皆各々準備をしていくれ、、、」

カ「30分、、、」

ダ「?どうしたカズマ」

カ「ん?ああ ダクネス俺少し行ってくるわ」

ダ「行ってくるって、、、どこにだ」

カ「まあ、、、ちよつとな」

俺はテレポートを使ってある場所に行った

ダ「あ!カズマ!、、、行ってしまった」

カズマ side

俺はある所に向かっている タイムリミットはあと20分つてとこか

じ (わざわざここまで来て何しに来たんだ?)

カ「うお! え!? じゅん!どこから」

辺りを見渡しても誰もいない

じ「今俺はお前の脳に直接話しかけている」

カ「こいつ直接脳内に」

じ「、、、そういうのいいから」

カ「で、、、なんで脳内に話しかけてきたの　ってかそんなことできたのかよ」

じ「まあな　そしてカズマお前に話ときたいことがある」

カ「話ときたいこと？」

じ「ああ、、、それは、、、」

20分後

カ「よつ　今戻ったぜ」

ダ「ほんとにギリギリだったじゃないか！」

め「そうですねよ　今から戦いに行くっていうのに呑気ですね、、、」

カ「こういう時こそリラックスだ」

リ「皆さん」

ア「ママ？どうしたの？」

リ「皆さんにこちらを渡しておきたくて」

俺たちに渡されたものは

ポーションだった

カ「これって、、、ポーション？」

リ「はい　このポーションはこの天界で1番の回復能力があるポーションなのです」

ア「ちよつと そんなのよりも私がみんなを回復してあげるわよ」  
リ「一応念の為を思つて皆さんには持つておいて貰いたいのです」  
カ「そういうなつてアクア もしお前が魔力切れにでもなつたら回復手段がなくなつてしまふだろ 念の為保険として持つておこうぜ」  
ア「、、、わかつたわ ありがとね ママ」

オ「皆そろそろ時間だ、、、 作戦通り行くぞ」

一同「はい」

作戦はこうだ

まずフレアさんの爆裂魔法で警備している悪魔やアンデッド達を吹き飛ばす

もし生き残りがいたらリポカさんアクアで浄化魔法

入口でリミルさんとフレアさんは待機

そして中に入った後中にいる悪魔やアンデッドを倒していく

そしてデイニラスが封印されている場所にたどり着いたら

めぐみん俺アクアの3人の魔法で封印されている祠ごと吹き飛ばしデイニラス諸共消滅させる

という内容だ

デイニラスの封印が解けてしまうのが今日の12時現在時刻は10時、、、タイムリミットは2時間だ

オ「行くぞ、、、フレア」

フ「はい めぐみんさん、、、使わせてもらいます」



め「はい ぶっぱなしてください！」

フ「チェインエクスペロージョン！」

その瞬間爆裂魔法がアジト周辺のアンデッドを吹き飛ばす

オ「今だ！突撃ー！」

俺たちはその掛け声とともに敵のアジトへと攻め込む

リミル「皆さん、、、」

フレア「めぐみんさん皆さん、、、頑張ってください」

ア「ターンアンデッド！」

カ「ウインドブレス！」

俺たちは道中のアンデットや悪魔を倒しながら奥に進む

ネ「武器三節棍 ネバーエンドラッシュ！」

ダ「はああ！」

オ「さすが敵のアジトぎょうさん悪魔やアンデットがおるわ」

カ「ここは俺たちが 行くぞアクア」

ア「ええ」

カ ア「セイクリッド ターンアンデット！」

俺たちが放った浄化魔法によりほとんどのアンデット達が浄化される

カ「よし さらに奥に行くぞ」

ナ「ふっふふ、、、」

カ「!、、、なんだ」

ナ「まさか私たちのアジトを突き止めるとは、、、なかなかやるではありませんか」

カ「お前は、、、ナガト！」

ナ「ですが、、、あなた達にできることはありません 私に敗北しそのまま世界が破壊される瞬間を見ることになるのです」

カ「前の俺たちと一緒に思うなよ、」

俺は剣を構えようとする

ダ「皆 先に行ってくれ 私がやつの相手をする」

カ「！」

ナ「ほう お前は、ああ エスパードの弟子だったか？ 、、面  
白い 師匠の仇でも打ちに来たか」

カ「ダクネス、」

ダ「行ってくれカズマ まだディニラスが封印されている今ならや  
つを倒せる可能性はある、、こいつは私が足止めする」

め「ダクネス、」

カ「、、ああ わかった 、、死ぬなよ」

ダ「、、ああ」

俺はダクネスを置いて奥の方に進む

ナ「行かせるわけないでしょう！」

ダ「はあ！」

ナガトは俺たちの方に魔法を打ってきたがダクネスがそれを弾く

ダ「お前の相手は私だ」

ナ「、、貴様ひとりで私に勝てると思っているのか、、1年前のこ

とを忘れたのか？」

ダ「ああ忘れもしない　だから強くなるため力をつけてきた、、、この戦いに勝つために」

カ「クリエイト　ウォーター！」

カ「ブリザード！　今ですオーバーさん」

オ「おおうらあ！」

凍らせたアンデットをオーバーが粉々にする

オ「まだまだ出てくるな」

め「ダクネス、、、」

カ「振り返るな！　そしたらダクネス残った意味がなくなる」

俺たちはデ이니ラスが封印されてる最深部へと向かう

## 回想

じ「前にお前を倒した　ナガトってやつがいただろ」

カ「、、、ああ　そいつがどうかしたのか」

じ「あいつは1000年前もともと俺の騎士団の団員だったんだ」

カ「！」

じ「1000年前魔王を倒したあと俺は王国の騎士団の指揮を取っていた　ナガト、、、いやナーガはその団員だった」

カ「でもなんでそんなやつが、、、」

じ「やつには騎士団で仲間がいたよくそいつらがワイワイやってたのを俺はよく見ていた、、、だがある日その仲間のひとり力が手に入れた豹変した。そしてナーガの家族を殺し騎士団を裏切った。ナーガは絶望していた。そしてナーガは騎士団を抜け姿を消した。」

カ「、、、」

じ「そして1年前見たあいつは紛うことなきリッチーだった、、、恐らく人間でいることをやめてリッチーになったんだろう、、、」

カ「、、、でなんで今それを話した」

じ「あいつがああなってしまう前に俺が止められたはずだった、、、だからその落とし前をつけたくてな」

カ「、、、なるほどな」

回想終了

カ「、、、でもよじゆんその落とし前今はあいつに任せる」

ア「だいぶ奥まで来たけど、、、」

リ「敵の数が減ってきたわね」

? 「、、、おいおいまさかほんとに来たのかよ」

カ「!誰だ」

? 「へっへ、、、おうおう随分大人数出てますじゃねーか」

オ「お前は誰だ、、、」

ナギト「俺の名はナギト！ディニラス教徒の幹部の1人だ」

ア「あんたも幹部って訳、、、」

ナ「にしてもよ 俺は1人なのにお前らは6人かよ」

リ「そんなの知ったこったないの」

ナ「だーかーらー、、、 おれも増えてやるよ

コピー」

するとナギトの後ろからすつとナギトと同じ姿をしたやつが二人いた

カ「！、、、 分身したってのか」

ナ「行くぞ 俺たち、、、」

ナ「おう 俺たち！」

カ「ちい ここで時間を取られるのはきついで」

ナ「どこ見てんだ！」

カ「！ はあ！」

ナギトが殴り掛かりに来るが俺は拳をナギトにぶつける

カ「ぐう、、」

ナ「へえーなかなかやるやつじゃねーか！」

ア「クリエイティブ ウォーター  
ガン！」

ア「ウォーターキャノン！」

ナ「！うお」

ナ「なんだそれ 面白い魔法だな」

ネ「ちい こいつら厄介だ、、」

リ「全くよ この！」

ナ「じゃあ、、分身よ散れ！」

ナ ナ 「テレポート！」

その時

三体のうちの2体がどこかへ消えたそして

それと同時にネバーさんリポカさんも消えた

カ「！ネバーさん！リポカさん！」

ナ「奴らは俺の分身のテレポートによりどこかへ飛んだ！」

カ「くっそ、っ、」

ナ「さあ戦いを続けよう　そしてディニラス様によってこの世界は破壊される！」



## 番外 作者とカズマ達が語りあう回

花タフ 「どうも！ リトライ wonderful world  
を書いていきます 花タフと申しませう ええ この番外では  
ですね 私花タフとこのすばのキャラたちで色んなことを話してい  
こうという回でございます そして今回そのこのすばキャラたちか  
らゲストをお呼びしましたこの方です！」

カ 「どうも サトウカズマです」

花 「いやー カズマさんいよいよ物語が最終章にね入ったという訳  
ですがどうでしょう」

カ 「どうでしょうと言われてもな、、なんか時が流れるのは早いな  
とは感じますけど」

花 「まあこの作品今年の1月とか2月ぐらいに投稿始めましたから  
ね半年ぐらいでここまで来たという」

カ 「結構不定期更新だったよな」

花 「、、まあそこは置いといて カズマさん このリトライの話の  
中で色々なことがあったと思うんですよ」

カ 「まあな いいこともあれば嫌なこともあったよ」

花 「そこでですねカズマさんにリトすばの話の中で面白かった話ベ  
ストスリーを発表してもらいたいんですよ」

カ 「面白かった話？ 、、うーん、、登場人物が語るのってどうな  
の？」

花 「、、確かにな じゃあこうしよ 私花タフが進めるリトすばの

ベストスリーを発表します！」

カ「俗に言う宣伝だな」

花「いいんだよ さて第3位

第1話この素晴らしかった世界に別れを！」

カ「1話が3位か！どうしてなんだ？」

花「これを語るにはまずは自分がpixivメインでやってた頃になりますね 元々自分はpixivの方で 異世界かるてつとの二次創作を書いていたんですよ」

カ「確か俺とスバルが入れ替わるって話だったっけ？」

、、あれ更新どうした」

花「、、あつちの更新が途絶えたのは このリトすばの更新メインしし始めたからであるし そして以前使っていた花タフというアカウントが謎に使えなくなったということもあって

今はリトすばに専念しているんだ あつ pixivの方でも花タフ2という名前でリトすば更新中です是非見てね」

カ「宣伝じゃねーか」

花「話を戻すとPixivで書いてたんですよ。そしてある日、カズマが最強とか逆行する二次創作にハマりましてね。自分も書いてみたいと思ったんですよ」

カ「うんうん」

カ「そして書くこととした時迷ったんですよ。カズマ最強を書くのか、カズマが逆行して同じ世界をどう過ごすかを書くかを」

そして気づいたんですよ。なら両方の要素を合わせた物語を書くこと」

カ「おお。結構な決断だな」

花「そして自分がこのすばの二次創作を見て思ったのは、みんなあまり最終回後の物語って書かないんだなと。もちろん書いてあるものはありますが、基本的にそれは逆行してまたカズマたちの冒険をするという話が多いです。ですが」

このすば本編終了後を模試で書いたものって多分なかったと思うんです（個人調べ）なのでないのなら自分で書くことと思ったわけなのです」

カ「行動力の塊か」

花「そして思いついたのが、このリトすばということなんです」

カ「なるほどなあ。でも原作後にするのは結構な決断だな」

花「正直どのような反応が来るか怖かったのはあるけど」

あげた当時はかなり良かったらしく、続きが見たいとコメに来たこともあった。あれは嬉しかった」

カ「実はこの作者いつもこのリトすばの情報とかでお気に入りされ

てるかな コメントされてるかなとか毎回気にしてるんですよ」

花「ちよ！それ言うなよ！、でも実際お気に入りとかコメントされてると嬉しいです それが書き手の活力になります

目標は評価バーに色を付けること 、、せめて黄色でもいいから、、」

カ「傲慢なやつやな んでランキングの続きは」

花「おお そうだった 発表します第2位は 同率で

第22話23話 この聖なる剣に誓いをとこの剣の神に冥福を」

カ「この話かあ 、、うーん」

花「登場人物からしたらそらそうなるわな 、、

でも実際自分としてはこの話はこのリトすばの全体を作るって時に真っ先に思いついたアイディアなんです

皆さん覚えてますか？エスパード初登場の時 彼はカズマ達のことを認めていませんでした 特にダクネスに対して

ですがダクネスの修行っぷりを見て エスパードがダクネスに対する気持ちが変わってきたんです それを現したかったのがこの回出した」

カ「作者が意図をばらすのってどうなの？」

花「元々このエスパードというのは仮面ライダーからとっています  
2020年放送仮面ライダーセイバーに登場する

3号ライダー 主人公の親友である賢人が変身する  
仮面ライダーエスパードからとっています

このエスパードは実はセイバーでは序盤のほうで消えてしまうの  
です そこからとって エスパードは死ぬという流れになりました」

カ「本物の方はカリバーとして復活してたが、、、さすがにか」

花「そこから先は自分からは言えません、、、

そして恐らくこの先まだ ライダーネタのようなものは出ると思  
います」

カ「ライダーネタ好きだな」

花「そして堂々の第1位！

同じく同率！第15話16話！

この悪魔に決闘を この仮面の悪魔に決着を！

カ「1位と2位が同着多すぎるだろ！」

花「まあ正直1位と2位は元々1話としてまとめてたんだが 話数  
を稼ごうとして前編後編みたいに分けちゃったんだ

実質1話分として考えて貰ってOKです」

カ「それは分かった　…、あとよーつ聞きたいことがある」  
花「なに？」

カ「作者さ」

こうやって空欄開けるのめっちゃ使うよな」

花「うぐ！」

カ「さすがに使いすぎじゃねえか？今回の回だってもう何回使ったか　あと思っただのがこのリトすば読んでるとわかるけど　文と文の間明らかに開きすぎ」

花「ぐふ！」

カ「まださー行とかなら分かるがさーとかは多すぎるだろ」

花「うぐあ…、たしかに俺はそれを多用する　それは何故か…、それは

カ「また開けてる…、」

俺の好きな二次創作作家さんがそんなふうにやってたから」

カ「つまりパクったのか！」

花「違います オマージュしたんです その人の作品が好きで読んでてそれがきっかけで書きたいという気持ちが出来たんです ……ちなみにその人もこんな感じで作者とキャラ達を話させて雑談みたいな感じのをやってますね」

カ「やっぱパクリじゃねえか！」

花「作者とキャラたちを話させるのなんて他にもいっぱいいるよ！」

カ「そういうことを言うな！」

花「ああ あと話を戻します なぜこの話達が1位になったのか実はこの話 現状リトすばの中で1番長い話なんですよ」

カ「…、え？それだけ」

花「いやそれだけではないけど まず基本的このリトすばの1話の平均文字数2000ちよつとなんですよ 多くて3000とかですがあのバニル戦闘回は5000字以上かけて書いたものなんですそして俺が書きたかったカズマ最強がここでついにかけたということなんですよ」

カ「確かに本編で修行中にちゃんとした戦闘ってあの回が初めてなんだよな」

花「修行の成果 and 自分の書きたかった物がかけたという理由から1位ということになりました」

ですが皆さん恐らく最終回につれて文字数がどんどん多くはなっていくと思いますお楽しみに」

花「さて今回はここまで 読んでくださった方ありがとうございます  
す 良ければお気に入り コメント 評価お願いします」

それでは次の話で会いましょうさよなら！



## このクルセイダーの生き様を

このクルセイダーの生き様を

現在の状況

カズマ アクア めぐみん オーバー

ナギト1と戦闘

ネバー ナギト2とテレポートで飛ばされた

リポカ ナギト3にテレポートによりどこかへ飛ばされた

リミル フレア 入口で見張り

ダクネス 1人でナガトと交戦

ネバー side

ネ「!ここは」

ナ「ここはなんだと思う 無限の神よ」

ネバーは当たりを見渡す そこには

城が並ぶ街があつた

ナ「あの場所はこの地上世界の中心となる 王都と言われる場所だ、」

ネ「なんだと!」

ナ「この世界を壊す前にまずはあの国ごと消えてもらうんだよ!俺様の手によってな!」

ナギトは地面に手をつけると魔法陣から悪魔が呼び出される

ネ「召喚したのか、、、 させるか！」

ネバーはナギトに三節棍で殴り掛かる

ナ「止められるか？お前に」

ネ「止められるかじゃねえ 止めるんだよ！」

リポカ s i d e

リ「！どこよ、、、 ここ あれって 街？」

ナ「その通りだ、、、」

リ「！」

ナ「俺たちは地上世界を破壊しに来たのだ あの街を破壊したあとは付近の街も破壊する」

ナギトは魔法陣を出し悪魔を召喚する

リ「あいつ悪魔を」

ナ「そしてその後世界そのものが破壊されるのだ！」

リ「そんなことさせるわけないでしょ！」

ナ「無駄だあ お前に俺は倒せない！」

ダクネス s i d e

ダ「はああああ！」

ナ「へえああ！」

ダクネスの剣とナガトの拳がぶつかり合う

ナ「ほう 前よりはマシになったようだな、；、だが！」

ダ「！ ふっ」

ナガトの蹴りを避け距離を置く

ダ「トルエノ・デストローダ」

ダクネスは高速で動きナガトへ連撃をする

ナ「シールド」

ダ「くっ バリアか」

ナ「そんなものなのか？、；、ならば次はこっちの番だ！フレアキヤ  
ノーン！」

ダ「ふっ」

ダ（魔法を避けながら相手の隙を探すしかないな、；、）

ナ「どうした！ 避けてばかりではつまらんど！」

ダ「くっ  
」

ナ「俺を倒すと言ったのはハツタリだったのか！」

ダ「トルエノ・エチャード！」

ナ「その斬撃はもう効かん！」

ダ「くっ」

ナ「マグナムストーン」

地面から次々と岩のトゲが生え近ずいてくる

ダ「はあああああああああ!!

トルエノ・デル・ソル!」

ナ「ほう、、」

ダ「手数ではあっちの方が有利だ、、」  
なら

ダ「ふっ」

私はナガトの周りを素早く駆ける

ダ「どうにか放浪させ 隙を作ることが出来れば」

ナ「全く 忘れたのかい、、 僕の前にスピードは無力だよ」

ダ「トルエノ ・エチャード!」

ナ「スローマジック展開」

ナガトは自身の周り半径1mに展開する

ダ「な! しま、、」

ナ「ふはは、、この結界の外はゆつくりだ、、つまりスピードなど意味が無い今からお前を ゆっくりといたぶってやる、、フレア  
キャノン!」

ナガトはダクネス目掛け魔法を放つ  
その魔法は結界外を出るとゆっくりとダクネスに近づく

ナ「その魔法がお前に届くまで残り30秒と言ったとこだ！」

段々と炎の玉とダクネスの距離が縮まる

ナ「あと10秒！」

6

5

4

3

2

1、、、終わりだ

ナ「がああ?!」

ナガトはなにかに被弾した

その衝撃により結界は解かれ  
元の速さに戻る

ダ「! ふっ」

ナ「なんだ、、、貴様、、、何をした!」

ダ「貴様がスローマジックを使うことなど覚えている だから私が  
素早く動くことでお前にスローマジックを使わせる流れを作った  
そしてそれをよんでスローマジック発動前にトルエノ・エチャードを  
放った」

ナ「なん、、、だと、、、」

ダ「あの時の私だと思ふなよ、、、」

ナ「ぎい、、、 貴様、、、」

ナ「お前の目は、、、希望を見ている目だ、、、 まさかお前はアイツらが本当にディニラス様を倒すと信じているのか、、、」

ダ「当たり前だ、、、」

ナ「、、、 どうせ それも信頼というものなんだろう、、、」

ダ「貴様、、、 前に信頼などいらぬと

言っていたな、、、」

ナ「、、、 ええ そうです 信頼など何も生まない 信頼や友情など綺麗事を言っていたお前の師も その信頼のせいで死んだ!」

ダ「、、、」

ナ「貴様の仲間は貴様が私を倒すと思っている、、、 なぜそんなことを思えるのか、、、 私には理解できない」

ダ「、、、」

ナ「友情や信頼など不必要、、、  
そもそもまもなくディニラス様によってこの世界は破壊されるのです」

ダ「私たちはそれを止めるために来ているんだ」

ナ「無駄だ 全てはディニラス様により無になるのだ、、、」

ダ「私は、、、 カズマ達を信じている

カズマ達も私を信じてくれている、、、

だから 私は戦うんだ」

ナ「本当に人間は友情だの信頼だの仲間という戯言を言うな！」

ダ「共に助け合い生きていく　それが人間だ！」

ナ「違う！人は争い　憎み合い　殺し合う！それが人間だ！　ライジンコメット！」

ダ「ふつ　トルエノ・デストロダー！」

ナ「があは　、、、　ぎい！」

ナガトはダクネスを睨みつける

ダ「、、貴様が過去どのようなことがあったのかは私は知らない、、だからって　全てを破壊する程なのか！その恨みは」

ナ「黙れ　ああそうだ！その全てを破壊するために俺はリッチーになつたんだ！　この世の全てを破壊するがために！」

ダ「、、私の友はある理由でリッチーになつた　だがそれは仲間のため　その

命を救うためにリッチーになつた、、」

ナ「だからなんだと言うのだ！」

ダ「力を持つと言うことは！私利私欲のためではなく　誰かを守るため　誰かを救うための力なんだ！」

ナ「守る、、救う、、人間など守る価値もない愚かな種族だ　1

000年前俺は裏切られたお前らが言う信頼を持つていた友にだ！  
、、お前に、、お前に何がわかる！　人間をやめリッチーとなつた1000年間、、致命傷になる怪我を即再生する不死身の体、、その苦しみを、、お前ごときに！」



ナ「人間は、、、何も変わらない 1000年経った今も 人は力を求め裏切り争い 殺し合い そして死んでいく、、、人間の本质は変わらない!だから滅ぼされる!ディニラス様によって!」

ダ「確かに 人の歴史には争いは耐えない、、、でも その中でも人々は変わってきた 人は人を信じ助け合う生き物だ 人は変わるんだ!」

ナ「黙れ、、、」

ダ「その思いはその繋がりは 人を強くし変えてくれる、、、お前はそれに目を逸らしていた! 勝手に諦めたんだ!人間を信じることを!その可能性を!」

ナ「黙れ、、、 黙れ!俺の1000年が、、、お前ごときに覆されてたまるか!」

ナ「インフェルノ!」

ダ「はああ!」

ダクネスは魔法を剣で切る

ナ「なに!」

ダ「人の思いの力がどれほどのものか、、、私が教えてやる!」  
その時私の持っていた師匠の剣

雷鳴剣黄雷が光り輝く

ダ「!、、、行くぞ」

ナ「お前に、、、俺がたおされるものかああああ!」

ダ「雷鳴剣 剣技 演舞!」

ダ「トルエノ・デストローダ!」

ナ「があは！、、！なぜだ！なぜ切られた場所が修復しない!？」

ダ「トルエノ・ニチャーダ」

ナ「ぎい！ フレアガーデン！」

私は魔法を避け次の攻撃に移行する

ダ「トルエノ・デル・ソル！」

ナ「がああ！」

ダ「はああ、、！」

ダ「シン・トルエノ・デル・ソル！」

ナ「があ、、ああ、、」

ダ「この世界の破壊は私達が止める！」

ナ「はああああああああ!!」

ダ「雷鳴剣 剣術 、、 最終奥義」

その時青い稲妻がダクネスの身にやどる  
今この場にはナガト ダクネスの魔力が漂う

ナ「！こんなところで終わるか、、、お前は、、、お前は！  
マジックオーリクスティンション  
!!!!!!」

エスパーダ（行け、、、ダクネス）

ダ「!!トルエノ・エスパーダ・エスフェダンファン  
!!!!!!」

両者の魔法と剣術がぶつかり合い  
爆発する

砂煙が舞う空間に2人が佇む

ダ「、、、」

ナ「、、、」

? 「があは!、、、」

? 「勝負あったな

ナガト」

ナガトは膝から崩れ落ちその場に座り込む

ナ「、、、そんな技は、、、エスパーダは出さなかった、、、何故だ、、、」

ダ「この技は 私独自で考えた技だ

、、、お前を倒すため 師匠の思いを果たすために 作った技だ」

ナ「、、、それが、、、思いの、、、力なのか、、、」

ダ「、、、ああ」

ナ「ふ ふふ、、、 ははは、、、」

ナガトは崩れ倒れ 体が塵になった

ダ「、、、さて 皆の所へ、、、いかなければ」

カズマ side

ナ「おらよ！」

カ「ぐっ …… こいつ… しつこい」

ア「大丈夫 カズマ！」

カ「ああ まだ大丈夫だ」

ナ「おいおい！そんなんでディニラス様を倒そうってか！甚だしいにもほどがある！」

カ「ちい …… 仕方ねえ どうにか最後の方まで体力は残したかったんだが…」

覚醒！」

ナ「なんだ！髪が逆立ってやがる  
それあれだろ？覚醒ってやつだろ」

カ「ああ 速攻で蹴りをつけてやる」

ナ「ああ?!何言ってやが カ「はあ！」ぐっはあ?!」

ア「カズマ… あの時よりも一段と早くなってるわ…」

め「凄いです…」

ナ「ぎいゝゝ、なかなかやるじゃカ「はあ！」がはあ！」

カ「言つたる速攻で蹴りをつけるって」

俺は手をかまえ魔力を貯める

カ「フォースバスターー！ー！」

4色に輝く魔法をナギトに打つ

ナ「がアアアアアアアアアアアア！」

ナギトはそのまま奥の方へと飛ばされた

その先は

デイニラスが封印されている場所だった

ナ「くそゝゝ、こんな人間ごときにゝゝ、」

カ「さあ観念しろゝゝ、あの封印されてるでっかい棺ごとお前を吹っ飛ばしてやる」

ナ「ぐう、」

こうなったら、」

ナガトは封印されている棺の前に行く

ナ「この俺の魂を捧げます デイニラス様 そしてこの世に再び再降臨し 世界を破壊してください」

カ「あいつまさか！自分を生贄にしてデイニラスを復活させる気か！」

ア「なんですって！」

め「2人とももう今打つしかありません！」

カ「ああ 2人とも行くぞ」

俺とアクアは覚醒状態になる

めぐみんも魔力を最大限貯める

ナ「ああ、、、デイニ、、、ラス、、、さ、、、ま」



カ「フォースバスター！」

ア「ゴットレクイエム！」

め「エクスプロージョン！」

俺たちは棺とナギト目掛け魔法を放った

カ「、、、どうなった、、」

ア「、、」

その瞬間

カズマ アクア フレア リミル オーバー

「!!」

カ「この禍々しい程の魔力、、」

ア「この魔力、、あの時と同じ」

フ「リミルさん　…まさか」

リ「ええ…、恐らく…、復活してしまったのです

あの破壊神が」

デイ「ぐつああ…、久しぶりの外だな…、だが何故かそこまで久しぶりでは無いのはなぜだ…、」

め「…、あいつは」

ア「…、ええ」

カ（間違いない…、あいつは過去で俺たちの世界を破壊した張本人…、）



## あの悪魔の復活を

現状状況

ダクネスカズマ達の所へ向かっている

ネバー 王都近くでナギトと交戦

リポカ アクセル近くでナギトと交戦

カズマ達 デイニラス封印の間

ダクネス side

ダ「はあ、、、はあ、、、ここら辺のアンデットはカズマ達がやったんだろうか、、、急がなくては、、、なんだか胸騒ぎがする」

私は奥の方へと走り出した

カズマ side

カ「デイニラス、、、」

め「まさか、、、復活してしまうなんて、、、」

デイ「何年ぶりの外だ?、、、確か1000年前か、、、あの忌々しい人間によって封印されたからな、、、だが感じる限りあいつの魔力はない、、、今度こそ俺は全てを破壊してやる!ふっははは!」

カ「させるわけねえだろ！」

俺は即座にディニラスに突っ込んだ

デイ「！」

オ「カズマ！」

ディニラスはその攻撃を防ぐ

デイ「ほう 貴様誰だ？ …… いや貴様どこかで見ただことがあるぞ、」

カ「てめえが覚えていようが覚えてなからうが関係ねえ！俺はお前をぶっ倒す！」

この時この5年で溜まっていたディニラスに対する恨みが爆発した

デイ「ほう 俺を倒すか？ 面白いやつだ！やれるものならやってみろ！」

俺は1度距離を取り魔法陣を出す

カ「インフェルノ！」

デイ「ふん！」

ディニラスは魔法を腕で弾く

デイ「貴様人間のようだが、…何故神の魔力が入ってやがる、…まるであいつそっくりのようにな、」

恐らくあいつというのはじゅんごことだろう

カ「ちい」

ア「カズマ 私も」

カ「ああ めぐみん やつの錯乱を頼む！」

め「分かりました！」

カ「行くぞアクア」

ア「ええ」

ア「クリエイター　ウォーター  
ソード」

俺たちは剣を構える

デイ「ほう　、、その青髪のやつは女神みたいだな、、」

ア「はあああああ！」

カ「はあああああ！」

デイ「魔力剣閻魔！」

デイニラスは何も無い空間から剣を生成する

デイ「へえやあ！」

カ　ア「はあああああ！」

デイニラスの剣と俺たちの剣がギリギリと擦れ合う

カ「距離取るぞアクア」

ア「ふっ！」

デイニラスの剣を払い距離をとる

カ「エンチャントウィンド

エアブレード！」

魔装剣に風を纏わせる

カ「ウィンドスラッシュ！」

剣を振りデイニラス目掛け竜巻を起こす

デイ「ふん！」

閻魔を振り竜巻を相殺させる

め「チェインエクスプロージョン！」

デイ「！ ふっ」

さすがのやつも爆裂魔法は避けるか

め「まだまだあ！」

デイニラスを追うように爆裂魔法は打ち込まれる

カ「アクア！俺に合わせて水を放ってくれ！」

ア「！わかった」

カ「エンチャントエレキ

アクア今だ！」

ア「セイクリッドクリエイト ウォーター！」

カ「エレキツク メテオ！」

爆裂魔法でやつを囲み 水で動きを封じそこに雷を落とす！

カ「くらええ！」

雷はやつに直撃し地面がえぐれていた

カ「…、どうだ」

デイ「ほう、、、なかなかなものじゃないか？」

地面からやつの声が聞こえてきた

デイ「お前らはなかなかやるとみた、、、少しだけ相手をしてやろう」

オ「来るぞ」

デイ「閻魔 デイメンション スラツシユ！」

カ「！エンチャント セイクリッド  
ヘブンス スラツシユ！」

ふたつの斬撃が衝突し相殺になる

デイ「ほう 相殺にさせるか！」

オ「やつに真正面からはキツイだろう 隙を着いて やるしかない  
ねえ」

カ「分かりました、、、」

オ「アクア カズマ めぐみん 行くぞ」

オーバーはデイニラスの所へ走り出す

オ「はあああ！」

デイ「ふん！、、、 貴様見覚えがあるぞ、、、 確か奴らと共に戦ってた  
神だったか！」

オ「ああ そうだ1000年前は封印せざる負えなかったが今回は  
貴様を倒す気で戦う！」



## 回想

カ「オーバーさん、、聞きたいんですが」

オ「なんだ？」

カ「1000年前にも俺たちみたいな冒険者がデイニラスと戦ったんですよね」

オ「ああそうだ」

カ「でもなんで1000年前は封印で今回は討伐なんですか？」

オ「、、いや 1000年前も本来はデイニラス討伐目的として動いていた、、だがやつは追い込まれた時 この世の全てを破壊する程の力で全てを破壊しようとした だがその時はアイツも満身創痍だった、、だからあいつが、、じゅんが 最後の力を振り絞ってどうか封印まで持ち込んだんだ」

カ「なるほど、、」

カ（そうだったのか）

じゅ（ああ その封印の時に力を使い切って俺は死んだってことだ）

オ「面白いだが今回は討伐も封印もされん！お前らは俺が殺すからだ！」

オ「させるわけないだろ！」

デイニラスとオーバーは1体1で殴り合う

カ「すごい、、」

ア「カズマ 私達も」

カ「ああ、、」

ア「クリエイティブ ウォーター  
アーチャー」

カ「行くぞ」

ア「ええ

アカ 狙撃！」

デイ「！ふっ 小賢しい真似を」

オ「よそ見するな！」

カ「狙撃！狙撃！狙撃！」  
ア「狙撃！狙撃！」

オ「天界術式 発勁、、」

デイ「！」

オ「デエイやアアア！」

デイ「ぐうう、、」

オ「まだまだ、、！」

デイ「ふん！」

オ「がああ！」

デイニラスはオーバーの首元を掴み喉を締める

カ「オーバーさん！」

デイ「なかなかなものだったが、、俺には及ばない」  
ア「オバニー！」

デイ「まずは貴様からだ、、」

オ「くっ、、そ 息が、、」

デイ「たかが4人で俺に勝てると思うな！」

「はああ！」

デイ「がああ！」

オ「があは、、はあ、、はあ、、何が起きた」

カ「！なんだ 斬撃？」

ダ「どうやら 間に合ったようだな、、、」

め「！ダクネス！無事だったんですね」

ダ「ああ待たせてすまなかった」

デイ「次から次へと、、、こうも人数が多いと面倒だ、、、」

ア「あいつまたなにかするつもりよ」

俺たちはやつの攻撃を警戒する

デイ「OPEN The Hells」

そういうとやつはどこかへ沈んで行った

カ「！なんだ あいつどこに、、、  
のわあ！」

ア「きやあ！」

め「!カズマ!アクア!」

俺とアクアは突如出現した穴に引きずり込まれてしまった

め「そんな、、カズマ!アクア!」

ダ「くっそ!」

?? side

カ「いった、、ここは、、!めぐみん!ダクネス!オーバーさん!  
アクア!」

ア「カズマ!」

カ「アクア!よかった、、他のみんなは」

ア「わからない、、見た感じいいの」

デイ「ここがどこか教えてやろうか」

カ「!デイニラス、、」

デイ「ここは黄泉の国の奥深く

簡単に言えば地獄だ」

カ「地獄だと、、なぜ俺たちをここに」

デイ「あーも人数を増やされては面倒だから ですから まずはお前たちから始末してやる」

ア「なんですって、、」

デイ「あの青髪は女神だからな、、

マジック ブロック！」

ア「！がはあ！、、何をしたのよ！」

デイ「お前の使える回復魔法を封印させてもらった」

カ「なんだと！」

ア「だったら、、セイクリッド ブレイクスペル！、、え、、なんで、、なんで！解除されないのよ！」

デイ「お前ごときの能力で俺の呪いを解けるわけないだろう」

カ「くっそ、、」

デイ「さあまずは貴様らを潰して

あとの3人そして世界を破壊する！」

ダ「、、、どうする、、、どうすれば、、、」

オ「ダクネス落ち着け 今慌てたところで状況は変わらない、、、」  
ダ「ですが、、、」

め「、、、ダクネス オーバーさん一つだけ方法があるかもしれませんが  
ん」

オ「本当か！めぐみん」

ダ「、、、もしかしてだが 爆裂魔法を使うのか」

め「ええ、、、私が今できる最高の爆裂魔法を放ちます フレアさん  
曰く私が今の力で本気で打ったら空間に穴をあけられると言います」

オ「、、、そんな威力なのか」

め「ですので爆裂魔法で空間に穴を開けてカズマ達を救えるのでは  
ないかという」

ダ「、、、なるほど、、、だが 開けた空間にカズマ達がいるとは限ら  
ないぞ、、、」

オ「賭けだな、、、だが今はそれしか方法がない、、、やってくれるか  
めぐみん」

め「もちろんです、、、」

黄泉 s i d e

カ「はあ、、、はあ、、、」

ア「くっ、、、はあ、、、はあ」

デイ「随分とボロボロになったものだな」

カ「はあ、、、くっそ　ここでやられてたまるかよ、、、俺はまだ死ねない！」

デイ「、、、俺が1番人間で理解できないことがある、、、なぜ人間は命をかけて戦う　戦ってた自分が死んだらおしまいだと言うのに、、、」

カ「、、、ふっ　お前には一生分からないだろうよ、、、守るためなんだよ、、、」

デイ「ほう　それが命をかける理由か？」

カ「ああ　命かけて戦うんだよ

世界中とアイツらの笑顔を守るためならなあ！」

デイ「なるほど、、、だがそのお前の命は今ここで終わる」

デイ「グラビティダウン」

カ「ぐあ、、、くっそ体が重く、、、」

俺はやつの魔法で地面に押しさえつけられ出しよう

デ「これでしまいにしよう、、、クリムゾンボール！」



デイニラスはダウンしている俺に打ってきた  
カ「くっそ、、、」

ア「カズマ!!」

「、、、 殺人光線!!」

どこからか飛んできたビームがクリムゾンボールを貫通しデイニ  
ラスに打ち込まれた

デイ「ぐあは!、、、なんだ、、、」

カ「があ、、、はあ、、、あいつが怯んだからか重力が戻った、、、」

ア「カズマ!大丈夫!」

カ「ああ、、、」

そしてどこかからか聞きなれた

あの高笑いが聞こえた

カ「あのビーム、、、この声、、、まさか」

バニル「ふははははは！約2年近くぶりか？小僧？」

カ「バニル?!」

## この冒険者たちの戦いを

この冒険者達の戦いを

現状情報

ネバー リポカ 地上でナギトと交戦

めぐみん ダクネス デイニラス封印の間

アクア カズマ バニル デイニラス

黄泉空間

前回のあらすじ

カズマ達は封印が解かれこの世に降臨したデイニラスを倒すため  
全力で戦いを挑む 途中ダクネスの加入もあり  
有利を取ったと思っただが

アクア カズマが地獄へ飛ばされピンチに  
だがその窮地を救った人が、いや悪魔が今再び立ち上がる

黄泉 side

カ「バニル！なんでここに！！お前、、死んだんじや、、」

バ「確かに吾輩は死んだ、、2代目がな またここを見よ！ 今回  
は3代目バニルとしてだ 実はな あの時やられたあと復活するの  
をこの地獄にしたのだ ここでなら地形などの損害賠償もないから  
な！ふはははは！」

バニルの額には今までのⅡではなくⅢとなっていた

ア「でも なんでこんなところにいるのよ！」

バ「私も汝らと同じように修行をしていたのだ 奴に対抗するため  
にな、、」

やつはあの時の我では

対処は出来なさそうだったのでな 吾輩は見通す悪魔だこのような状況をよんでここにいたのだよ」

カ「じゃああの時復活しなかったのは残機が無くなったからじゃないか、ここに來てたってことか？こうなることを見越して」

バ「当然だ この吾輩の残機が2つだけだと思っていたのか？」

カ「なるほど、あの時俺と戦えって言ったのはここに來るための口実を作るためってことか？」

バ「それもあるが、単におの数年で力をつけた小僧の實力を見ても、みたくなつたからだな」

カ「はあ、せめてよ、言うことは言ってから行けよ…ウイズが落ち込んだんだからな」

デ「なんだ、悪魔ごときが我に挑むというのか 貴様は破滅願望がある悪魔で有名なバニルだな なぜ世界を守る側につく？」

バ「そうだな あの世界を破壊されては吾輩の望みを叶えなれなくなり困るのでな それに

ウイズに勝手に去ってしまったことを謝りに行きたいのでな」

カ「バニル、、、」

ア「あんた、、、」

カ「さあここから逆転 ぐっ、、、」

ア「カズマ！ダメよ結構な攻撃食らって 重症なんだから」

バ「さて、、、今の状況を見ると小僧は今のところ動けそうにないな、、、」

カ「くっ、、、ああ今俺は動けそうにない、、、だから

ア「クア バニル 頼む、、、今頼めるのは2人だけだ」

カズマはバニルとアクアに頼む  
2人は互いの目を見る

バ「ふむ、、、本来なら女神と手を組むなど死ぬほど嫌であるが、、、状況が状況だ 手を貸せ

水の女神 アクア」

ア「、、、仕方ないわね 今回だけよ

地獄の公爵 バニル」

デ「ほう、、、女神と悪魔が手を組むかくくつ、、、面白いものをみた！

だがたとえ組んだとしても我には勝てない」

カ「2人とも、、、」

ア「そんなのやってみないと分からないでしょ」

バ「では、、、行くぞ！」

ア「ええ！」

2人はデイニラスに同時に立ち向かう

デイニラスに向かい2人同時に拳を伸ばす

ア バ 「はアアア！」

デ「ちいゝゝゝ」

ア「クリエイティブウオーター！  
ソード！」

クリエイティブウオーターで剣を作りデイニラスに近接戦を仕掛ける

ア「はああああ！」

デ「ふっ！ 甘い！」

ア「今よバナル！」

バ「ふん！」

とバナルは指を鳴らすとバナル人形が地面から無数に上がりデイニラスにまとわりつき爆発する

デ「ちいゝゝ、 即席なコンビの割にはなかなかいいコンビネーションだな」

バ「吾輩らにとってその言葉は煽っていると解釈してしまうな」

ア「ただバナルが私に合わせているだけよ！ ゴットブロー！」

デ「ちいゝゝゝ」

デイニラスがアクアのゴットブローを受け止める

バ「纏え！ランドアーマー！」

バナルは土を腕に纏いグローブのようにした

バ「はああああ！」

バナルの拳でデイニラスは後ろへ引く

デ「くそゝゝ、 鬱陶しいゝゝゝ」

ア「行くわよ」

バ「ふん　はあ！」

デイ「舐めるなあ！闇魔！

デイストライク　ガイア！」

バ「殺人光線！」

放たれた斬撃を光線で相殺させる

ア「ゴツドブロー！」

デイ「ぐうう、、」

アクアのゴツトブローを腕でクロスし防御する

バ「行くぞ！バニル人形！」

ア「ふっ」

デイ「同じ技を2度食らうか！」

バ「ロツクオン、、乱発　バニル式殺人光線！」

バニルの指先から光線が無数にはなたれデイニラスは怯む

デイ「があは！、、くっそ、、」

バ「ゆけ！」

怯んだ隙を見てバニル人形がデイニラスにまとわりつく

デイ「、、がああ！」

だがデイニラスは人形を振り払う

ア「セイクリッド　エクソシズム！」

デイ「！ふっ」



バ「破壊光線！」

デイ「があ！、、、ちい」

カ「追い詰めてる、、、」

デイ「舐めるなあ！クリームゾン  
ヘル ボール！」

バ「！がはあ！」

ア「きやあ！」

カ「！アクア！バニル！」

バ「くう、、、」

ア「さすがに、、、あいつもこれではひるまないわね、、、ねえバニル」  
バ「なんだ、、、なるほど、、、」

デイ「どうした！まさかこれでおしまいか！」

カ「2人とも、、、！」

その時土煙の中から

1人だけ歩いてきた

デイ「1人、、、はっ どちらかはくたばったということか」

「誰がくたばるですって！」

「そうだとも 我々は誰一人やられてはいない」

デイ「！なんだ、、、1人のはずなのに、、、どこかに隠れているのか」

カ「、、、！まさか」

土煙から出てきたのは

アクアだった、、だがしかし

バナルの仮面をつけてだった

カ「、、なるほどな」

バ「この憑依も貴様相手だと3分が限度だ」

ア「こつちもあんたの憑依は体に負担かかるの！」

カ「あいつら、、合体したのか、、」

デイ「、、まさかそこまでするとは、、思わなかったぞ、、ふっふふ、、はははは！面白い！全力でかかってくるがいい！」

デイニラスはアクア達の方へと突っ込んでいく

ア「こつちこそフルパワーで行くわよ！バナル！」

バ「はあ！」

アクアに憑依したバナルはデイニラスの攻撃を流し 反撃の蹴りを入れる

デイ「があ！」

ア「クリエイティブ ウォーター  
ソード！あんた 私みたいな  
魔法を使う系よりダクネスみたいな剣術の方がいいでしょ！」  
バ「気が利くではないか ではゆくぞ」

デイ「くう、、」

バ「はあああああ！」

デイ「！閻魔！」

デイニラスの閻魔とアクアの剣がぶつかり合う

ア

「はあああああああああああああああああああああああああああああ  
あ！」

バ

デイ「ぐうっ、、 がああ、、」

ア バ 「はあああああ！」

デイ「があ！」

デイニラスは押し負け壁に吹き飛ばされる

ア「行くわよバニル！」

アクアはバニルの仮面を剥がし

バニルは地面から新しい素体を作り体を作った

バ「合わせろアクア！」

ア「セイクリッド、、、」

バ「フルパワー バニル式、、、」

ア「ハインスエクソシズムーーーーー！」

バ「殺人光線ーーーーー！」

デイ「！」

隙をつかれたデイニラスは二つの攻撃をモロに受けた

カ「どうなった、、、」

バ「、、、！何やらどこかから強い魔力を感じる、、、」

ア「はあ？それってどういう」

その時

カ「のわあ！、、、なんだ！この揺れ」

すると

ア「見て！空間にヒビが！」

カ「！」

そしてそのヒビは割れ

その先には

め「アクア！カズマ！」

カ「めぐみん！ なんで！」

め「私の爆裂魔法で空間に穴を開けたんです！急いでください恐らくすぐ穴がふさがってしまいますから、、、」

つて！バニル!?!」

ダ「生きていたのか!?!」

デイ「くっ、、、逃がすか！」

ア「!あいつまだ」

バ「はあ!」

デイニラスに光線を打ち注意を引かせる

カ「バニル!」

バ「小僧、、、早く行くがいい　ここは吾輩が足止めする」

カ「はあ!?!何言ってるんだよ」

バ「今の状態ではまだやつに勝てない!

吾輩が時間を稼いでる間に体力を回復しろ!」

カ「バニル、、、」

ア「行くわよ　カズマ　、、、死んだら承知しないわよ、、、」

カズマ達が空間の穴から出た瞬間穴は完全にふさがった

バ「、、、ふつ　あの忌々しい女神が吾輩に死ぬなと言うか、、、ふは  
ははは!

やはりこの世界は退屈しないな!」

デイ「貴様だけ残って俺を止められると思っっているのか?」

バ「いや貴様を倒すのは吾輩では無い　だが吾輩は貴様を倒す気で  
戦う」

カズマ side

カ「はあ、、、はあ、、、」

め「大丈夫ですか！カズマ！アクア！」

ア「ええ なんとかね」

カ「ああ、、、だがやつに回復魔法を封印されたのは厄介だ、、、俺も使えるには使えるがアクア程の回復力はない」

ア「それでもないよりはマシよ ママから貰ったポーションもあるから」

カ「ああ ヒール ヒール」

め「まさかバニルが生きていたとは」

カ「ああ 俺もびつくりだよ 2年間あの場所で力をつけてたんだと」

ダ「なるほど、、、」

オ「さて、、、ここからどうするかだ」

カ「あいつを倒すにはもう、一気に決めるしか他ないかもしれないです」

ア「一気について言っても」

カ「作戦はこうだもしディニラスがこちらに来ることがあるなら出てきた瞬間 に叩く」

カ「俺とアクアは覚醒で一気に決める めぐみん ダクネス オーバーさんも自分ができる最大威力の攻撃を放ってくれ、、、チャンスは1回だ」

すると

ア「！また揺れ、、、」



カ「来たか、、、!!、、、おいアクア」

ア「、、、ええ」

オ「、、、やはりか」

地上side

リ「はあ！」

リポカは魔法を放ちアンデット集団を片ずけるが

奥から次々にアンデット デーモンが  
わいてくる

リ「、、、はあ、、、はあ、、、まだ出てくるの?! しま、、、魔力が、、、」

リミルは魔力切れで膝を着く

ナ「あつはは！ お前大したこと無かったなー！ もうお前とは戦  
い飽きた さてお前を殺してからあの街を壊し世界崩壊への礎とな  
るのだ！」

リポカがダウンしているのを見て

アンデット達が一斉に襲いに来る

リ「！」

カズマside

カ「この感じ、、、まさか 嘘だろ、、、」

ア「ええ、、、」

覚醒よ、、、」

そしてヒビが割れ中からやつが出てくる

デ「ふふふ、、、はっははは！ 覚醒を使ったのは何千年ぶりだ！  
この姿になった我と戦うということはお前らは死ぬと同義だ！」

ダ「なんだㄗ がああ?！」

デイニラスはダクネスに素早く近ずき

攻撃をくらし吹き飛ばされる

デ「言っただろう勝てないと」

め「ダクネス!! ?! プリズンシールド!」

めぐみんは殺気を感じすぐにシールドをはったが

デ「無駄だ」

デイニラスの攻撃によりシールドが割れる

め「?!そんな」

デ「死ね」

ギイン

め「くっっ、!」

この攻撃はめぐみんには届かなかった  
それは

カ「っ、おい」

ア「私たちの仲間に」

カ ア (覚醒) 「何してんだ(のよ)」

カズマ達がああの時のような姿になって私の前に立って攻撃を防いでいた

そして あと時よりもはるかに強くなっているのを感じた

め 「カズマ、、アクア」

ア 「めぐみん、、これをダクネスに飲ませてくれないかしら」

アクアはめぐみんに回復ポーションを渡す

め 「でもそうしたらアクアの分が」

ア 「安心しなさい まだストックはあるの だから使ってちょうだい」

デ 「話は終わったか!!」

デ이니ラスは俺たちふたりに攻撃を仕掛けに来た

カ 「はあ!」

ア 「はあ!」

俺たちふたりはその攻撃を防ぐ

ア カ 「邪魔するな!」

2人でデ이니ラスを払う

デ 「ほう お前たちも覚醒か だが片方はまだ完全な覚醒ではない、、いやできないのか 人間の魔力が入っているせいか中途半端な覚醒というわけか、、 だがだとしてもその力、、面白い!お前はやつにそっくりだ!」

ア 「行くわよカズマ」

カ 「ああ、、めぐみん ダクネスを頼んだぞ」

め 「はい 2人も、、頼みます」

めぐみんはダクネスの方へ走り出す

カ「おい、、、バニルはどうしたんだよ」

デイ「ああ ああの悪魔かやつはなかなか手強かったぞ、、、だが覚  
醒の我の前には及ばなかった 今頃地獄で野垂れ死んでいるだろう  
な」

ア「そんな、、、」

俺は魔力感知でヒビの中の地獄を調べた、、、

すると徐々に徐々にバニルと思われる魔力が、、、消えていつていた

カ「、、、貴様アアア！」

デイ「安心しろ、、、貴様もあいつのところへ送ってやるさ」

ア「カズマ、、、オバニー

行きましたよう」

カ「ああ 最初っから全力で行く！」

ネバー！ゴットグローブ！」

ア「クリエイティブ ウォーター

ステッキ、、、」

オ「ああ 覚醒！」

デイ「さあ 本当の最後の戦いを始めようか！」

地上side

ネ「はあああああ！」

ナ「ふっ はあ！」

ネ「ぐっ、、ちい」

ナ「どうしたどうした！お前ってそんなもんなのか？」

ネ「ぐっ、、まだまだ！」

ナ「、、まあ俺の時間稼ぎをすることなどもうどうでもいい お前も感じるだろう この増大な魔力を」

ネ「、、ああ」

ナ「恐らくディニラス様は覚醒をしたのです。、、そうなってしまつてはあの人間たちはもはや虫けら同然、、そしてこの世界もディニラス様によって破壊されるのです！あつははは！」

ネ「、、はっ笑えねえ話だな」

ナ「、、なんですって？」

ネ「この世には始まりがあり終わりがあるそれは決して揺るがない  
事実

変えられない運命ではある、、だがその終わりは今じゃない 狂つた運命は正しい方へと直さなくてはならない！

それに俺は、、あいつらを信じている

覚醒！ネバー！  
ぐうう、、、くっ

ナ「、、、ほう」

ネ「俺は無限の神　ネバーだ！」

カズマ s i d e

カ「はああ！」

デイ「ふっ　へやあ！」

カ「があ！、、、くっ」

ア「はあああああ！」

デイ「クリムゾンボール」

ア「！グツググ、、、きやあ！」

カ「アクア！」

デイ「よそ見している場合か！」

デイニラスはカズマの頭をつかみ地面に叩きつける

カ「がはあ！」

デイ「はあ！」





ア「2人とも私が技を出すからそれに合わせてカズマも放つてちよ  
うだい」

カ「ああ わかった」

オ「わかった、」

デイ「、、、なんだ？」

ア「、、、ゴットグロス、、、」

その時アクアのつけている羽衣が巨大化し

まるで1羽の鶴のようになる

ア「行くわよ！」

カ「ああ！」

オ「おう！」

ア「ゴットグロス、、、アウイスブースト！」

カ「フォース、、、バスター！」

オ「ゴットレクイエム！」

カ

ア

オ



オ「まずい、、、カズマ！アクア！」

カ「はい！」

アクアと俺 オーバーさんは急いでディニラスのそばを離れる

ディ「スラッシャー レイン カーニバル！」

その瞬間空から無数の鎌のようなものが降り注がれる

め「プリズンシールド！」

カズマ！アクア！オーバーさん早くこつちへ！」

カ「行くぞアクア！」

ア「ええ」

俺たちは落ちてくる鎌を避けめぐみんのいる方へ向かう

その時だ

ア「!きやあ」

アクアは転んでしまった

カ「!アクア」

その時

アクア飲ま上から鎌が降ってきていた

カ「!アクア!急げ!逃げろ!」

ア「!足が、、、」

カ「アクアあああああああああああああああああああああああ  
あ!!」

俺はアクアのそこへ向かい 大の字でアクアの盾になった

グサツ、、

体に刃物が刺さる鈍い音が耳に聞こえてきた

ア「カズマ、、え？でも刺さってないじゃあ、、なんで、、」

カ「、、？どうして、、!!」

め「そんな、、」

そう鎌は俺には刺さらなかった

なぜなら

「がはあ、、、、、、」

身代わりになっていたからだ

「大丈夫か、」

カズマ、アクア

それは

ア「そんな、どうして

オバーニー！」

オバーさんだった

デイ「、、、俺とされたことが、、、この技で1人だけしか殺せなかったとは、、、やはり鈍っているのか」

ア「そんな、、、なんで、、、なんで！」

オ「、、、があ、、、約束、、、してたん、、、だ お前、、、のことは、、、死んでも、、、守るってな、、、お前の、、、母親、、、からな」

オバーに刺さった鎌から徐々に体が崩壊しかけてした

ア「そんな、、、！めぐみん！ポーション！早くポーションを！」

オ「、、、いいんだ、、、もう俺は、、、もう、、、」

ア「そんな いや！そんなの嫌！」

もう嫌なの！！目の前で大切な仲間が死んでいくのは、、、」

オ「、、、ごめん、、、な 、アク、、、ア

で、、、も 最後に、、、お前らを、、、まも、、、れて よかつ、、、た」

オバーはその場で目を閉じた

オーバーの体はもう半壊しており

あと数分で完全に崩壊してしまう

ア「あ、、、」

め「そんな、、、」

カ「オーバーさんまで、、、」

まただ、、、また目の前で、、、仲間が

ア「、、、」

デイ「やつももう死んだろう、、、次はお前たちの番だな」

デイニラスはアクアへ手をかまえ魔法を放とうとする



その時だった、、地面が、、いやこの空間自体が揺れ始めた

カ「!、、なんだよ、、この揺れ、、」

め「!カズマ あれを」

めぐみんが指を指した先には

ア「よくも、、オバニーを、、大切な仲間を、、よくも、、」

アクアの周りの魔力が桁外れのように纏う

カ「!、、これは」

ア「よくも、、」

プツッ

よくも  
!!!!!!  
」

アクアの魔力が爆発的に大きくなる

デイ「!!ほう、、、まだそんな力が」

カ「あれは、、、」

め「カズマ! アクアに何が起こってるんです!」

ダ「著しく力が大きくなっている、、、だが、、、」

め「まるでアクアのようにアクアじゃないような、、、あれって覚醒じゃないんですか?!」

カ「いや あれは覚醒だ、、、でも普通のとは違う、、、」

俺はあの時オーバーさんに言われた言葉を思い出す

オ「この覚醒はネバーより扱いが難しい 1歩力の力量や魔力の流しすぎで自我を失って暴走をおこすところがある

それほどこの技は繊細なんだ」

それが本当なら、、、恐らく、、、あれは

暴走だ」



ア「がああああああああ！」

デイ「この、、女神ごときが！」

ア「あああああああああ！」

デイ「ぐう、、怒りで我を忘れたか、、哀れな！」

デイニラスは魔法を放つが

ア「がああああああああ！」

その魔法を腕で流しデイニラスに近づく

デイ「ちい 忌々しい、、」

め「あいつを、、あんなに、、」

ダ「だがあのままではアクアの体がもたなくなるぞ！」

カ「分かってる！、、でもどうすれば、、」

ア「あああああああああ！」

カ「アクア！聞こえてるか！アクア！」

ア「ああああああああああああああああああああああ！」

ダ「、、ダメだ まるで聞こえてない」

カ「、、どうする、、どうする俺！、、」

ア「あああああ、、」

アクアは魔法陣をいくつも発動させる

デイ「！なんだあの量の魔法陣は」

カ「まずい範囲が俺たちの方まで

ダクネス めぐみん 逃げろ！」

ア「、、、」

アクアはすつと腕をあげ

デイニラス目掛け腕を振り下ろす

と同時に無数の魔法がデイニラスへと  
集中砲火される

め「プリズンシールド！」

デ「がああああああ！」

め「グツグツ、、、 やばいです 威力が桁違いです！」

そして魔法陣からの攻撃が少しずつ弱まる

め「、、、 はあ、、、 はあ、、、 大丈夫ですか！2人とも」



ドワー「これを持っていけ きつと戦いに役に立つぞ」

俺は腕にはめていたブレスレットを触る

カ「、、このブレスレット、、ほんとに役に立つのかドワーさん、、いや今はそんなこと言ってる場合じゃない

一か八か、これにかけるしかない！」

俺は覚醒状態でアクアの元に向かった

め「アクア、、カズマ、、」

ダ「今はカズマを信じよう、、」

ダクネスはめぐみんを落ち着かせる

カ「アクア！ 落ち着け！」

俺はアクアの体に抱きつき押さえつけようとする

ア「あああああああああ！」

アクアは押さえつける俺を払うように暴れる

カ「待ってる、、今俺が助けてやる」

俺は片方のブレスレットを外す

頼むぜ、、これが唯一の希望だ

カ「アクア！ 今から助ける！」



俺はブレスレットをアクアにつけようとするが

ア「あああああああ！」

くっそ暴れてるから付けづらい！

こうなったら

カ「ドレインタッチ！」

魔力の暴走っていうなら暴走を抑えられるまで  
俺が魔力を吸い  
取ってやる！

カ「はアアアアアアアアアア！」

ア「あああああああ、ああああ！」

カ「ちよつとは落ち着けー！」

駄女神「……………」

俺はアクアの手首にブレスレットをつける

その瞬間

目の前が真っ白になった

?? s i d e

目を開けると白い空間にたっていた

カ「、、、ここは どこだ、、、」

、、、いやこの感じどこかで感じたことがある、、、

カ「、、、まさか ここって

精神世界、、、」

俺とじゅんがいた所あの精神世界にそっくりだ、、、だが

カ「、、、少し違う、、、じゃあ考えられるのは、、、まさか、、、」

アクアの精神世界、、、

カ「、、、ならここにアクアが居ないのは、、、なんでだ」

見渡す限り　アクアの姿はなかった

すると突如空間が真っ暗になる

カ「！なんだ」

そしてその空間に無数のシャボン玉のような物が浮かぶ　そして  
その中からあるものが見えてくる

カ「、、、これって

俺たち、、、か」

そのシャボン玉の多くからは俺たちの今までの生活風景がアクア  
目線で映し出されていた

カ「なんでシャボン玉に、、、」

じゅ（俺が説明するよ

この人の記憶ってのはあんな感じでシャボン玉になって溜まっ  
てるんだ

下手に触るなよ　そのシャボン玉が消えたらその場面の記憶が消  
えてしまうから）

カ「お おう」

じゅ（精神世界は本人の意思がこの場がない時は今までの記憶がここに集められる）

カ「そうなのか？」

じゅ（ああ 恐らくあの子は今覚醒の暴走もあって自分の自我が不安定な状態だ、、、下手すりやこの精神世界が崩壊してあの子自身が壊れてしまう）

カ「そんな、、、何とかならないのか」

じゅ（おそらくはあのアクアって子を探して説得して精神を安定させるしか方法はない、、、それができるのは今はお前だけだ）

カ「、、、」

そして俺はアクアを探すことにした

カ「やつぱ ここはアクアの精神空間ってことで間違いは無さそうだ、、、」

俺はアクアの精神世界と思われる場所を歩く  
するとその空間の端にもシャボン玉が見えた

カ「あっちも見てみるか、、、」

俺はその端の方に向かった

そして気づいたことがある

その端の方につれ行くと

シャボン玉に写っている映像が、、、

カ「これって、、俺が冬將軍に殺された時の、、」

そう端に行くにつれ 恐らくアクアが今まで見てきた 最悪な記憶が溜まって行っていた

他のシャボン玉にも

俺が裁判をかけられた時

アクアがセレナの件で言われていた時

魔王を倒した後俺の体が魂しか残ってなかった時が写っている

そして

本来の5年前のディニラスによって破壊された時

エスパードさんが死んだ時

そしてオーバーさんがやられた時が写し出されていた

そしてそのシャボン玉の奥に

ア「ひぐ、、うう、、」

アクアがいた

カ「、、、アクア」

ア「、、、カズマ、、、どうしてここに」

カ「、、、さあな 俺もいまいちわかつてねえ でもやるべき事は分かる お前を救うってことが俺のやるべき事だ」

ア「、、、いいの、、、」

カ「は？」

ア「私は、、、もういいの」

カ「お前、、、何言ってる」

ア「カズマが私を助けてくれるってことは嬉しいわよ、、、でもいいの」

カ「いいのって、、、」

ア「私は、、、やっぱりダメな女神なのよ、、、だから、私のせいで、、、私のせいでオバニーが、、、」

カ「違う あれはアクアのせいなんかじゃ」

ア「いいえ ! 私のせいよ! いつも私のせいでみんながカズマが危険な事に巻き込まれて! 危険な目に合わせて、、、そのせいでオバニーまで、、、 私なんていない方がいいのよ!! 、、、私がいなければカズマだって今まで死なずに済んだのよ! 私、、、私が!!」

カ「違う!!」

ア「!!、、、」

カ「、、、それは違うだろ、、、確かにお前には迷惑をかけられた時もあった、、、けどな お前が俺にくれたことはもつとたくさんあるんだよ お前がいたから今の俺がいるんだよ お前と会わなかったらめぐみんやダクネス 他のみんなと会うこともなかった!全部お前がいたからなんだよアクア! 前にも言ったよなこの世界に来て後悔なんてしてないって!俺は!お前がいなきやこの世界を生きていく意味が無いんだよ!それに俺はお前の相棒だ! 相棒をほっとけるわけないだろ」

ア「、、、」

カ「こうなった俺は無理やりにもお前を救ってやるからな!」

ア「でも、、、私なんか相棒なんて」

カ「お前だからいいんだ」

ア「毎回借金作ってきたり 余計なこととして迷惑かける、、、私なんかで、、、」

カ「ああ、、、その分退屈しないんだよ お前達と過ごすとな」

ア「カズマ、、、ほんとに?」

カ「ああだからよ 戻ってこいアクア みんな 待ってるんだぜ またお前を追いかけるのは、、、こりこりだ」

ア「ねえ、、、カズマ?」

カ「あ?どうした?」

ア「これからも、、、一緒にいてよっ」

カ「！、、、はあ、、、」

しょうがねえなー！」

ア「、、、ふふ」

カ「なんだよ 笑いやがって、、、」

ア「、、、ありがとね！カズマ！」

！、、、いつぶりだろうか



アクアの笑顔で

俺の心がドキッとしたのは、

ア「、、、ところで」

カ「？」

ア「、、、なんかこのブレスレット光ってるんですけど」

カ「は？ってほんとだ、、、おいこれやばいんじゃないのか？」

すると

ブレスレット(マリオクシツ　ゴウカク　マリオクリヨウ　ゴウカ

ク

コレヨリガツタイヲオコナイマス

準備はイイデスカ？)

カ ア「はあ!？」

ア「ちよ!何よ合体って私聞いてないんですけど」

カ「おい!これマジで合体するの?マジで言ってるの!」

ブ「ア—ユーレディー?」

ア カ「ダメです!」

ブ「合体開始!」

ア カ「なっ!？」

そして俺たちは光に包まれた

王都 s i d e

ネ「くつそ、、、数が多すぎる、、、くつそ 魔力が、、、」

ネバーは長時間の戦闘及び魔力が少なくなっており怪我による疲労で膝を着く

ナ「おいおいもう終わりかよ

それじゃ、、、死ね！」

ナギトがネバーに向け魔法を放つ

? 「エクステリオン!!」

どこからか斬撃が飛んでくるその斬撃で魔法を切り裂き多数のアンデットが消失させらナギトに攻撃する

ナ「ぐはあ!、、、ちい誰だ！」

ネ「!! これは、、、斬撃、、、どこから?」

? 「大丈夫ですか?」

ネ「! あなたは、、、」

ネバーは後ろから聞こえた声に振り向く

アイリス「私はベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリスです  
す

この王都の王女をしている者です」

ネ「王女、、、だが何故ここに?」

アイリス「実はお兄さ、、、カズマ様から聞いたのです。この世界が  
危機にひんしている」と この国の王女としてこの国をこの世界を  
守る義務がありますので 助太刀に参りました」

ネ「そうなのか、、、俺はネバーだ」

クレア「アイリス様 騎士団も到着したと連絡がありました カズ

マ様から先程もし地上でなにか異変を感じたら援護してくれと頼まれました」

ネ「そういや、あいつ戦いに行く前にどっかによると言っておったが

、そういうことだったのか」

ク「そしてこちらを」

ネ「これは？」

ク「これはマナタイトです この水晶の中に魔力が入っており 魔力を肩代わりしてくれます」

クレアはネバーに約100個近くのマナタイトを渡した

ネ「それをこんなにも、いいのか？」

ク「それで世界を救えるのなら安いものです」

アイリス「ミツルギ団長 騎士団の皆様この国を守るため 全力でネバー様の援護を！」

ミツルギ「了解いたしました 皆の者援護にまわれ！」

騎士団「了解しました アイリス様！ 団長！」

アクセル side

「ライトオブセイバー！」

「おらよ！」

「カーस्टドクリスタルプリズン！」

リポカの後ろから

光の魔法

氷の魔法

槍が飛んでくる

リ「!! あなた達は」

ゆ「わ 我が名はゆんゆん アークウィザードにして紅魔族の族長であるもの！」

ダスト「ああ こいつのこういうのは、、、あれだ紅魔族ってこんな  
ん なんだよ、、、俺はダスト カズマからあなたの

援護をしてくれて言われてな

加戦しにきた」

ゆ「し しようがないじゃないですか!!族長として せめて名乗り  
はできた方がいいかと思つて、、、私だつて頑張つてるんですよ！」

ウ「ゆんゆんさん 喧嘩は程々に」

ダ「わかつたわかつたから」

すると後ろの方から次々と冒険者が出てくる

冒険者1 「カズマ達だけにかっこいいことはさせねーからな！」

冒険者2 「おう 俺たちでこの世界を守るんだ!!」

リ「、、、なるほど あの時 時間をくれと言っていたことはそういうことだったのね、、、 皆さん手伝って貰えますか」

一同「ああ！」

リ「分かりました では、、、 セイクリッド オーラ！」

リポカはウイズ以外の冒険者達に支援魔法をかける

ゆ「これは、、、力が溢れてくる」

リ「このオーラはかかった者に力を付与してくれるの そしてどんな攻撃魔法にも神聖属性が付与されます 皆さん行きますよ！」

一同「おお！」

ナ「ぎい！人間なんぞが集まろうと俺に勝てるわけないんだよ！」

ウ「あの、、、」

ウイズがリポカを呼び止める

リ「ん？ああ あなたリツチーでしょ？」

あの支援魔法かかったらあなたには効いてしまうからかけないでおいたわよ」

ウ「ありがとうございます」

、、、あの、、、あなたもアクア様と同じ女神様ですよ なぜ私を

倒そうとしないのですか？」

ウ「、、、普段ならアンデッドは浄化したい所だけど 状況が状況だからよ、、、 例えリッチーでも今は協力してあげる それにらあんだ 良い人そうだから」

ウ「、、、わかりました では行きましょう」

めぐみん side

め「カズマ アクア、、、」

中に浮いた光は未だなお光っている

め「！ダクネス！光が」

そしてその光が弱まった時光の中に誰かがいるのを感じる

ダ「！誰かいるぞ、、、」

霧の中からうつすら、、、 青い髪が見えてくる

ダ「あの青い髪は、、、 アクアか、、、」



それと同時にその霧の中緑色の目が輝くのが見えた

め「いえ、、、でも髪が短いですし、、、  
目が緑で、、、誰なんです、、、」

謎の人物はオーバーのもとに向かう

? 「ヒール」

謎の人物はオーバーに回復魔法をかけた

すると

崩壊しかけた体が修復され 傷も完治した

オ「う うう、、、 ここは、、、！傷が 完治してる！ 体も、、、治つ  
てる、、、」

? 「これでもう安心だ（ね）」

一同がその謎の人物に注目する

め「あの、、、あなたは誰なんですか  
もしかしてアクアなんですかそれともカズマなんですか？」

? 「ん? まあー どっちでもかな」

め「どっちでもかなって、、、」

ダ「もしや 先程の光によって2人が合体してしまったのか」

め「ええ!」

デイ「ぐう、、、」

ダ「!」

デイ「ちい、、、 なんだ、、、」

め「!あいつまだ、、、」

デイ「、、、 あ? 誰だお前は」

?? 「俺はアクアでもカズマでもない、お前を倒す者だ！」

デ「その姿はなんだ、まだ秘策があったとでも言うのか」

?「、、とは言っても、、名前がないと呼びづらいか、、アクアとカズマだから、、」

め「そんな呑気なこと言ってる場合なんですか！」

?「そうは言っても呼び名があった方がいいだろ、、うん、、よし！決めた

「アズマだ」

め「!、、、アズマ、、、かつこいいじやないですか!」  
ダ「そ そうなのか?、、、」  
デ「おい、、、いつまで茶番をするつもりだ!」

アズマ (アクア)

「うるさいわねー」

ダ「おお、、、合体していても声は別で出せるんだな」

アズマ (カズマ)

「ああ片側に意識を任せたら別でも話せる」

め「き 器用ですね、、、」

デイ「さつきはよくもやってくれたな、、、そんなふぎけた姿なんぞ

俺が破壊してやる!」

アズマ (カズマ)「ああ?こっちは大まじめなんだけどなー さ

てと、、、行くぞ

相棒!」

挿入歌 Fantastical Dreamer

アズマ（アクア）「!!、、、

ええ！」

地上 side

ウ「ボトムレススワンプ!!」

ダ「ゆんゆん！ 今だ」

ゆ「めぐみんが世界を守るために戦ってるんですもの 私だって！

セイクリッドライトオブセイバー！」

毒の沼にハマったアンデットに  
ゆんゆんの魔法を放った直後ダストが槍を持ち突き進む  
そしてアンデット集団を一掃し

ダ「はあああああああああ！」

槍でアンデットを倒す

ダ「カズマ達が戻ってきたら奢ってもらおうからな！」

リーン「がめついわね、、、あんた、、、」

ダ「！リーン危ねえ！」

リ「え？きや!？」

リポカ「アーンアンデット！」

リーン「危なかった、、、ありがとうございます」

リ「いいのよ さて蹴りをつけましょう」

ナ「くそ、、、なぜだ!! たかが人間にリッチーだ なのに、、、なぜ  
！」

ダ「へっ！ 人間様を舐めるんじゃねえよ！行くぞ！皆」

ゆ「ええ」

ウ「はい」

ゆ「セイクリッド インフェルノ！」

ウ「カースドクリスタルプリズン！」

ダ「おるうああああああああ！」

ナ「ぐああああああああ！」

ナギトは攻撃をくらい爆発した

ダ「あとは頼んだぜ、、、カズマ！」

王都 s i d e

ネ「はあああああ！ 今だ」

アイリス「セイクリッド エクスプロード!!」

ミツルギ「はあああああああああああ！」

アイリス ミツルギが一齐に斬撃を飛ばしアンデット集団を一掃する

ネ「すごいな、、、あの小さな体にどれほどの魔力を、、、」

アイリス「このぐらいどうってことないですよ」

ミツルギ「さすがはアイリス様です」

ナ「ぎい 貴様ら、、、もう容赦はしないぞ、、、あの国諸共塵になれー  
！」

ネ「ゆくぞ お二人方！」

ア「はい！」

ミ「はい！」

ネ「ゴッドー、、、」

ア「セイクリッド、、、」

ミ「魔剣グラム、、、奥義」

ネ「レクイエムーーーーー！」

ア「エクステリオンーーーーー！」

ミ「スラツシユウエーブーーーーー！」

3つの魔法と斬撃がナギトへ叩き込まれる

ナ「がああああああああー！」

ミ「やりましたね、、アイリス様」

ア「ええ、、あとは頼みます お兄様」

天界 s i d e

フ「マジックシャワーカーニバル」

リ「タイム リバック！」

2人の魔法により 何百体いた教徒がいなくなる

フ「皆さん、、あとは頼みます」

リ「、、」

アズマ s i d e



アズマ「行くぞ！（わよ！）」

デ「はん そんな合体などしたところでこの俺にかなうはず  
グツフ?!、、な  
なに?!」

アズマがデイニラスに近づき腹パンを喰らわす  
アズマ「ごちやごちやうるさいんだよ（のよ！） 御託はいい 俺た  
ちは今からお前をぶっ倒す！それだけだ（だけよ）！」

デ「グウウ 貴様ー！ー！！」  
めぐみん達はその速さに驚いていた  
め「なんです?! あの速さ！ 目で追えませんでしたよ！」

ダ「ああ、、 恐らく私のエスフェダンファン並に速い、、、、」

オ「なんて奴だ、、」

アズマ「まだまだいくぞ!!」

アズマがデイニラスに近づく

デ「グウウ 舐めるなー！ー！ー！！」

アズマ「ふっ！ はああ！」

デイニラスの攻撃をさけ蹴りのカウンターが入る

デ「グフア！　、、、これならどうだ！」  
デ이니ラスが魔力弾を連発しアズマに撃つ

アズマ「ふっ！　！追尾してくるのか　なら！　全て　相殺してやるよ！はアアア！」

アズマも魔力弾を撃ち相殺する

デ「なに?!」

め「すごいです、、、」

ダ「ああ、、、」

デ「この、、、下等な人間どもが!!」

デ이니ラスは魔力の輪をつくりアズマを拘束する

アズマ「のわ！　くっ　この?!」

デ「どうだ　これで身動きが取れない！　今この魔法で終わらしてやる

ブレイクボール！」

デ이니ラスはブレイクボールをアズマ目掛けて投げつける

アズマ「ちっ　この　、、、しっこいんだよ!!　おりゃ！」

アズマは魔力の拘束を力づくで解き

ブレイクボールを蹴り返す

デ「グはああ?!ー」

デ이니ラス目掛け飛んだブレイクボールはデ이니ラスに直撃し吹き飛ばされる

アズマ「、、、さすがに俺たちだけではほんのちよつときつか　、、、よし」

アズマはめぐみんやダクネスの元へテレポートをした

アズマ「おい！ めぐみん ダクネス！ まだ動けるか？特にめぐみんまだ爆裂魔法撃てるか！」

め「ええ あと1発いけます！」

ダ「私もまだ動けるぞ なにか策があるのか」

アズマ「ああお前ら 手伝ってくれるか？」

め「当たり前ですよ」

ダ「ああ 当たり前だ」

アズマはめぐみん達に作戦を伝える

アズマ「よし、、、 じゃあ いくぞー！」

ダめ 「ええ！（ああ！）」

アズマ「いくぞダクネス！めぐみんは準備を頼む」

ダ「任せろ！」

め「任せれました！」

デ「ガア、、、 今更何を、、、」

アズマは魔装剣 Z 水龍剣？を

ダクネスは 雷鳴剣黄雷 を持ち攻撃を仕掛けめぐみんが詠唱を始める

アズマ ダクネス 「はああああああああ!!!」

デイ「くう！」

アズマ「ダクネス！」

ダ「ああ！」

め「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまおう 覚醒のときたれり無謬の境界に落ちし理 無限の歪みとなりて現出せよ」

デ「ちい 小賢しい！」

アズマ「いくぞ  
雷鳴剣 秘伝 奥義!!  
トルエノ・デル・ソル!!

そして

魔装剣 水龍剣 双剣!  
オーロラ スラツシャー!!  
はああああああああ!!

ダ「雷鳴剣 秘伝 最終奥義!!  
トルエノ・エスパード・エスファダンファン!!  
はああああああああ!!

ジャキン!!  
ジャキン  
ギイン

3つの技を繰り出し デイニラスを崖に叩きつける

デ「ぐはあ! 、、、ギイ この程度の、、、攻撃など!!」  
め「踊れ踊れ踊れ 我が力に望むは崩壊なり並ぶものなき崩壊なり  
万象等しく灰燼に帰し深淵より来たれ これが人類最後の攻撃手段  
これこそが究極最強の攻撃魔法!!」

アズマ「ダクネス飛ぶぞ」  
ダ「ああ」

アズマはダクネスの手をもちテレポートを使いめぐみんの元へ飛ぶ

デ「ぐう、、、貴様ら!! ?! なんだ この結界は!」

アズマ「いけ!めぐみん!ぶちかませ!」

め「最っ高のタイミングですよ！アズマ！　　穿て！　プリズン  
ファイナルエクスプロージョン!!!」

ドゴゴゴゴーーーーー

めぐみんの爆裂魔法はデイニラスに直撃した

デ「ぐはああああああああああ!!」

、、、こんなヤツらに、、、　　まだまだ!!　俺の全魔力を使ってこの世の  
全てを、、、まとめて破壊し尽くしてくれるわーーーーー!!!」

め「っ、、、　もう魔力が、、、」

ダ「めぐみん！大丈夫か」

アズマ「ダクネスめぐみんを頼む　あとは俺たちに任せてくれ」

ダ「アズマ、、、　ああ　頼んだぞ」

アズマが覚醒状態になりデイニラスに

接近する

アズマ「さあ！決着をつけようぜ」

デ「勝つのは、、、　この俺だーーーーー!」

アズマ「デイニラス！　お前を止められるのは、、、　俺たちだ！

(私たちよー!」

デ「ほぎけ！この世界の塵となれ！

ブレイク　ボール!!」

アズマ「そうはさせるかよ！

めぐみん、、、　使わしてもらうぜ



アークデーモン「グルアーーーーー！」

アズマ「ちい 厄介な、、ん？」

オ「うおおおおおおお!!」

オーバーがアークデーモンを殴る

アズマ「オーバーさん！（オバニー！）」

オ「こいつは俺がやる!! お前らはディニラスをやってこい！」

アズマ「！分かりました！」

デ「ちい！ 死に損ないが！」

アズマ「よそ見すんなー！」

デ「！」

フォースバスターーーーーー！

そして ゴツドレクイエムーーーーー！

デ「ぐあアア!! ギィ、、おのれー！」









## 最終回 この素晴らしい世界よ永遠に

この素晴らしい世界よ永遠に！

?? side

カ（ここは、、、なんだディニラスは倒せたのか、、、くっそも見え  
ない、、、あいつらは無事なのか、、、）

? 「お、カズ、かり、、、ろ！」

カ 「誰かの、、、声?、、、」

じゆ 「カズマ！ しっかりしろーーーーー！！」

カ 「、、、、いだいだいだい!!

ちよ！だからなんで頬引つ張るんだよ！さっきまで戦ってた人に  
！」

じゅ「あつはは 悪いな」

カ「ジュンがいるってことは、、、ここは心の部屋ってことか？」

じゅ「ああ お前はディニラスとの戦いで魔力を使い果たして気絶してるってとこだな」

カ「なるほどな、、、ん？なあ あつちに誰かいなか？」

じゅ「はあ？ここは俺たちの空間だぞ？他の誰かが来れる訳、、、?!」

ジュンがカズマが指さした方へ視線をずらした時

そら

彼女がいた

そ「、、、ジュン！、、、ジュン！」

そらはジュンを見つけた直後にまっすぐ走ってきた  
タ「、、、そら、、、なのか？、、、そら！」

じゅんもそらを見つけた直後に走り出し そして 抱き合った

カ「そらつて、、、確かジュンの幼なじみだつて言つてたあのそらか？  
でもなんでこんなところに」

ア「多分私がいるからよ」

カ「アクア、、、でもなんの関係が、、、

あー、、、何となくわかつた」

ア「そう、、、カズマさんの思っている通り 私はそらの生まれ変わ  
りだつたの」

カ「んで俺もじゆんの生まれ変わり、、、んで合体してる今 この心  
の空間が共有されて奇跡的に出会えたつてことか？」

ア「そういう事ね」

ジュ「ごめん、、、ごめんな、、、あの時俺を庇つて、、、俺が守つてや  
るつて言つたのに、、、」

ジュンは泣きながらそらに謝罪をする

そ「いいの、、、いいのよジュン、、、私の方こそ、、、先に死んじやつ  
て、、、ごめんなさい」

俺たちは今は2人だけにしてあげようと少し距離を取つた

数分後

ジュ「、、、すまなかつた取り乱してしまつて」

そ「ごめんなさい」

ア「いいのよ せっかく再開できたんだから」

ジユ「そうか、、、 そうだカズマ 礼をいうよ

「デイニラスに決着をつけてくれたこと」

カ「いいってことよ 俺もあいつには因縁があつた訳だし それに俺だけじゃ勝てなかった アクアやめぐみんダクネス オーバーさん達、、、そしてジユン達のおかげで勝てたんだからこちらこそありがとう」

ア「そらもありがとね 色んなこと教えてくれたもん」

そ「いいのよ お礼なんて」

とその時俺は体の異変に気づく

カ「、、、ん?あれおいアクア?!俺たちの体透けてきてんぞ?!」

ア「え?、、、てぎゃー?!なんで!」

ジユ「おそらく2人の意識が現実世界で覚めるからだと思う」

カ「でもなんで2人の体も消えて来てるんだ?」

じゆ「ほら 俺は、、、ある意味とりついていた怨霊みたいなやつだからデイニラスを倒した、、、そらに会えた、、、もう悔いなんてない だから成仏するだろう」

そら「ええ 私ももう悔いはないわ」

ア「そら、、、」

カ「じゆん、、、」

じゆ「カズマ、、、最後にもう一回お礼言うよ

ありがとう カズマ もう一度そらに会わせてくれてデイニラスに決着をつけてくれて、、、ありがとう」

そ「アクア ありがとうね」

そして2人は抱き合いながら  
光に包まれ消えていった

ア「幸せそうだったわね」

カ「ああ、、、 そうだな」

カ「さて、、、 俺達も帰るか 仲間のところ」

ア「ええ、、、 えい！」

アクアはカズマの腕に抱きつく

カ「のわ！ アクア！なんで俺の腕に抱きつくんだよ」

ア「いいじゃない 今はそういう気分なの！」

カ「はあ?!、、、 はあ たく、、、

しようがねえな 握ってていいよ」

ア「ありがとう、、、 カズマ」

今だけは、、、いいよね

そして俺たちは現実世界に意識をうつす

アズマ「うう、、、」

ダ「お！ 目を覚ましたぞ！」

め「2人とも！ 大丈夫ですか？」

アズマ「ん、、、うーん めぐみん、、、ダクネス、、、」

め「大丈夫なんですか？ 戦いの後すぐに倒れてしまったので」

アズマ「ああ、、、心配かけたな 誰か、、、魔力を分けてくれないか、、、魔力切れになっちゃって」

ダ「私のポジションが残っているこれを使ってくれ  
ところで、、、勝ったんだな、、、私たち」

アズマ「ああ (ええ) 勝ったぞ (わよ)」

アズマは満面の笑みで答えた

め「それにしても、、、ほんとに合体してるんですね 髪は青なので  
アクアからでしょう 目は緑なのでカズマからですかね」



ダ「言葉通りカズマとアクアが合わさったような感じだな」

ド「おーい カズマ!!」

アズマ「おお！ドワーさん どうしてここに」

ド「リミル様に頼んでここに来させてもらったんだ ……と  
ブレスレット役に立ったようだな」

アズマ「はい！まさか合体できるとは思いませんでしたよ」

リ「前に言ってたじゃねーかポ○ラみたいなのを作ってみてくれっ  
てな

俺も興味本位で作ったんだが……まさか出来るとはなおもわなかつ  
たが

役に立ってよかった」

アズマ「ありがとうございます

……ところでドワーさん これさ……どうやって戻るの？」

ド「……その事なんだがな……そのブレスレット1度も試してない  
から……実は戻り方が分からねーんだ」

アズマ「……へ？」

(いやー…… いやよこのまま一生 合体したままなんてい  
やー！)

はあ!? こっちだつてやだよ！

なあ？ ドワーさん なんとかならないか!?  
どうにか戻る方法考えてくれよー！ー！ー！」

すると

ピキッ  
とブレスレットにヒビが

アズマ「ん？」

パリーン と音をたて

なんとブレスレットが割れてしまった

その途端アズマはアクアとカズマに分裂した

ア「うわ！」

カ「どわ！ 行ってー、、！ブレスレットが、、」

ド「あーやつぱ試作品だったからな 力に耐えられなかったんだろ  
う

まっ結果オーライだな無事に戻れて」

ダ「まあ、、これで問題は解決したな」

め「締まりませんねー、、ふっふふ」

カ「あつははは まあ俺らしいんじゃないかねーのかこんな終わり方も  
さ」

ア「そうね」

ダ「そうだな」

オ「おーい お前ら 無事か」

カ「オーバーさん！」

ア「オバニー！体はもう大丈夫なの？」

オ「ああ あんたら2人がかけてくれた魔法のおかげだな」

カ「そっか 良かったな アクア」

ア「ええ ほんとに、、、良かったア」

アクアはオーバーを見て泣いてしまった

カ「泣くなよ全く、、、ほんとに無事でよかったです」

こうして俺たちの全世界をかけた戦いは終わった

天界 s i d e

俺たちは今 天界の神殿の本堂に來ている

リミルさんや他の神様達が俺たちに直々にお礼をしたらしい

改めてこの世界の破壊を救ったんだな よくヒキニートがここま  
でできたよ

そして代表として俺がその感謝式に呼ばれることになった

オ「おーいカズマそろそろ行くぞ」

カ「分かりました んじゃ行ってくるな」

め「行ってらっしゃいはいです」

ア「行ってらっしゃいー」

俺は待ち合わせの部屋から出るそして本堂までオーバーさんが案内してくれた

本堂入口に立つとオーバーさんが

オ「最初に会った頃から、たくましくなったな カズマ」

カ「!! ありがとうございます」

俺はそう言われて嬉しかった

オ「さあ行ってこい」

カ「、はい!」

本堂に入ると何人のも神様たちがいた

、、こんな人数に見られるのは緊張するな、、

創造主「貴方がサトウカズマ殿ですね」

カ「はい そうでございます」

そしてこの場にいる神様たち全員が席から立ち 俺にお辞儀をした

創造主「この度は デイニラス教及びデイニラス討伐 我々神一同

より代表として お礼を言わせていただきます

まことに ありがとうございます

そしてこの暁として

3つなんでも願いを聞き入れましょう」

カ「なんでも、、、ですか」

創造主「ええ、、、なんなりとお申し付けください」

3つか、、、これは慎重に選ばないと、、、

カ「、、、じゃあ」

俺は本堂から退出しアクア達がいる所へ向かう

カ「ただまー」

ア「おかりー どうだった？」

カ「ああ 凄かったよ神様ってあんなにいるんだな、、、」

カ「あとよディニラス討伐のお礼として

なんでも3つ願いを叶えてくれるって言われてな」

め「おお！ー 何でもは凄いですね

、、、カズマが願うこととなると私欲的な願いをしそうですが」

カ「なっ！ 俺だって願いとなると真面目に考えるわ！、、、まあも

う3つは叶えてもらえてるんだけどさ」

ア「ええー 決めちゃったの！」

カ「お前に決めさせるとシユワシユワ一生分とかくだらん願ひにするだろ」

ダ「それで何を叶えてもらったんだ？」

カ「ああ、まず 1つは、」

俺の中から神の魔力を無くしてもらおうことだ」

俺がそう言うとアクア達は驚いた

ア「ええ！ そんな勿体ない!？」

め「いいのですか!?! せっかくの力を」

カ「ああ いいんだ デイニラスを倒した今じやこの力は俺にはダメすぎる」

め「まあそれがカズマの判断なら」

ダ「私たちは何も言うまい」

ア「ええー せっかくカズマが強くなって楽できると思ったのに」  
カ「、、、そういうと思ってたよ、、、つてかお前ももう結構な強さだろうが」

め「といつても カズマの魔力量は私の次に多いんですよ、、、」

ダ「弱くなったのかなってないのか、、、」

カ「そして、、、2つ目なんだが

入ってきてください」

ダ「？ 誰か呼んでるのか？

、  
!!  
」

部屋に入ってきたのは

エスパード「久しぶりだな、皆」

ダ「し、、 師匠、、 師匠なんですか、、」

エ「ああ私だ ダクネス」

ダクネスはエスパードに向かって飛び込み抱きついた

ダ「師匠！ 師匠！」

ダクネスは泣きながらエスパードを呼ぶ

め「カズマ、 2つ目の願って」

カ「ああ エスパードさんを含め今回のデイニラスの件で消滅して  
しまった人たちを蘇らせてくれるというのが2つ目の願いだ」

ア「でもママが前にデイニラスの魔法で消えた人ってリタイムでも  
無理だったって」

カ「ああ 実はデイニラスによって破壊された人たちの魂はある封  
印をされていたようなものだったらしい。それが原因で復活やら蘇



生ができなかつたらしい、そしてディニラスを倒したことで、その封印が解け、復活できるようになったってことらしいぜ」

ア「なるほどねー」

エ「お前たちの戦いあの世で見ていた、よく頑張ったな」

ダ「師匠、ありがとうございます」

め「そしてカズマ3つ目の願いって？」

カ「ああ、それは、秘密だ」

俺はアクアへ視線を送った

ア「！、、、そういうこと」

め「なんですか?! 2人だけ理解しているようですが、私は納得行きませんよ!」

3つ目の願い

これは俺たちにとりより

ある2人がいつまでも幸せでいて欲しいという願いだ

カ「さあ この後はホールに集まって宴会があるそうだ」

ア「ええ！ ほんとに！」

カ「ああ 今日はとことん楽しもうぜ」

ダ「行きましょう 師匠」

エ「ああ」

そして俺たちは一日中

天界でどんちゃん騒ぎをした

そして天界で数日過ごしたあと

俺たちは地上に帰ることになる

そして夜

カ「はあーさすがに疲れたな」

ア「Zzzz」

ダ「アクアも寝てしまったか」

ア「、、、まだー起きてるー、、、」

め「ほほ寝てますよ」

カ「、、、にしてもよ」

ア め ダ「？」

カ「俺たち、、、世界を救っちゃったんだな」

ア「、、、ええ」

ダ「そうだな」

め「ですね」

カ「、、、なんか改めて思うとよく俺たちで世界を救えたと思うよ」

め「何を言うのですか！この最強の魔法使いがいるのですよ！」

ア「そうよ！女神がいるんですから」

普通に世界を救えるメンツよ」

ダ「え、あ わ 私も、、、王女だから、、、その」

カ「ダクネス 無理に乗らなくてもいいんだからな」

ア「ねえねえみんな」

カ め ダ「？」

ア「この5年間って色々あったわけじゃない」

め「そうですね、、、あつという間ですよ」

ア「だからね地上に帰ったらその修行で使った5年間を取り戻すくらい楽しい生活をしましょうよ！」

ダ「、、、そうだな クリス達やゆんゆん達にも心配をかけたからな」

カ「だな よしお前ら！地上に帰ったらこの5年間の時間を取り戻すくらいの生活をしようじゃねえか」

と俺たちは和気あいあいとしていた

そして各々は各部屋に戻った

カ「ふう、、、」

カ（本当に俺たちはやったんだな  
、、それにしても 本当に色々あったな）  
自分の中で今までの出来事がフラッシュバックする

カ「、、さて 寝るか」

天界空間 s i d e

俺たちはリミルさんと共にエリス様がいる天界空間に来た

カ「ここまで見送ってくれてありがとうございます」

オ「いいつてこと 、、本当にありがとうな カズマ アクア め  
ぐみん ダクネス」

リ「ええ、、感謝してもしきれません」

カ「いいんですよ ほんとに では、、お別れですね」

オ「ああ この先お前たちと会うことは多分ないだろう まあ 天  
界に神として来るなら別だがな」

カ「あはは 考えときます」

フ「なんだか寂しくなってしまうですね めぐみんさん あっちで  
も頑張ってくださいね」

め「もちろんです！私の爆裂道に終わりはありませんよ！」

ネ「、、カズマ元気だな」

カ「ネバーさん、、本当にこの5年間ありがとうございました、、あ  
なたの教えがあったからこそここまで来れました」

リポカ「アクも元気だね」

ア「ええ リポカも元気でやりなさいよ」

エ「ダクネス お前は私の誇りの弟子だ 自分に自信を持って生きろ」

ダ「師匠、、、はい！」

リ「カズマさん アクアのこと頼みます」

ア「、、、ねえ 私の事子供扱いしないでよね」

カ「まあまあ、、、それじゃオーバーさん リミルさん エリス様皆さん、、、

本当にありがとうございますました そして

さよなら」

俺たちの体の中に浮きいつものように地上に戻ろうとするその時  
リミルさんが

プレッシングと言っていた気がした

地上 side

俺たちは2年前と同じようにアクセルの街の停留所に立っていた  
空は真っ暗で真夜中であつた

カ「2年ぶりだな、、、」  
め「ですね」

バ「ようやく来たか 小僧ら」

カ「バニル！よかつたお前も無事に復活したんだな！」

ダ「？なにを言う 吾輩は死んでおらんぞ」

カ「は？ だってあの時 完全に魔力が消えてたじゃねーか」

バ「ああ 吾輩くらいになれば自分の魔力のオーラぐらい隠せるわ  
それに見ろ 額の数が変わっていないだろう」

バニルの額にはまだⅢの数字が書いてあつた

カ「はあ?!、、、じゃあなんで」

バ「吾輩は未来を見通していた その先の未来ではお前たちはやら  
れていた だが吾輩がやられたところによりその怒りで小僧達の力は  
上がることに より 今の未来になつた」

ダ「つまりどう言うことなんだ」

バ「要するにだ 吾輩が死んだことになれば小僧たちの力が増え  
その結果やつに勝てる未来になったのだ そして地獄で感じていた  
が2人の力が格段に増えていたからな

フハハハハ！中々の名演技だったであろう それにしても汝が吾  
輩のことをそくんなに心配するとはな

おーっと！汝の悪感情、、、たいへん美味である」

カ「この、、、悪魔がああ！どれだけ心配したか！」

ア「全くよ！、、、もう」

バ「ふはははは！汝らの悪感情、、、いや、、、これは喜び、、、？」

め「全く、、、さて そろそろ行きましようか」

ダ「そうだな」

そして俺たちはギルドへと足を運んだ

カ「にしても、、、また街が静かだな」

め「ええ、、、どうしたんでしょう」

ダ「もう夜も遅いしな」

ア「でも見てギルドに明かりがあるわよ」

カ「、、、何かやってるのか？」

そしてギルド前に着き扉を開ける

すると

一同「おかえりー！ー！ー！」

いつせいにクラツカーのような物がギルド内に飛んだ

カ「！これは、、、」

ダスト「お前らー！よく帰ってきた！」

ゆ「本当に無事で良かったです」

カ「ダスト、、、ゆんゆん」

冒険者A「よくやってくれたぜ！カズマ！」

荒くれ者

「やはりお前達は本当の英雄だったようだな へっ！」

カ「みんな、、、」

ル「カズマさん この度はこの世界を2度も救って下さってありが



「とうございます」

カ「ルナさん、、、いや 俺達だけじゃないですよ ネバーさんやりポカさんから聞きました みんなが一生懸命戦ってくれたことを、、、この世界を救えたのはみんなの活躍があつてことですから」

ゆ「良かったわ めぐみん無事に帰ってきて」

め「あなたこそ よくやつてくれました それでこそ我がライバルですね」

とそこへ

ウ「皆さん ご無事で何よりです」

カ「!ウイズ ! ウイズもありがとな

この世界のために戦ってくれて」

ウ「お礼なんていいんですよ、、、それと私決めたことがあるんです バニルさんの代わりに、、、新しいダンジョンを作つてあげるつていう なので作るための費用を頑張つて貯めてこうと思うんです バニルさんのためにも、、、」

カ「あぁー、、、ウイズ?その事なんだかー」

ウ「?」

ウイズはきよとんとする

バ「ウイズ」

ウイズは聞きなれたあの声に振り向いた

ウ「!! バ、、、バニルさん!、、、なんですよね」

ウイズはわなわなと震えながらバニルを見る



ナギト「はあ、、、はあ、、、  
危なかった、、、何とかデーモン達を壁に

??  
s  
i  
d  
e

祝福を!!

して逃げれたが、、、だが この屈辱いつか晴らすぞ、、、」

? 「あ! ここにいやがったのか!」

ナ 「あ? なんだお前、、、人間か」

? 「ああ お前を倒しに来た」

ナ 「はあ? 貴様俺が誰か分かって言ってるのか?」

? (なあなあ! こいつ俺が倒してもいいよな!)

? 「待てよ バイス

俺たち、、、だろ?」バ (おっとそうでした!)

ナ 「なんだお前は、、、一体何話している!」

? 「うーん、、、

悪魔、ゝ、かな」

リバイスドライバー！

ナ「なんだそれは！」

バイス（なあなあ！早く変身してくれよー！

カズマ！）

カ「わかったって」

俺は懐に閉まっていたスタンプを取り出しボタンを押す

LEX！

カ「はああゝゝ」

俺はスタンプの印部分に息をはき

ベルトに押す

C o m e o n L L L L E X !  
C o m e o n L L L L E X !

カ「変身！」

B u d d y u p !

オーイング！ショーニング！

ローイング！ゴーイン

グ！

仮面ライダー！リバイ バイス

リバイス！

バ「はいよつと！ はい注目ー

こつちがりバイで 俺つちがバイス！

2人合わせて 仮面ライダーリバイス

覚えてねー！」

カ「バイス あまりはしやぎすぎるなよ」

バ「はいはい」

ナ「なんだ、そいつを召喚したのか」

カ「いくぜー」

バ「あいよ！」

ナ「お前らなど こいつらで十分だ  
ゆけ！ アークデーモン」

ナギトは悪魔を呼びその場を去ろうとする

カ「お こいつも悪魔を呼び出すのか」

バ「こんな奴ら 俺たちの敵じゃねーよ」

カ「ああ でもやりすぎるなよ！」

カ「はあ！ ふっ はあ！」

バ「はあ！ よっ！ はいここ通りますよー！！  
ジャンプ！からのー

いくぜー

しっぽー！」

しっぽを伸ばしアークデーモン達を吹き飛ばす

ナ「なに！」

バ「いえーい！俺っち最高！」

カ「おいバイス！あまり周りに被害を出すなって！」

ナ「こんなふざけた奴らに、、、

この俺が直々に手を下してやる！」

カ「沸いてきたぜ！ はあ！」

ナ「はあ！ きい へあ！」

カ「よっほっ はあ！」

カズマはナギトの攻撃を流し攻撃を食らわせる  
ナ「ぐはあ！、、、ちい」

バ「おーい カズマ もう悪魔は倒したよー」

カ「ありがとうな さて バイス  
あれ使うぞ」

バ「お！ 待ってました！」

ナ「次は何をする気だ、、、」

ベルトサイドからもう1つのスタンプを持つ

メガロドン！

カ「はあー、、、」

俺は再びベルトに押す

C o m e o n メガロドーン

C o m e o n メガロドーン

カ「はあ！」

B u d d y u p !

潜るドンドン！ ヨーイドン ドボン！

メガロドン！

通りすがりの ハ ハ ハ ハンター！





ドーーーーーン！」

2人のキックを受けナギトは爆発した

カ「ふう」

バ「いえーい みんな 俺っちたちの活躍見てくれた？」

カ「お前誰に話してんだよ」

バ「なあなあ カズマ 帰ったらよ

風呂入りてーよ！」

カ「はあ？ お前実体ねーから入れねーだろ」

バ「ここままでいーだろ？なあな

あ！」

カ「だあーもうわかったわかったから とりあえず帰るぞ」

バ「いえーい」

この素晴らしい世界に祝福を！

仮面ライダーバイス

×

この素晴らしい悪魔ライダーに契約を！

そして！

このすばりバイス×リトすば

長編二次小説 執筆決定！

## 後日談

最終回を迎えて作者とカズマ達が語り合う

どうも花タフです

今回はですね リトすばが終わったということとその記念に

カズマ達と話していこうと思います！もちろんゲストはこの人たち

カ「どうも カズマと」

ア「アクアです」

いやーお疲れ様でした お2人方

カズマさんと、アクアさんに来てもらいましたー

カ「いやー遂に終わっちゃったのか」

ア「長いようで短かったわよね」

初めて投稿したのが2月でしたもんね

そこから8ヶ月ちよいで今回の最終回となりました

ということですが今回は実はこんなことも考えてたという没案や豆知識などを話していこうと思います

まずはこれ！

この話って分類だとカズアクなの？

カ「まあ俺達も思うけど 確かに関わることは多かったしなんなら最後は俺達が決めてたからな」

ア「作者的にはどうなの？」

確かに分類としてはカズアクにはしたいけど 別に他の方のカズアクと違って恋愛シーンを入れるということはしてなくて

どちらかと言うと相棒とか相方と頼れる関係性を主軸に書いてましたね

カ「あと個人的に思ったこと聞いていいか？」

なに？

カ「この物語ってさ どこかの章で俺たちパーティの誰かが主軸になることってあったじゃん」

うん

カ「めぐみんを主軸にしてた話ってなかったと思うんだけど、、」

うん、、それはおれも思った この物語いかんせんめぐみんが影が薄いんです 本当に戦って修行して爆裂魔法を打ってたって感じなんです 脇役みたいになってしまっ

ア「その分私やダクネスについて書くことは多かったわよね」

自分としてはめぐみんも活躍してる話を作りたかったんですが、、いかんせん話が作れず めぐみん自体本編でも相棒ってよりも恋人に近いんで、、このバトル風このすばには恋愛要素を入れる隙がなかった

カ「なるほどな、、その分 めぐみんのすごいことが、、」

ア「何か言った？」  
カ「いや なにも」

次に話すのはこれ

カズマ アクアが合体するのって決まってたの？

決まってましたね

カ「即答かよ」

でも合体あるあるなんですけどだいたい両者の力が同じぐらいじゃないと出来ないじゃないですか

カ「あー確かに」

ですので この物語の序盤でカズマを強くした

その分アクアとの合体でも両者が同じぐらいの力なので  
合体の流れに行けたということですよ

ア「まんまゴータ」

それは言わないで

そして次はこれ

最終戦の豆知識

カ「豆知識？」

そう最終戦のあとがきでも書いたんだけどあの戦闘場面で Fantastic Dreamerを流しながら聞くとすごくエモくなる

ア「へえー」

そしてもうひとつ

アズマは設定上パーティメンバーの使える技を全部使えます

カ「そうなの！」

アズマはまずカズマ アクアが使えるのは使えます

そしてめぐみんのエクスペーション ダクネスの雷鳴剣の技

1人のキャラが仲間の技を使って敵を倒すっていいですよ

このすばの世界で全部を使えるのって冒険者だけじゃないですか？

ア「なるほどねえ」

あともうひとつ あのアクアがバリバリ近接戦をやっていることについて

実はこのすばのWeb版だとアクアは近接攻撃スキルを持つてるんです 書籍では消えてるんですが アクアの近接戦はそこから取ってます

## 後日談 あれから8年後

### 後日談

この書は冒険者 サトウカズマの伝書を記す

かつては冒険者登録に最弱職の冒険者を選び魔王退治を志していた

この男が魔王なんか倒せるのかと、

誰もが思っていた

だが彼の策士の技術はたけており

パーティがどれだけポンコツだろうが

使いこなし あまたの魔王軍幹部を葬った

そしてついにこの世界の魔王をタイマンで倒すという偉業を成し遂げた

だがこの世界に新たな敵が現れる

その名はデイニラス この世界の創造神にして破壊神 黄泉の神

であったもの

さすがのサトウカズマ一行のパーティも窮地に落とされた だが

奇跡が起き

アズマが生まれ パーティの協力もありついにデイニラスを葬った、

その後カズマパーティー一行はアクセルの街に住み 長く幸せに暮らしたとき。



アクセル side

め「、、、ですって」

カ「、、、なんかすげーな俺らパーティがそんな感じで記録として残されるなんて」

ダ「今じやアクセル 紅魔の里 アルカンレティア 王都に 各一人ずつの銅像が建てられるらしいぞ ちなみに私は王都に建てられるんだとか」

カ「だろうな、、、んで多分だが紅魔の里はめぐみんアルカンレティアはアクア アクセルは俺、、、だろうな」

ここはアクセルの街にあるひとつの飲食店

あれから数年がたったとして 俺たちは冒険者稼業を引退し アクセルの街でお店を開くことにした 案の定店は大繁盛 元々そういうのが向いてると言われていたが自分でもここまでなるとは思っていなかった 魔王や破壊神を倒した勇者が構える店、、、という肩書きがあるからというのものもあるかもだが

今はパーティ一行でこの店の営業をしている 基本的に料理は俺とめぐみん

ウエイトレスはアクアとダクネスだ

め「!、、、今気づいたのですが、、、この本の執筆者、、、」

カ「ああ アクアだ 正確にはアクアが語ったものがあるえが出したって事だな」

ダ「やはりか、、妙に書き方に見覚えがあったが」

カ「全く、、お 噂をすれば」

とカズマ達が扉を見ると

ア「ただいまー！ さああなた達 ちゃんと手を洗ってきなさいよ」

?? 『はーい』

カ「お！おかえりアクア

じゅん そら」

俺達の子が帰ってきた

2人は帰ってきた途端カズマに抱きつく

じゅ「お父さん！ただいまー」

そ「ただいまー あのね お父さん 私ねすっごいの見つけたの！」

カ「お？ 何を見つけたんだ？」  
そ「これ！」  
とそらが俺に出してくれたのは

蒼 緑 黄 紅 の色をした

綺麗な4つの鉱石のようなものだった

カ「すごいきれーだな！ どこで拾ったんだ？」

そ「んとね 川で拾ったんだ」

じゆ「僕も手伝ったんだよ」

2人は胸を張りドヤ顔をしていた

カ「そうかー すごく綺麗だな」

と2人の頭を撫でながらカズマは2人を褒める

そ「これね お父さんとお母さんとみんなにあげる！」

め「いいんですか？ せっかく自分で見つけたのに」

そ「うん！ 色も全員にぴったりなんだもん」

カ「ありがとな 2人とも」

そ「えへへ」

緊急警報!! 緊急警報 !! 冒険者の皆さんはすぐに来てください

ダ「む」

め「おや」

ア「あら」

カ「ん、、、」

そ「なにになに?! こわい、、、」

ア「大丈夫よ そら じゅん」

カ「、、、なあそら じゅん お父さんたちちよつと行ってくるよ  
それまでこのお店を守って欲しいんだ お留守番できるか?」

そ「、、、うん! できるもん」

じゅ「僕も!」

カ「そうか アクア めぐみん ダクネス 行くぞ 、、、ん  
じや行ってくるな」

そ じゅ 「行ってらっしゃいー」

とカズマ達はそらたちに手を振り店を出た

カ「さて、、、我が最愛の子供らを泣かせる奴らはどいつだ、、、」

め「カズマが俄然やる気ですね」

ダ「ああ、、、あの目は本気が目だ」

そしてカズマ一行はアクセルの門の前に向かう

「だあっひゃひゃひゃ　、、　俺はタロクス　新たな魔王軍の幹部の人だ!!こんな初心者しかいない街を襲うのは気が引けるが　魔王様の命令だ　兵士よかれー！」  
とアンデットの集団がいつせいに襲いに来るその時

カ「エクспロージョン！」

ドゴーーーーー

どこからか爆裂魔法が飛んできた

タ「なに!?我がアンデッド兵が」

カ「たく、、なんでこうもこの街は危機に侵されるのか、、そもそも俺行かなくてよかったのか、、冒険者稼業やめてたし、、」

め「まあ、、今更戻ってもどうしようもないですよ」



ギルドside

カ「どもー」

ルナ「あ！ カズマさん ちょうどよかったです 今この街に魔王軍の幹部が」

カ「ああ、、倒してきましたよ」

冒険者一同「ええええええええええええ!!」

ルナ「ほ、、ほんとにですか」

カ「はい ほらカードに記録があるでしょう」

俺はルナに冒険者カードを渡す

ルナ「!!ほ、ほんとに倒してますね、、ですがなぜもう冒険者を辞めたカズマさん達が、、」

め「まあ色々ありました」

ア「あれほど怒ったカズマさん久しぶり見たわよ」とそこへ

ダ「相変わらず奇想天外なことしてくれるな カズマ」

ゆ「ですね、、ほんとにすごい人ですよカズマさん」

とそこにダストゆんゆんが寄ってくる

カ「よっ ダスト ゆんゆん そういや

一児生まれてから結構経ったか

おつきくなったか？」

実はゆんゆんとダストは俺たちが天界にいた時に付き合い始めたらしい

そのことを知ったのは最終決戦を終えてかえってきからだった俺も驚いたが一番驚いてたのはめぐみんだったな

ダ「ああ ありがとうな そうなんだよ 顔はゆんゆん似なんだがな 目は茶色と紅のオッドアイなんだよ オッドアイのことゆんゆんの親父さんに言ったら紅魔の里の感性に響く！、とかわれたよ」

カ「そ、そうか」

大変だったんだな、

め「あなたもすっかり母親ですね ゆんゆん」

ゆ「母親になっても私たちはライバルだからね めぐみん あほーら ユズト

めぐみんよー」

とユズトはゆんゆんに抱っこされながらめぐみんに手をじたばたさせる

ユズト「あう、あうあ」

め「／＼可愛いですねー あの二人もこのぐらい小さな頃がありましたね」

カ「そうだなー 子供の成長って早いな」

そこから小一時間話し俺たちはギルドを後にし店へ戻る

カ「ただいまー」

じゆ そ 「おかえりなさいい」

カ「よーしよし 2人ともちゃんとお留守番できたか？」

ジユ「うん！ちゃんとできたよ」

そ「私も！」



め「偉いですねー ではご褒美に2人の大好きなホットケーキを作ってあげましょう」

ジュ そ 「わーい！」

そしてその日の夜

カ「ふう、、、」

俺は屋敷のベランダの手すりに寄りかかっていた  
ア「カズマさん隣いい？」

カ「ん？おう」

ア「あの二人ももうあんなにおつきくなったわね」  
カ「そうだな、、、 あれからもう8年か、、、」

ア「そうね、、、」

あれから地上に戻ってからはほんとに大変だった  
地上に帰って宴会後すぐに王都に呼ばれ  
世界を2度も救った英雄と評してくれた

そして国から多額のエリスを貰えることが出来た その額100  
0億エリス

だが俺たちはその5割を国の復興や国の支援に使ってくれと渡した。残った500億エリスは戦ってくれた冒険者たちに500万エリスずつ配布した。

んで結局俺たちに入ってきたのは数億エリス。元々魔王を倒したこともありそのエリスもあつたからまあいいだろう。そしてその金を使いあの店を建てた。

その後は前の時のようにギルドや王都の城でのパーティや宴会三昧。そこからは今まで道理の生活には、と言いたいが色々と面倒なことは続いた。英雄と称えられるのはいいが、インタビュの人や記事を書く人がぞろぞろと屋敷に群がってきた、。

ダクネスも他の貴族のお見合いが魔王を倒したあとよりも、もう全男の貴族がダクネスにお見合いをしたのではないかと思うほどの見合いの数だった、。

その時のダクネスはほんとにやつれていたな。師匠の修行より大変かもしれないと言ってたっけ。

めぐみんも紅魔族の英雄と称えられている。

今じゃ紅魔の里は英雄が生まれ育った里というのを利用というのはあれだが。

色々観光名所で商売を始めてるらしい。

ゆんゆんも族長として頑張っているそうだ。

アクアにいたっては、特に変わったことは無かった。

たまに天界に行って仕事をしてきたり。

オーバーさん達にあつて俺たちの話をしてるとか何とか。

そして俺が地上に戻って驚いたことはふたつある。

1つはアルカンレティアだ。もともとやばかった街だが、今じゃ

すごくいい街らしい。なんとあの悪質な宗教勧誘が無くなったとか。これはアクアがアクシズ教の教義を変えたらしいのだが、本質は変わっておらず。ただ相手のことを思って行動して、ということをかいたとアクアは言っていた。これも知能が上がったからかこの教義を

追加したのだろう

2つ目はアクシズ教とエリス教が仲良くなっている

アクシズ教の宗派が前よりまともになったことによりエリス教の人達がアクシズ教の人たちのことを見直したらしく仲良くなったとか

アイリスももう立派な王女として王都をまとめているんだとか

そしてこの国では魔王を倒した勇者は王女との婚約ができるのだが俺は断ってしまった

現在アイリスはあのミツルギと

まずはお付き合い的な感じをしているらしい

アイリスを泣かしたらあいつを半殺しにしてやろうかと思ってる

それが兄ちゃんとしての役割だ、

カ「天界の人達も元気かな」

ア「元気でやってるわよ ドワーさん

神器開発の最高責任者になったんですって」

カ「マジか！、、すごいな あの人」

ア「ねえ カズマ」

カ「？なんだアクア」

ア「もし、、さ またデインラスみたいな奴らが この世界を襲ってきたら どうするの？」

カ「、、正直言う俺は面倒ごとはやりたくないよ 、、ただお前

らと この世界を守るためならな、な、なんでもやるつもりだ」

ア「随分キザなこと言うようになったじゃない 昔のカズマさんじゃ絶対そんなこと言わないわよ」

カ「あっはは 確かにな」

め「何話してるんですか？」

ダ「やあ どうだ2人ともお茶でも」

と2人もベランダに来た

カ「めぐみん ダクネス 悪いなあこの二人の寝かしつけを頼んで」

め「いいんですよ 昔こめつこのことを何度か寝かしつけたことがあつたので」

ダ「ああ 、、今日は星が綺麗だな」

め「本当ですね そういえば今日は流星群が降るらしいですよ」

その後

夜空の景色にピカッと流れる星が写る

ア「あ！ 今流れ星流れた！」

カ「ほんとか！ おおー流星群じゃねーか」

め「綺麗ですねー」

ダ「そうだな」

カ「なあ 次流れ星流れたら願い事いってみようぜ」

ア「いいわね やりましょう！」

カ「！ 来たぞ」

この幸せな時間に

この幸せな生活に

この世界に

この素晴らしい世界に

祝福を！

リトライwonderf

ul  
World

「完」

アナザーエンディング

カズマ達パーティのステータスを5年前に戻してもらおう

そして地上に戻り今までのようにクエストを受けようとする

がジャイアントトードに追われ苦戦する

ダ「くう／＼／＼、ぬりゆぬりゆすりゆ」

め「あのすみません助けてくれま クパツ」

ア「だずげでえくガジュマしやくくん！」

カ「あーもうなんでこうなるんだよー！ 力戻すんじゃないかったく  
くく！」

そして最終回のエリスの流れになる

あとがき

この度はリトライ wonderful World

この素晴らしい世界に祝福を！

を読んで下さり誠にありがとうございます。

自分の中でこのすばの二次創作はこれが初めてでした。なので文脈やキャラの性格にブレがあったりなどあったかと思えます。ですがこの作品を最終回まで行けたのは読んでくださる皆様がいるからです。

それでは次作のこの悪魔ライダーに契約をでお会いしましょう  
それでは、、、

## 実はこんなことも考えていた裏設定集

どもリトライの方ではお久しぶりです花タフです  
さて今回は実はこんなぼつ設定や裏設定があったというお話をし  
ていこうかなと思います。

では1つ目

実はデイニラスの正体がアクアの父になるかもしれないなかった

はい このリトライの話ではアクアには実母のソリアそして義母  
のリミルがいますね ですが実は本編ではソリアの父親について語  
られていませんでした

余談なのですがもともとデイニラスは悪霊や霊などの物体ではな  
く概念的な存在にしようか悩んでいました

そして1度でた案が

実は昔霊としてさ迷っていたデイニラスがアクアの父に乗り移り  
デイニラスとして暴れていた という案が出たのです

その場合の決着のつけかたなんかも考えていました  
アズマが出てくるのはもとより確定していました

そこでアズマによってアクアの父とデイニラス霊体を分離し  
ゴットレクイエムバスターでとどめという流れになっています

ですが 急に父の話となると急展開な気がしたのでやめときまし  
た

そして2つ目



実は天界にでてきた神達のうち誰かが裏切り者になっていた

実はこのような案も考えていました

そしてその対象となっていたのは

ネバーとフレアです 本編ではカズマとめぐみんに修行をつけてくれたお2人です

仮にこの設定が継続していたら裏切り者告発は天界襲撃の時になりました

もともと天界に悪魔たちが襲ってくるというのは裏切り者が今潰した方がいいとナガトなどに密告したということになっていたのです

ですが敵が明らかかなヤバイやつら集団なので味方は全員味方として行きました

でも話としては盛り上がりそうではありますよね？

そして3つ目

後日談の設定

後日談は本編から8年後となっています

ですが元々は カズマ達パーティーが神となり天界を見下ろしてそれぞれの先祖を見ていくというお話になるかもしれないでした

そして最後に天界として神になりパーティー一同幸せに暮らして行ったという終わり方にしようかなと言う考えがありました

そしてここからは裏設定集！

その1

めぐみんとダクネスは実は1割ぐらい神の魔力を持っている  
アクアやリミルなど本当の神の魔力と比べると薄いですが  
ほんのちよっぴり持っています

その原因は5年間天界で修行し神と長く暮らした為

その2

後日談のそらとじゅん

後日談に登場したカズマ達が育てている2人の子供

この2人は紛うことなきそらとじゅんの生まれ変わりです  
ですが皆さん疑問に持つのが

この子らはカズマと誰の子なのかもしや養子なのか、拾い子なの  
か、そこは皆さんのご想像にお任せします

その3

この物語はカズマとアクアを中心として話を進めていた

その分2人がダクネスやめぐみんよりも強くなってしまったとい  
う、だってカズアク好きなんだもん 確かに恋愛的な感じもい  
けど 自分が書きたかったカズアクは仲間としての友情 そして相  
棒としてのカズアクを書きたかったのです

今回はここまでです もし聞きたい情報がある方はコメントの方  
へ

次にリトライカズマ達に会えるのはリバイスとリトライの合作の  
その時まで！ではご愛読ありがとうございました！

Another story編  
Another story 5年間の地上

リタイムによって戻された 5年前

ゆんゆん「…、よし カズマ達へのお土産の準備はバッチリ  
めぐみん 今日こそ勝負するんだから」

今日こそ決着をつけるべく ゆんゆんはカズマパーティのいる屋敷へと向かった

ゆ「今日はなんの勝負にしよう…、この前はあっち向いてホイ  
その前が叩いて被ってジャンケン…、」

とココ最近の勝負内容を思い出しているうちに屋敷前へとたどり着くゆんゆん

ゆ「っ 着いたわ つんん た たのもー！」

、  
、  
、

特に返事は無い

ゆ「あれ？ いない？ …、でもギルドにもいなかったし  
きつと聞こえなかったのよ 大きい声で」

そしてゆんゆんは息をすい  
ゆ「たのm」

その時だった 屋敷の1部の部屋から突然光が溢れ出してきたのだ

ゆ「ええ!？」

動揺するゆんゆん それと同時に何か胸騒ぎがした

ゆ「何があったのよ、、、めぐみん!」

呼びかけても返事は無い

ゆ「ごめんなさい お邪魔します!」

ゆんゆんは柵を越え屋敷へと侵入した

屋敷内

ゆ「め めぐみん! さっきの光って」

屋敷に入ったが その屋敷には誰もいなかった

ゆ「あ 、、あれ?」

ゆ「ダクネスさーん アクアさーん カズマさーん めぐみんー  
いたら返事してください」

しかし返事はなかった

ゆ「なんだったのよあの光、、転移魔法? テレポートだったのか  
な?」

と悩ますゆんゆん

ゆ「、、ん? これって」

とゆんゆんが気づいたのは 出しっぱなしの料理

ゆ「これ 見たところまだ新しいわね、、」

再び胸騒ぎがする

ゆ「いったい、、何があったの、、」

ギルド

ルナ「カズマさん達の屋敷から光が？」

ゆ「そうなんです！」

ル「光ですか、、、フラッシュなどの魔法なのでしょうか、、、」

ゆ「そうなんでしょうか、、、でもなにか妙だったんです」

ル「妙？」

ゆ「屋敷の中を見た感じ 寸前までいたような形跡があったんです」

ル「痕跡ですか、、、」

ダスト「なんだ？ゆんゆん 何かあったのか？」

ゆ「ダストさん、、、実は」

ダ「カズマ達がいなくなったただあ？」

ゆ「い いなくなったかは 分からないんですけど  
、、、もしかしたらという」

ダ「いやー、、、どうだろうなあ結構あいつらふらつと行くからなあ」

ゆ「確かにそうですけど、、、」

ダ「それに カズマのやつはテレポート使えるんだろ？」

その光ってやつもテレポートのやつなんじゃないか？」

ゆ「そう言われるとそうだったのかしら」

ル「まあまあもしかしたら まだこの街のどこかにいるかもしれせ

るので」

ゆ「そ そうですね ちょっと探してみます」

そしてギルドをでて街の中を散策した

ウイズの店

ゆ「おじゃまします」

ウイズ「いらっしやいませ あっ！ゆんゆんさんいらっしやいで  
す」

バニル「へいらっしやい ぼっち娘よ」

ゆ「ぼっ ぼっちじゃないです！ 最近はふにふらやどどんこ達と  
里のことについて色々やってるんです！」

バ「ふーむ 相変わらず良い悪感情 美味であるなあ」

ウ「まあまあバニルさん はい、ゆんゆんさんこちら お茶になり  
ます」

ゆ「あ ありがとうございます。」

バ「それにしても ぼっち娘よ 何やら考え事をしていないか？」

ゆ「そ そうだ ウイズさん カズマさん達がここへ来ませんでした？」

ウ「カズマさん達ですか？ ココ最近は見えてないですね」

ゆ「そ、そうですか」

ウ「何かあつたのです？」

ゆ「実は、、、」

ウ「なるほど、、、謎の光ですか」

ゆ「はい その光がなにか気になってて」

バ「、、、ふむ ぼっち娘よ ちと屋敷まで来てくれ」

ゆ「へ？」

バ「すこし気になることがあつてな 貧乏店主 お主もこい」

ウ「ええ お店はどうするんですか」

バ「安心しろ 店番の代わりはこやつにやらせる」

バニルは指パッチンをすると 地面から土を生み出し  
もう一体のバニルを作り出した

ウ「まあ！分身を作り出せるようになったんですね！」

バ「我輩とで暇な時は 効率を考えて技を作るのだ 店は一旦こやつに任せよう」